

# 谷原遺跡 I

一町道 24 号山下山寺線道路改良工事に係る発掘調査報告書一



谷原道路 1 次調査 A 区で発見された平安時代の大瀝路（東から撮影）

平成 28 年 5 月

宮城県亘理郡山元町教育委員会



## 序 文

山元町は古くから身近に豊かな海と山を擁し、人々は恵まれた自然の中で生活を営んできました。その足跡は埋蔵文化財として、町内各地に散在しております。埋蔵文化財は、文献などには記録されていない地城の歴史を解明できる貴重な歴史資料であります。これらの遺跡は、先人が残した生活の証でもあり、かけがえのない文化遺産として将来の人々に継承するとともに、現在の生活の中において積極的に活用していくことが、私たちに課せられた責務であると考えております。

しかし、土地利用と深く結びつきの強い埋蔵文化財は、絶えず開発事業によって破壊・消滅の危機にさらされております。このため、当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

今回の谷原遺跡の調査は、山元町山寺地区の町道 24 号山下山寺線道路改良工事に際し、事業主との協議・調整に基づき、平成 20 年度に当教育委員会が実施したものであります。今回の発掘によって、縄文時代・古代・中世と考えられる人々の生活の跡が確認され、山元町の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、この調査成果を収録したもので、地域における歴史解明の資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力をいただいた関係機関の方々、また、直接調査にあたられました皆様に心から感謝申し上げます。

平成 28 年 5 月

山元町教育委員会  
教育長 森 憲一



## 例　　言

1. 本書は、宮城県亘理郡山元町山寺字谷原地内に所在する谷原遺跡（1次調査）の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、町道24号山下山寺線道路改良工事に伴う事前調査として行ったものである。発掘調査・整理作業・報告書作成に係る一連の業務は、調査原因となった事業主体者である山元町まちづくり整備課から執行委任をうけた平成20～28年度に業務委託を受けた山元町教育委員会が実施した。
3. 本遺跡の発掘調査と整理作業は、山元町教育委員会が主体となり、文化財担当部局のある生涯学習課が担当した。谷原遺跡（1次調査）の現地発掘調査を行った平成20年度・報告書刊行を行った平成28年度の上半期の職員の体制は下記のとおりである。

〔平成20年度〕

教　育　長	横山　俊二
課　　長	阿部　英一
班　　長	岩佐　洋一
主　　査	齋藤　哲
主　　事	菊地　里奈　森　慎一郎　山田　隆博★
発掘作業員	阿部　大、太田　千佳子、小野　正文、作間　拓也、閑沼　邦彦、寺嶋　嗣徳、寺嶋　満、増川　悠記、三浦　利伸、三戸部　美恵
整理作業員	太田　千佳子、小野　正文、作間　拓也、閑沼　邦彦、寺嶋　嗣徳、寺嶋　満、増川　悠記、三浦　利伸、三戸部　美恵

〔平成28年度上半期〕

教　育　長	森　憲一
課　　長	齋藤　三郎
班　　長	阿部　正憲
副　参　事	小瀬　忠司（任期付職員）
主　　事	山田　隆博★
主　　事	清水　勇樹（任期付職員）
技術副参事	星野　恵美（福岡県福岡市派遣/H28.4～9）
技術　主査	城門　義廣★（福岡県　派遣/H27.4～H28.9）
調査補助員	佐伯　奈弓★、千尋　美紀
整理作業員	渡邊　洋子★

4. 発掘調査・報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。  
　　村田　晃一（宮城県教育庁文化財保護課）、佐藤　洋（仙台市教育委員会）、日下　和寿（白石市教育委員会）  
　　藤田　祐（青森県埋蔵文化財調査センター）、宮城県教育庁文化財保護課、㈱クリワダ、山寺区（敬称略）
5. 石器の石材については、実測者が肉眼観察を行った。
6. 陶器の産地については、仙台市教育委員会の佐藤洋氏にご教示いただいた。
7. 現地発掘調査について、指揮・監督・写真撮影・平面図作成・土層断面図の作成を山田が担当し、現地作業を発掘作業員が行った。
8. 本書の整理・作成にあたり、遺物の洗浄・注記・接合・復元・拓本は、山田・佐伯が中心となり整理作業員がこれを助けた。遺物抽出については山田が担当した。  
　　遺物の実測図作成は山田、土器実測図のトレースは佐伯、石器実測図のトレースは城門が行った。  
　　遺構整理については、全般を山田が担当し、断面図トレース、データ入力・校正、図面修正・データ照合を佐伯・渡邊が行った。遺物の写真撮影・加工は㈱アートプロフィールに委託した。

9. 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。調査区の測量原点は以下のとおりである。方位は座標北を表している。なお、今回使用した座標値は、東日本大震災前の値を基本としており、震災後のX・Y座標の補正データは( )内の数値のとおりである。

(基準点の位置については第6図参照)。

Y16:X=-225592.958 (-225593.6314) Y=2919.722 (2922.7699) Z=25.597m (標高値)

※補正データの計算は、地殻変動に伴う座標値補正を行う座標補正ソフトウェア「PatchJGtouhokutaiheiyouoki2011.par」による。

10. 本書の第2図は、土地分類基本調査における1/50,000 地形分類図「角田」をもとに作成したものである。

11. 本書の第3図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000の地形図を複製して作成したものである。

12. 本書で使用した土色の記述にあたっては、「新版標準土色帖 2010年版」(小山・竹原 1973)を参照した。

13. 本書で使用した遺構略号は、「発掘調査の手引き」(文化庁文化財部記念物課 2010)を参考にし、以下の通りとした。

S B : 挖立柱建物跡、S K : 土坑、S D : 溝跡、S X : 焼成遺構、P : 柱穴・小穴

14. 出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。

A : 縄文土器、C : 土師器、E : 須恵器、I : 中世陶器、K : 石器

15. 遺構・遺物実測図の主な縮尺は下記のとおりで、それぞれ図中にスケールを付して示した。

調査区全体図：1/500、調査区部分図：1/100・1/200、掘立柱建物跡：1/100・1/200、

溝跡：1/80、土坑：1/40、焼成遺構：1/40、断面図：1/40・1/50、遺物実測図：土器類1/3、石器2/3

16. 遺物実測図において、土器類の実測図については、須恵器断面を黒塗り、その他の土器を白抜きとした。

また、黒色処理が施された土師器については、スクリーントーンにより示した。

17. 本書の出土遺物のうち、土師器については、成形にロクロを使用したものをロクロ成形・ロクロ土師器、ロクロを使用していないものを非ロクロ成形・非ロクロ土師器と呼ぶこととした。

18. 基本層序は、ローマ数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。

19. 標高は、水準点を基にした海拔高度で示した。

20. 遺構内の傾斜の部分は「TTT」、後世の擾乱は「撓」と表記し、その傾斜部は「=」で示した。

21. その他、発掘調査の方法等については、第Ⅲ章第1節にまとめた。

22. 本書の執筆・編集については、整理を担当した調査員の協議を経て、山田が執筆した。図版の版組は山田・佐伯・渡邊、編集は山田・佐伯が行った。

23. 発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料については、山元町教育委員会が保管している。

## 調査要項

遺 跡 名：谷原(たにはら)遺跡 (宮城県遺跡地名表登載番号14067 遺跡記号TH)

所 在 地：宮城県亘理郡山元町山寺字谷原

調査原因：町道24号山下山寺線道路改良工事に係る本調査

調査期間：平成20(2008)年10月21日～12月18日

調査対象面積：約2,300 m<sup>2</sup>

調査面積：本調査 約1,885 m<sup>2</sup>

調査主体：山元町教育委員会

調査担当：山元町教育委員会生涯学習課

山田 隆博 【山元町教育委員会 生涯学習課 主事】

調査協力：山元町まちづくり整備課、山寺区

# 目 次

## 序文

### 例言・調査要項・目次・挿図目次・表目次

<b>第Ⅰ章 遺跡の概要</b>	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 周辺の遺跡	1
第3節 谷原遺跡のこれまでの発掘調査	9
<b>第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過</b>	10
第1節 発掘調査に至る経緯	10
第2節 谷原遺跡(1次調査)発掘調査の経過	11
(1) 確認調査の経過	11
(2) 本発掘調査の経過	11
(3) 整理・報告書作成作業の経過	12
<b>第Ⅲ章 発掘調査</b>	14
第1節 発掘調査の方法	14
1. 現地調査	14
2. 室内整理	14
3. 東日本大震災に伴う埋蔵文化財専門職員の自治法派遣・短期出張による支援	15
第2節 基本層序	16
第3節 発見された遺構と遺物の概要	16
1. 掘立柱建物跡、その他の柱穴・ビット	26
(1) 掘立柱建物跡	26
(2) その他の柱穴・ビット	34
(3) 掘立柱建物跡、その他の柱穴・ビット出土遺物	45
2. 溝跡・土坑・焼成遺構	48
(1) 溝跡	50
(2) 土坑	55
(3) 焼成遺構	67
3. 遺物包含層(基本層出土遺物)	70
(1) 基本層Ⅲ層出土遺物	71
(2) 基本層V層出土遺物	71
(3) 基本層VII層出土遺物	71
4. 遺構外出土遺物	87

<b>第Ⅳ章 総括</b>	88
<b>第1節 出土遺物の特徴と時期</b>	88
1. 縄文土器	88
2. 土師器・須恵器	91
(1) 土師器	91
(2) 須恵器	92
(3) 土師器・須恵器の所属時期	94
3. 中世陶器	95
4. 鉄製品・製鉄関連遺物	96
5. 石器	96
<b>第2節 検出遺構の特徴と時期</b>	97
1. 今回の調査区(A～D区)で検出した各遺構の時期	97
(1) 掘立柱建物跡、その他の柱穴・ビット	97
(2) 溝跡	97
(3) 土坑	98
(4) 焼成遺構	98
(5) まとめ	98
2. 各時代の遺構の特徴と変遷	99
(1) 縄文時代の遺構	99
(2) 平安時代の遺構	100
(3) 中世の遺構	100
<b>第3節 まとめ</b>	102

## 註

引用・参考文献

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第 1 図	山元町と谷原遺跡の位置	1
第 2 図	谷原遺跡及び山元町内の地形分類図	2
第 3 図	谷原遺跡の位置と山元町内の遺跡分布	4
第 4 図	谷原遺跡調査所	13
第 5 図	谷原遺跡 1 次調査 (A~D 区) 基本層序	17・18
第 6 図	谷原遺跡 (1 次調査) 道構配置図 (全体図)	19・20
第 7-1 図	谷原遺跡 (1 次調査) 道構配置図 (1) -A・C 区①-	21
第 7-2 図	谷原遺跡 (1 次調査) 道構配置図 (2) -A・C 区②-	22
第 7-3 図	谷原遺跡 (1 次調査) 道構配置図 (3) -B・D 区①-	23
第 7-4 図	谷原遺跡 (1 次調査) 道構配置図 (4) -B・D 区②-	24
第 8 図	谷原遺跡 A~D 区 調査区全景	25
第 9 図	SBI~6 振立柱建物跡 道構配置図	27
第 10 図	SBI 振立柱建物跡	28
第 11 図	SB2 振立柱建物跡	29
第 12 図	SBS 振立柱建物跡	30
第 13 図	SBA 振立柱建物跡	31
第 14 図	SB5 振立柱建物跡	32
第 15 図	SB6 振立柱建物跡	32
第 16 図	SBI~6 振立柱建物跡 (写真図版)	33
第 17-1 図	谷原遺跡 (1 次調査) その他の柱穴・ビット 道構配置図 (1)	36
第 17-2 図	谷原遺跡 (1 次調査) その他の柱穴・ビット 道構配置図 (2)	37
第 17-3 図	谷原遺跡 (1 次調査) その他の柱穴・ビット 道構配置図 (3)	38
第 17-4 図	谷原遺跡 (1 次調査) その他の柱穴・ビット 道構配置図 (4)	39
第 17-5 図	谷原遺跡 (1 次調査) その他の柱穴・ビット 道構配置図 (5)	40
第 18 図	その他のビット・柱穴 断面図 (1) -P1~84-	41
第 19 図	その他のビット・柱穴 断面図 (2) -P98~128-	42
第 20 図	その他のビット・柱穴 断面図 (3) -P133~166-	43
第 21 図	その他のビット・柱穴 (写真図版)	44
第 22 図	振立柱建物跡、その他のビット・柱穴 出土遺物 (1)	46
第 23 図	振立柱建物跡、その他のビット・柱穴 出土遺物 (2)	47
第 24 図	振立柱建物跡、その他のビット・柱穴 出土遺物 (写真図版)	47
第 25 図	谷原遺跡 (1 次調査) SD・SK・SX 道構配置図	49
第 26 図	SD1・2 構跡 (1)	50
第 27 図	SD1・2 構跡 (2)	51
第 28 図	SD2 出土遺物	52
第 29 図	SD1・2 構跡 (3)	53
第 30 図	SD3 構跡	54
第 31 図	SK1~3 土坑	55
第 32 図	SK4 土坑	56
第 33 図	SK5~7 土坑	57
第 34 図	SK8 土坑	58
第 35 図	SK9~10 土坑	59
第 36 図	SK11~12 土坑	60
第 37 図	SK13~14 土坑	61
第 38 図	SK15 土坑	62
第 39 図	SK16 土坑	63
第 40 図	SK4・8・9・12~16 土坑出土遺物 (写真図版)	64
第 41 図	SK1~8 土坑 (写真図版)	65
第 42 図	SK9~16 土坑 (写真図版)	66
第 43 図	SK1・2 構成道構	67
第 44 図	SK3 構成道構 (1)	68
第 45 図	SK3 構成道構 (2)	69
第 46 図	SK3 構成道構 (3)	69
第 47 図	基本層 V 層出土遺物	72
第 48 図	基本層 V 層出土遺物 (1)	73
第 49 図	基本層 V 層出土遺物 (2)	74
第 50 図	基本層 V 層出土遺物 (3)	75
第 51 図	基本層 V 層出土遺物 (4)	76
第 52 図	基本層 V 層出土遺物 (5)	77
第 53 図	基本層 VIA 層出土遺物	78
第 54 図	基本層 VIA 層出土遺物 (1)	78
第 55 図	基本層 VIA 層出土遺物 (2)	79
第 56 図	基本層 VIA 層出土遺物 (3)	80
第 57 図	基本層 VIA 層出土遺物 (4)	81
第 58 図	基本層 VIA 層出土遺物 (5)	82
第 59 図	基本層 III・V 層出土遺物 (写真図版)	83
第 60 国	基本層 V 層出土遺物 (写真図版)	84
第 61 国	基本層 V・VIa・VIa 層出土遺物 (写真図版)	85
第 62 国	基本層 VIa・b 層出土遺物 (写真図版)	86
第 63 国	道構出土遺物	87
第 64 国	谷原遺跡 (1 次調査) 出土 主要織文土器集成図	89
第 65 国	谷原遺跡 (1 次調査) 出土 土器部集成図	92
第 66 国	谷原遺跡 (1 次調査) 出土 頸壺部集成図	93
第 67 国	谷原遺跡 (1 次調査) 出土 中世陶器集成図	95
第 68 国	谷原遺跡 (1 次調査) 出土 石器集成図	96
第 69 国	谷原遺跡 (1 次調査) 織文時代の道構配置図	99
第 70 国	谷原遺跡 (1 次調査) 平安時代の道構配置図	101

## 表 目 次

第 1 表	山元町遺跡一覧	5
第 2 表	谷原遺跡発掘調査箇所一覧	9
第 3 表	山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況（直接派遣）	16
第 4 表	山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況（宮城県藉由・出張扱い）	16
第 5 表	谷原遺跡(1次調査) 墓立柱建物跡(SB1～6)一覧表	27
第 6-1 表	谷原遺跡1次調査(A～D区)ビット・柱穴跡属性表(1) -P1～110-	34
第 6-2 表	谷原遺跡1次調査(A～D区)ビット・柱穴跡属性表(2) -P111～167-	35
第 7 表	谷原遺跡1次調査 墓立柱建物跡、その他の柱穴・ビット 出土遺物一覧	45
第 8 表	谷原遺跡(1次調査) 構跡(SD1～3)・土坑(SK1～16)・焼成遺構(SX1～3)一覧表	48
第 9 表	谷原遺跡1次調査 溝跡・土坑・焼成遺構 出土遺物一覧	48
第 10 表	谷原遺跡1次調査 基本層出土遺物一覧	70
第 11 表	谷原遺跡1次調査 遺構外出土遺物一覧	87
第 12 表	谷原遺跡(1次調査)出土遺物一覧	88
第 13 表	谷原遺跡(1次調査)出土石器・石材組成	96
第 14 表	谷原遺跡A～D区(1次調査) 主要遺構の所属時期	98

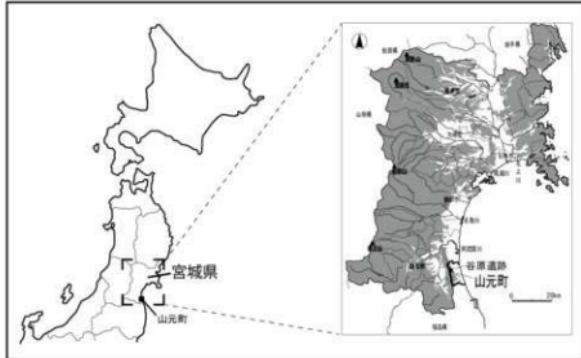
# 第Ⅰ章 遺跡の概要

## 第1節 遺跡の位置と地理的環境

宮城県亘理郡山元町は、仙台市から南南東に約40km離れた県南東部に位置し、地理的には仙台平野南端にあたる(第1図)。町の西側は福島県から延びる阿武隈山地の支脈、東側は太平洋で、これらの間には沖積地が広がっている。町内を北上する阿武隈山地は、標高200~300mの山地・丘陵地で、北端では阿武隈川と接する。丘陵縁辺は、阿武隈山地に源を発する小河川によって開拓された櫛状の谷地形となり、谷底には谷中平野が形成されている。丘陵の東側には、沖積地を挟んで海岸線に平行した4列の浜堤(第Ⅱ浜堤列・第Ⅲa~c浜堤列)が認められる(伊藤2006、藤本・松本2012)。

谷原遺跡は、平成19・20

年度に実施された分布調査により発見された遺跡で、亘理郡山元町山寺字谷原に所在し、山元町役場の北北西約1.0kmに位置する(第1~3図)。遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵東側の谷原川と山寺川に挟まれた標高17~20mの中低段丘上段に立地する(第2図)。遺跡の範囲は、東西220m、南北140mほどの広がりをもつ。現況は、道路、宅地、畑地、荒地である。



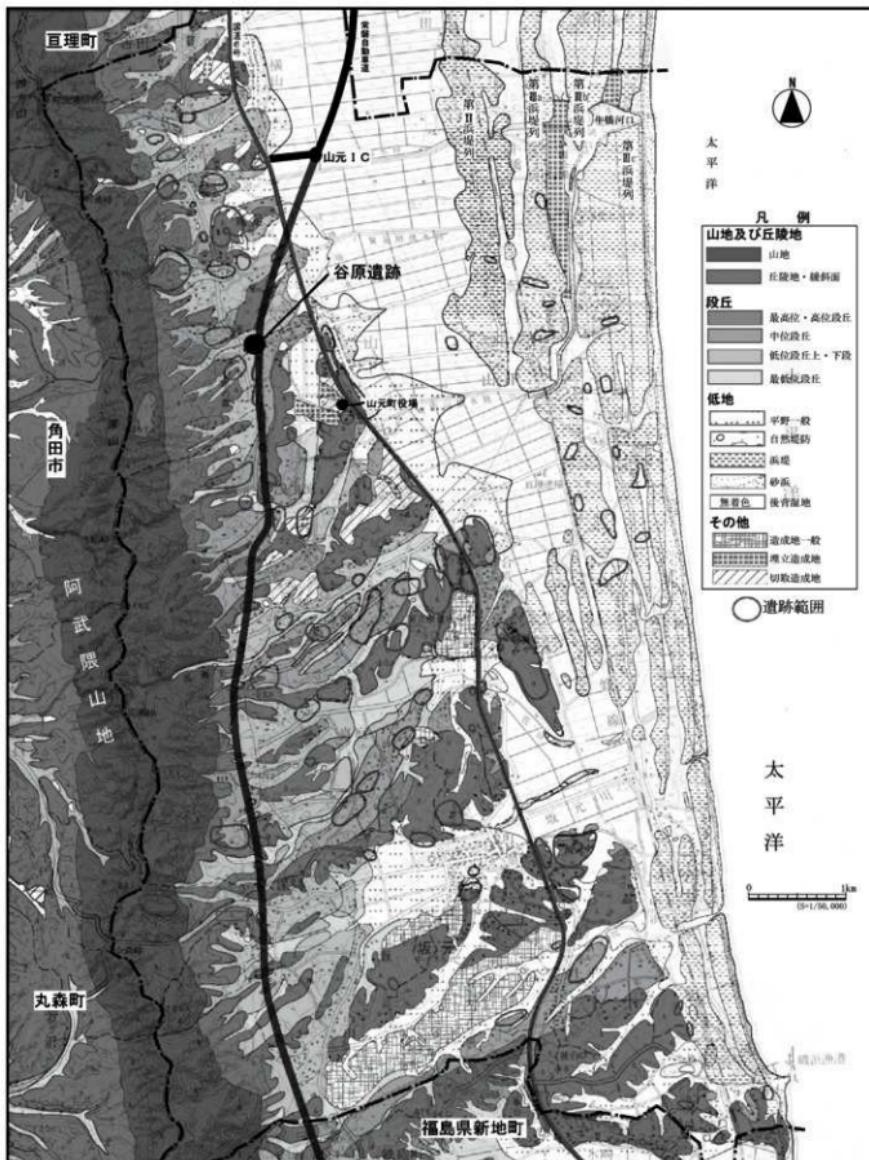
第1図 山元町と谷原遺跡の位置

## 第2節 周辺の遺跡

山元町には、現在まで100余りの遺跡が登録されている(第3図、第1表)。その分布は、地形的に阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁辺部、浜堤列周辺の大きく3つに分けられる。阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がある。丘陵縁辺部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体は古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査により発見された遺跡がほとんどで、古代以降の遺跡が分布している。

近年、山元町内では、常磐自動車道山元IC開通に伴う周辺地区の開発や、常磐自動車道(県境一山元間)建設工事、平成23年3月11日に発生した東日本大震災の復興事業などに伴う大規模な発掘調査が継続的に進められており、これまで知られていなかった山元町の歴史が少しずつ明らかになってきている。

以下、これまでに調査された代表的な遺跡について、時代ごとに記述する。



第2図 谷原遺跡及び山元町内の地形分類図

### 【縄文時代の遺跡】

前期の北経塚遺跡（10）、上宮前北遺跡（109）、前期～中期の西石山原遺跡（84）、中期後半の南山神B遺跡（89）、中期末～後期前葉の谷原遺跡（67）、中期～晚期の中島貝塚（4）、後・晚期の涌沢遺跡（107）、晚期の中筋遺跡（80）などがある。

北経塚遺跡では、平成15・21・23年度に調査が行われ、前期初頭の竪穴住居跡、土坑、遺物包含層、ビック群などが検出され、前期初頭の上川名II式の古い段階の土器群や石器が出土した（関2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

上宮前北遺跡では、平成24年度の調査で、早期末～前期初頭の遺物包含層・竪穴状構造・集石構造が検出され、前期前葉の上川名II式の土器群が中心に出土した（初鹿野ほか2015）。

西石山原遺跡では、平成22・23年度に調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の竪穴住居跡などが検出され、前期前葉の上川名II式、後期後葉～末葉の大木10式の土器群が出土している（初鹿野ほか2012）。

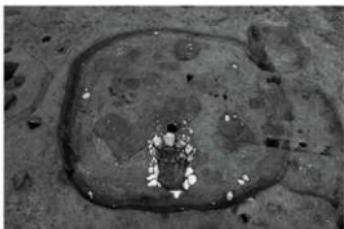
南山神B遺跡では、平成23・24年度の調査で、中期後半の遺物包含層・柱穴・土坑が検出され、中期後半の大木9式後半の土器群が出土した（初鹿野ほか2015）。

谷原遺跡では、平成22・24年度の調査で、中期末～後期前葉の掘立柱建物跡のみで構成される南北40m・東西35mの環状集落、その周囲で同時期の土坑・土器埋設構造、遺物包含層などが検出され、後期末の大木10式、後期初頭～前葉の網取I・II式の土器群が出土した（山田・藤田2016）。

中島貝塚では、昭和53年に調査が行われ、後期～晚期の縄文土器・石器とともに貝殻、魚骨・獸骨が数多く出土した（山元町誌編纂委員会編1986）。

涌沢遺跡では、平成24年度の調査で、後・晚期の遺物包含層が検出され、後期後半の瘤付土器・晚期前葉の大洞B～BC式の土器群が出土した（初鹿野ほか2015）。

中筋遺跡では、平成24年度の調査で、晚期の遺物包含層が検出され、晚期前葉～末の大洞BC式・大洞C2式・大洞A～A'式の土器群が出土したほか、後期前葉～後葉の土器もわずかに出土している（山田・藤田・佐伯2015）。



西石山原遺跡 縄文時代の竪穴住居跡（縄文時代中期末）

### 【弥生時代の遺跡】

中筋遺跡（80）、孤塚遺跡（56）、館の内遺跡（9）、北経塚遺跡（10）、谷原遺跡（67）、日向遺跡（68）などがある。

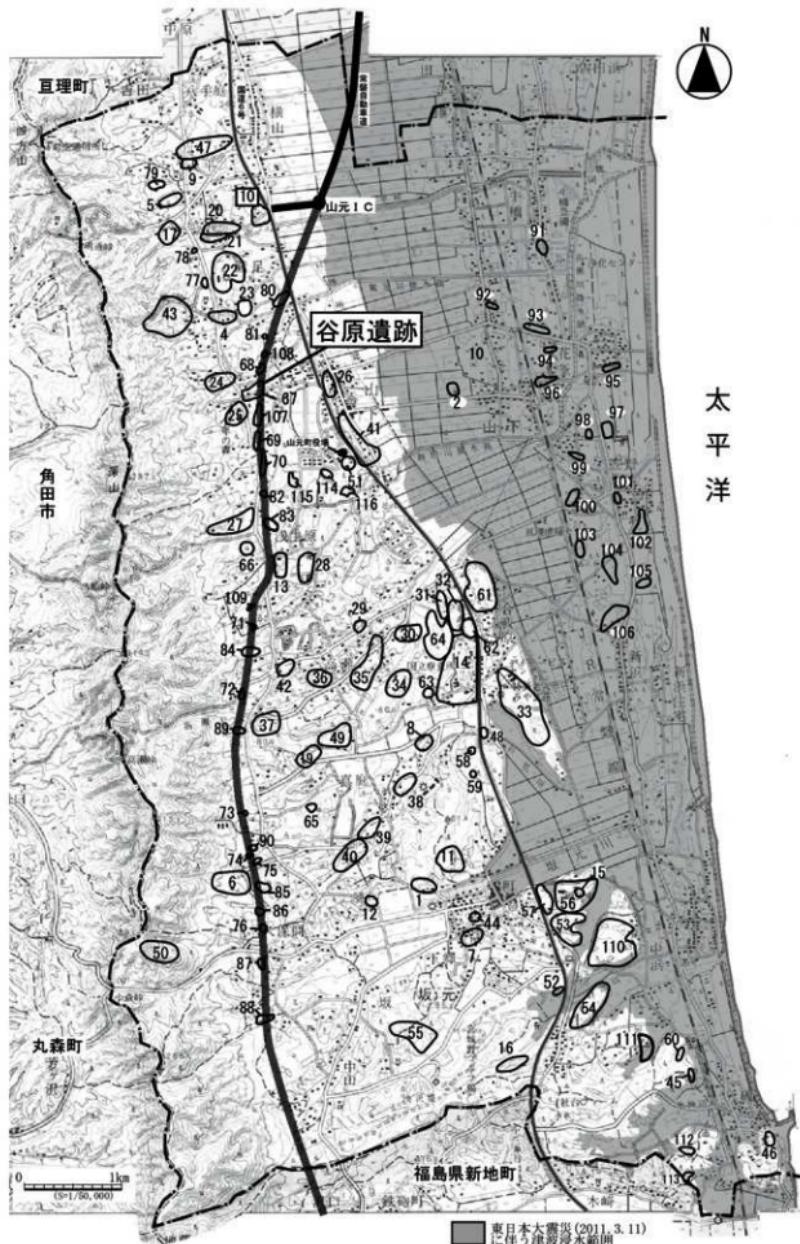
中筋遺跡では、平成24年度の調査で、水田跡や遺物包含層などが検出され、中期前葉の鱗沼式～中期中葉の耕形圓式を中心とする土器群や石包丁、板状石器などが出土した。また、同時期の津波痕跡の可能性のある砂層も確認されている（山田・藤田・佐伯2015、山田2015a）。

孤塚遺跡では、平成5年度の調査で、溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土している（崔田1995）。

北経塚遺跡・館の内遺跡・谷原遺跡・日向遺跡では、弥生時代の遺構は確認されていないが、遺物が出土している。北経塚遺跡では、平成21・23年度の調査で、



中筋遺跡 弥生時代の水田（弥生時代中期中葉）



第3図 谷原遺跡の位置と山元町内の遺跡分布

第1表 山元町遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	井戸沢横穴墓群	横穴墓	古墳後	60	東作軒塚	純塚	中世
2	新田遺跡	散布地	古墳後・古代	61	合戰原B遺跡	製鉄	古代
3	久番	—	—	62	合戰原C遺跡	古墳	古墳中
4	中島貝塚	貝塚	縄文中～晚	63	北生名東B窯跡	窯跡	古代
5	味曾野横穴墓群	横穴墓	古墳後	64	大久保B遺跡	散布地	古代
6	影倉遺跡	散布地	縄文後・晚	65	北桜現遺跡	製鉄	古代
7	裏音城跡	城館	中世・近世	66	山王遺跡	製鉄	古代?
8	上台遺跡	散布地	弥生・平安	67	谷原遺跡	集落	縄文後・弥生～中世
9	鶴の内遺跡	集落	古代	68	日向遺跡	集落	古墳後～中世
10	北経塚遺跡	集落・古墳・経塚	縄文前・古墳前・中世	69	石垣遺跡	集落	縄文・古墳前 平安・近世
11	愛宕山難跡	城館	中世	70	的場遺跡	集落	縄文前・古墳前 平安・近世
12	日向遺跡	散布地	古墳中・後	71	上宮前遺跡	散布地	平安・中世
13	浅生原遺跡	散布地	縄文中・後・中世	72	北山神道跡	散布地	縄文
14	合戰原遺跡	集落・横穴墓 須恵器窯跡・製鉄	古墳中・後・古代	73	新田B遺跡	散布地	古代
15	孤塚古墳群	古墳	古墳後	74	影倉A遺跡	散布地	縄文
16	一の沢遺跡	散布地	弥生	75	影倉B遺跡	散布地	古代
17	清水遺跡	散布地	弥生	76	荷駄塙遺跡	散布地	縄文
18	久番	—	—	77	北遺跡	散布地	古代
19	北鹿野遺跡	散布地	古墳	78	北ノ入遺跡	散布地	古代
20	小平難跡	城館・散布地	古墳前・古代・中世	79	味噌河遺跡	散布地	古代
21	鎌模穴墓群	横穴墓	古墳後	80	中筋遺跡	水田・包含層 墓域?	縄文晩・弥生中 古墳前
22	山崎横穴墓群	横穴墓	古墳後	81	赤坂遺跡	散布地	縄文・弥生
23	中道遺跡	散布地	縄文・古墳後	82	山王B遺跡	集落・散布地	縄文・近世
24	石室遺跡	散布地	古代	83	内手遺跡	製鉄・生産	平安
25	山寺難跡	城館	中世	84	西石山遺跡	集落	縄文前・中・平安
26	作田山難跡	城館	中世	85	影倉D遺跡	製鉄	古代
27	入山遺跡	散布地	縄文・古代	86	荷駄塙B遺跡	散布地	古代
28	下大沢遺跡	散布地	縄文前	87	上小山遺跡	散布地	古代・中世
29	宮後遺跡	散布地	古代	88	法程遺跡	散布地	縄文
30	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代	89	南山山B遺跡	散布地	縄文・古代
31	鎌下窓跡	須恵器窯	古代	90	影倉E遺跡	散布地	縄文・古代・中世
32	中島難跡	城館	中世	91	北泥沼遺跡	散布地	古代
33	戸花山遺跡	古墳・須恵器窯・ 製鉄・散布地	縄文・古墳・古代	92	泥沼遺跡	散布地	古代
34	北名生東窓跡	須恵器窯	古代	93	煙合遺跡	散布地	古代
35	室原遺跡	散布地	古代	94	北越原遺跡	散布地	古代
36	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後	95	浜遺跡	散布地	古代
37	南山神道跡	散布地	縄文早・前	96	頬無遺跡	散布地	古代
38	原遺跡	散布地	古墳	97	花笠遺跡	散布地	古代
39	浅生遺跡	散布地	古代	98	西北谷原A遺跡	散布地	古代
40	南權現遺跡	散布地	縄文早・前・古墳	99	西北谷地B遺跡	散布地	古代
41	山下難跡	城館	中世	100	西須賀遺跡	散布地	古代
42	石山原遺跡	散布地	縄文	101	笠野D遺跡	散布地	古代
43	蟹足館跡	城館	中世	102	笠野E遺跡	散布地	古代
44	鶴下遺跡	散布地	弥生	103	北中須賀遺跡	散布地	古代
45	大堀小塙十三塙	塙	近世	104	狐須賀遺跡	散布地	古代
46	唐船番所跡	番所	近世	105	笠浜遺跡	散布地	古代
47	大平難跡	集落・城館	平安・中世	106	新浜遺跡	散布地	古代
48	貞吹城跡	城館	中世	107	満沢遺跡	集落	縄文・古代～近世
49	真庭難跡	城館	中世	108	日向北遺跡	集落	古墳後・中世～近世
50	新城山古館跡	城館	中世	109	上宮前北遺跡	集落	古代
51	日向窓跡	窓跡	古代	110	犬塙遺跡	製鉄	古代
52	作田横穴墓群	横穴墓	古墳後	111	新中玉窓跡	集落・須恵器窯 製鉄	古代
53	熊の作遺跡	集落	古墳後・古代	112	雷神D跡	集落・生産	古代
54	駒塙原遺跡	散布地	古代	113	山ノ上遺跡	散布地・生産	古代
55	川内遺跡	製鉄	古代	114	作田山遺跡	製鉄	古代
56	狐塙遺跡	集落・生産	古墳中～古代	115	内手遺跡	製鉄・須恵器窯	古代
57	向山遺跡	集落・生産	古墳・古代	116	作田山B遺跡	生産	古代
58	卯月崎塙	塙	中世・近世				

中期後半の十三塚式・後期の天王山式の土器のほか、石包丁が出土した（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。館の内遺跡では、平成 13 年度の調査で、中期後半の十三塚式の土器が出土した（引地 2002）。谷原遺跡では、平成 22・24 年度の調査で、中期前半～中期中葉の土器が出土した（山田・藤田 2016）。日向遺跡では平成 23 年度の調査で、中期後半の十三塚式の土器や石包丁が出土した（山田・藤田 2015）。

### 【古墳時代の遺跡】

前期の中筋遺跡（80）・石垣遺跡（69）・的場遺跡（70）・犬塚遺跡（110）、前期～中期の北経塚遺跡（10）、中期～終末期の合戦原遺跡（14）、後期～終末期の狐塚遺跡（56）・日向北遺跡（108）・日向遺跡（68）・谷原遺跡（67）・熊の作遺跡（53）・井戸沢横穴墓群（1）などがある。

中筋遺跡では、平成 24 年度の調査で、前期の土坑墓群が検出された（山田・藤田・佐伯 2015）。

石垣遺跡では、平成 23 年度の調査で、前期の堅穴住居跡が検出された（山田・藤田 2014）。

的場遺跡では、平成 23 年度の調査で、前期の堅穴住居跡・土坑・溝跡が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。

犬塚遺跡では、平成 27 年度の調査で、前期の方形周溝を伴う墳丘が確認されている（宮城県考古学会 2015）。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年度の調査で、前期の堅穴住居跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡が検出された（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。

合戦原遺跡では、平成 2 年度に調査が行われ、南小泉式期の大型の堅穴住居跡が検出された（岩見ほか 1991）。

ほか、平成 8・9 年の測量調査で前方後円墳を含む古墳群が確認されている（青山ほか 2000）。また、平成 26～28 年度の調査では、終末期の横穴墓群や堅穴住居跡が確認されており、特に横穴墓群の調査では、玄室奥壁に線刻画が描かれた横穴墓が発見されたほか、副葬品として土師器・須恵器、玉類、直刀・鉄鐵・馬具などの多くの鉄製品が出土しており、大きな成果が得られている（山田 2015b・宮城県考古学会 2015）。

日向北遺跡では、平成 24 年度の調査で、終末期前後の堅穴住居跡が検出された（山田・丹野 2014）。

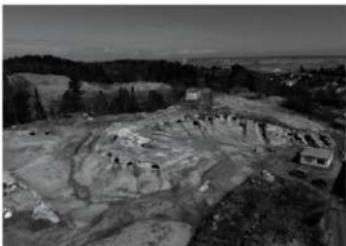
日向遺跡では、平成 23 年度の調査で、後期の堅穴住居跡・終末期の遺物包含層が検出された（山田・藤田 2015）。

谷原遺跡では、平成 22・24 年度の調査で、終末期頃の堅穴住居跡が検出された（山田・藤田 2016）。

狐塚遺跡では、平成 4・5 年度の調査で、後期の堅穴住居跡・堅穴状遺構・掘立柱建物跡が検出された（千葉 1993、庄田 1995）。

熊の作遺跡では、平成 25・26 年度の調査で、後期～終末期の堅穴住居跡・掘立柱建物跡が検出された（宮城県考古学会 2013、初鹿野 2014・2015a～c）。

井戸沢横穴墓群は、昭和 44 年に調査が行われ、調査された数基の横穴墓の特徴が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群と類似することから、その関連性が指摘されている（佐々・志間・氏家 1971）。



合戦原遺跡の横穴墓群（平成 26～28 年度調査）

### 【奈良・平安時代の遺跡】

館の内遺跡（9）、合戦原遺跡（14）、狐塚遺跡（56）、涌沢遺跡（107）、日向遺跡（68）、谷原遺跡（67）、石垣遺跡（69）、的場遺跡（70）、内手遺跡（83）、上宮前北遺跡（109）、向山遺跡（57）、熊の作遺跡（53）、北名生東塙跡（34）、犬塚遺跡（110）、新中永塙遺跡（111）、雷神遺跡（112）、内手 B 遺跡（115）、作田山遺跡（114）などがある。

館の内遺跡では、平成 13 年度の調査で、規格的に配置された掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出され、墨書き器や製塙土器などが出土している（引地 2002）。

合戦原遺跡では、平成 2 年度の調査で奈良時代～平安時代の須恵器窯跡（岩見ほか 1991）、平成 26・27 年度の調査で製鉄炉跡・木炭窯跡・焼成土坑が確認されている（山田 2015b・宮城県考古学会 2015）。

涌沢遺跡では、平成 24 年度の調査で、8 世紀末～10 世紀後半の竪穴住居跡・竪穴状遺構・土器廃棄土坑や 8 世紀末～9 世紀初頭の鍛冶関連遺構などが検出され、「田人」・「十万」・「千万」の墨書き土器や 10 世紀後半の八稜鏡などが出土した（宮城県考古学会 2012、初鹿野 2013a、初鹿野ほか 2015）。

日向遺跡では、平成 23 年度の調査で、8 世紀末～9 世紀初頭・9 世紀後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・遺物包含層が検出された（山田・藤田 2015）。

谷原遺跡では、平成 22・24 年度の調査で、7 世紀末～8 世紀前葉、8 世紀後半～9 世紀前葉、9 世紀後半の竪穴住居跡などが検出され、風字硯・円面硯・墨書き土器などが出土した（山田・藤田 2016）。

石垣遺跡では、平成 23 年度の調査で、9 世紀後半の竪穴住居跡・竪穴状遺構・土器廃棄土坑が検出され、土器廃棄土坑からは墨書き土器（「田」・「人」）が出土した（山田・藤田 2014）。

的場遺跡では、平成 23・25 年度の調査で、9 世紀後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・焼成遺構が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。

内手遺跡では、平成 23 年度の調査で、9 世紀代の地下式木炭窯跡 7 基・横口付木炭窯跡 1 基が検出されている（初鹿野 2013b・初鹿野ほか 2015）。

上宮前北遺跡では、平成 24 年度の調査で、9 世紀の製鉄炉跡 4 基が検出されている（初鹿野 2013b・初鹿野ほか 2015）。

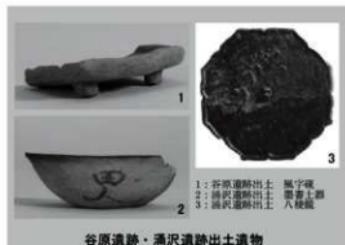
向山遺跡では、平成 25 年度の調査で、奈良～平安時代の竪穴住居跡や鍛冶工房が検出されている（宮城県考古学会 2013、初鹿野 2015a・b）。

熊の作遺跡では、平成 25・26 年度の調査で、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、四脚門跡が検出され、「坂本願」・「大領」・「子弟」などの墨書き土器や風字硯、石帶、木簡、木製品などが出土するなど大きな成果が得られており、陸奥国亘理郡に関連する役所跡と推定されている（宮城県考古学会 2013、初鹿野 2014・2015a～c、吉野 2015）。

北名生東窯跡では、昭和 37・38・52 年度に須恵器窯跡の調査が行われ、8 世紀後半～9 世紀初頭の須恵器が出土した（鎌治 1971）。

犬塚遺跡では、平成 25～27 年度の調査で、奈良時代前半を中心とする竪穴住居跡・木炭窯跡・横口式木炭窯跡・製鉄炉跡が検出された（初鹿野 2015a・b、宮城県考古学会 2015）。

新中水塗遺跡では、平成 26 年度の調査で、奈良～平安時代初期の竪穴住居跡・製鉄炉跡・須恵器窯跡・木



内手遺跡 SR4 横口付木炭窯（平安時代）



上宮前遺跡 SW2 製鉄炉跡（平安時代）

炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出された(宮城県考古学会 2014、初鹿野 2015a・b)。

雷神遺跡では、平成 25・26 年度の調査で、奈良時代の竪穴住居跡が検出された。

内手 B 遺跡では、平成 26 年度の試掘調査で、奈良時代の須恵器窯跡などが検出された。

作田山遺跡では、平成 25 年度の試掘調査で、古代の製鉄関連遺構が検出された。

### 【中世の遺跡】

北経塚遺跡(10)、小平館跡(20)、日向遺跡(68)、谷原遺跡(67)、山下館跡(41)、鷺足館跡(43)などがある。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年度の調査で、13 世紀後半～14 世紀以降の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑が確認され、中世の集落の存在が明らかになった(山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013)。

小平館跡は、室町時代の天文年間(1532～1555 年)に亘理要害 14 世亘理宗隆が居館したとされている館跡で(紫桃 1974)、平成 24・25・27 年度に調査が行われ、掘立柱建物跡・溝跡が検出された(山田 2015c)。

日向遺跡では、平成 23 年度の調査で、13 世紀後半～16 世紀の掘立柱建物跡・井戸跡が確認された(山田・藤田 2015)。

谷原遺跡では、平成 22・24 年度の調査で、掘立柱建物跡多数・井戸跡・土坑・溝跡などが検出され、中世の大規模な屋敷跡の存在が確認された(山田・藤田 2016)。

山下館跡では、平成 26 年度に調査が行われ、平場・土壘・堀切が良好な状態で確認され、平場では掘立柱建物跡や柱穴列が検出された(宮城県考古学会 2014)。

鷺足館跡では、平成 24～26 年度に調査が行われ、腰郭と柱穴列で区画された曲輪が確認され、掘立柱建物跡が多数検出された。



山下館跡の平場・土壘・堀切(平成 26 年度調査)

### 【近世の遺跡】

石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、山王 B 遺跡(82)、蓑首城跡(7)などがある。

石垣遺跡では、平成 23 年度の調査で、近世の掘立柱建物跡・柱穴列跡・土坑・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された(山田・藤田 2014)。

的場遺跡では、平成 23・25 年度の調査で、17～19 世紀の掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された(山田・藤田・佐伯 2014)。

山王 B 遺跡では、平成 22 年度の調査で、掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された(初鹿野ほか 2012)。

蓑首城跡は、戦国時代末期に築城され、元和 2(1616) 年以降、大條氏が長期間にわたり居城した城で、平成 25 年度に二ノ丸跡の調査が行われ、掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡などが検出された(宮城県考古学会 2013)。



蓑首城跡 二ノ丸跡の遺構(平成 25 年度調査)

### 第3節 谷原遺跡のこれまでの発掘調査

谷原遺跡は、平成19・20年度の分布調査で発見されて以降、本発掘調査・確認調査を含めると、これまで8度にわたる発掘調査が実施されている（平成28年3月現在）。それぞれの調査年度・調査原因・調査面積・調査成果等は下記のとおりである（第2表・第4図）。

第2表 谷原遺跡発掘調査箇所一覧（H28.3現在）

	調査年度	調査原因	調査内容	調査面積	主な調査成果
1次調査	平成20年度	町道 山寺光山下線改修	本調査	約1,885 m <sup>2</sup>	縄文・古代・中世 掘立柱建物・大溝・溝跡・遺物包含層 文献：本報告
2次調査	平成22・24年度	常磐自動車道建設	本調査	約5,740 m <sup>2</sup>	縄文～中世 竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝跡・井戸 遺物包含層など 文献：山元町文化財調査報告書第13集
3次調査	平成23年度	個人住宅	確認調査	約25 m <sup>2</sup>	中世？ 柱穴・土坑 報告書未刊
4次調査	平成25年度	店舗兼住宅 (復興事業)	確認調査	約165 m <sup>2</sup>	古代～中世 竪穴住居・掘立柱建物 報告書未刊
5次調査	平成25年度	個人住宅 (復興事業)	本調査	約345 m <sup>2</sup>	古代～中世 掘立柱建物・大溝・溝 報告書未刊
6次調査	平成26年度	個人住宅 (復興事業)	確認調査	約70 m <sup>2</sup>	古代～中世？ 柱穴・井戸 報告書未刊
7次調査	平成26年度	工場造成	本調査	約120 m <sup>2</sup>	古代～中世 竪穴住居・掘立柱建物 報告書未刊
8次調査	平成26年度	太陽光パネル設置	確認調査	約30 m <sup>2</sup>	遺構なし 報告書未刊



谷原遺跡2次調査で発見された縄文時代の竪穴集落（北から）



谷原遺跡5次調査で発見された古代の掘立柱建物跡（西から）

## 第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 発掘調査に至る経緯

谷原遺跡は、常磐自動車道建設に伴い、平成20年2月に実施された分布調査において発見された遺跡である。今回の調査は、町道24号山下山寺線改良工事に伴うものであるが、本件は、本来行うべき文化財保護法（以下、法という）に基づく事前協議・届出等の手続きが行われない状態での工事施工発見に伴い、急速、発掘調査が実施された案件にあたる。具体的には、分布調査で発見された谷原遺跡の登録手続き（法97条に基づく遺跡発見届の提出）の遅滞、町関係課の内部調整不足（周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事案件の未調整、法94条に基づく発掘通知の未届による工事の実施）等の結果、発生した案件である。

その具体的な経緯については、以下のとおりである。

#### 【発掘調査に至るまでの経緯】

○平成20年2月26～28日

常磐自動車道建設工事に先立ち、路線内の分布調査を実施。谷原遺跡を発見。

※分布調査にあたっては、県教委、町教委、町道路工事担当課、NEXCO東日本担当職員が出席。

○平成20年10月8日

県教委・町教委担当者による常磐自動車道建設工事に伴う現地確認を行っていた際、谷原遺跡推定範囲内で無届による道路工事が行われていることが判明。工事範囲内において、遺構・遺物を確認したことから、同日、急速、道路工事担当課と三者協議を実施。

→県教委より、「平成20年2月に遺跡を発見したにも関わらず、遺跡登録手続きを速やかに行わなかつた町教委への厳重注意」、「常磐自動車道の分布調査に立ち会い、遺跡の存在を把握していたにも関わらず、遺跡推定地内での無届の工事を実施した道路工事担当課への厳重注意」があり、町に対し、「工事の中止」、「法97条に基づく遺跡発見届の提出」、「法94条に基づく発掘通知の提出」、「始末書の提出」が指示される。併せて、工事施工範囲内の確認調査を実施し、遺跡とのかかわりについて早急に明確にするよう指導がある。

→これを受けて、同日、道路工事を中止する。

○平成20年10月9～16日

町教委により、今回の道路工事範囲内の確認調査を実施。本調査必要箇所を確定。

○平成20年10月14・17日

確認調査の結果を受け、工事範囲内の遺跡の取り扱いについて、県教委・町教委・町道路工事担当課と協



法94条・無届による工事施工発見時の状況（平成20年10月8日撮影）



確認調査の作業状況（平成20年10月10日撮影）

議。工事計画地内の遺構が確認された範囲について、本調査を実施することとなる。その後、町から県教委へ法 97 条に基づく遺跡発見届、法 94 条に基づく発掘届、始末書を提出。道路工事中止に伴い、町内関係各課との協議の結果、今回の道路工事が補助事業で、かつ、工期が間近にせまっていたことから、早急に本調査に係る諸手準備（予算確保・作業員雇用・物品調達等）、本調査の体制整備を行う。

○平成 20 年 10 月 21 日

町教委により、本調査開始。発掘に係る費用については、当面の間、予備費による対応とし、同年 10 月 30 日の山元町第 2 回臨時議会において、補正予算を計上し予算措置。

○平成 20 年 12 月 18 日

本調査終了。現地引き渡し。

## 第 2 節 谷原遺跡（1 次調査）発掘調査の経過

### （1）確認調査の経過

確認調査は、平成 20 年 10 月 9・10・15・16 日の 4 日間実施した。調査主体は町教委である。調査は、既に工事が実施され、表土が掘削されていた道路拡幅部分を対象とした。工事により既に地山が露出していた範囲については人力による表面精査、遺構確認面まで掘削が及んでいない範囲についてはバックホウにより表土等の掘削を行った上で人力による表面精査を行い、遺構の有無を確認した。その結果、事業計画範囲のうち、谷原遺跡範囲のほぼ全面約 1,900 m<sup>2</sup> の範囲に遺構が残存していることが判明した。

この結果を受け、宮城県発掘調査基準（平成 12 年 4 月 1 日）に基づき、事業主・県教委・町教委の三者で再度協議した結果、遺構が確認された範囲について、本格的な調査を行うこととなった。

### （2）本発掘調査の経過

本発掘調査は、町教委が主体となり実施した。本発掘調査は、前述のとおり、平成 20 年 10 月 17 日から調査に入る準備を開始し、平成 20 年 10 月 21 日～平成 20 年 12 月 18 日の 37 日間実施した。谷原遺跡の発掘調査体制は、調査員 1 名、作業員 10 名である。

調査面積は事業計画面積の約 2,300 m<sup>2</sup> のうち、遺構が確認された約 1,885 m<sup>2</sup> (A～D 区) である（第 4 図）。

調査にあたっては、道路工事担当課であるまちづくり整備課より、平成 20 年 10 月に現地調査業務に係る執行委任を受け、調査を実施した。調査にあたっては、調査箇所近隣に所在する山寺生活センターを借用し、作業員の詰所及び発掘機材の保管場所とした。調査は、平成 20 年 10 月 21 日から開始した。まず、既に工事が実施されていた道路の拡張範囲 (A・B 区) の遺構の検出・精査に着手した。A・B 区の調査は 12 月 1 日に完了し、その後、道路の切り廻し工事完了後、12 月 15 日から既存道路部分 (C・D 区) の調査を実施した。C・D 区は、既存の道路下ということもあり、過去の工事



本調査の作業状況 (A 区遺構検出)



本調査の作業状況 (A 区既立柱建物跡の遺構検査)

により、その大部分が搅乱を受けており、残存していた遺構は少量であった。C・D区の調査は12月18日に完了した。その後、現場事務所の資材撤収を行い、現地を道路工事担当課に引き渡した。なお、調査区の埋戻しについては、事前の協議により、工事担当課が実施することとなっていたことから、現地は埋戻しをせず引き渡した。

発掘調査完了後、平成20年12月19日に遺失物法に基づく「埋蔵物発見届」を亘理警察署に提出、同年12月22日に出土遺物の文化財認定に係る書類を県教委に提出した。



本調査の作業状況（A区 SD2溝跡の精査）

### （3）整理・報告書作成作業の経過

谷原遺跡（1次調査）で出土した遺物、現地の記録類の整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後、山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。

整理作業については、まず、発掘調査完了後の平成20年度中（平成20年12月末、平成21年3月）に遺物の洗浄・注記作業を実施した。当初は、翌年度（平成21年度）中に発掘調査報告書の刊行を予定していたことから、平成21年5月～8月までの間に、出土遺物の抽出・実測図作成作業、図面類の照合作業・記録写真的整理作業を実施した。その後、報告書刊行に向けた各種作業を実施する予定であったが、同年度下半期に別件の民間開発に伴う本調査案件（北経塚遺跡第2次調査）が急遽発生したため、平成21年度中の報告書刊行を断念する形となった。加えて、平成22年度から常磐自動車道建設に伴う発掘調査が開始され、その後も東日本大震災（平成23年3月11日発生）に伴う復興事業等に関連する発掘調査対応が継続的に続いた事情もあり、谷原遺跡1次調査の整理作業は、その合間に断続的に行なう形となった。結果として、報告書の刊行は平成28年度となった。各年度の具体的な作業内容は以下のとおりである。

#### 【平成20年度の作業内容】

- 出土遺物の洗浄・保存処理・注記

#### 【平成21年度の作業内容】

- 出土遺物の抽出、出土遺物の実測図作成・拓本の作成
- 図面類の照合作業、記録写真的ネーミング

#### 【平成24年度の作業内容】

- 出土遺物の復元

#### 【平成25年度の作業内容】

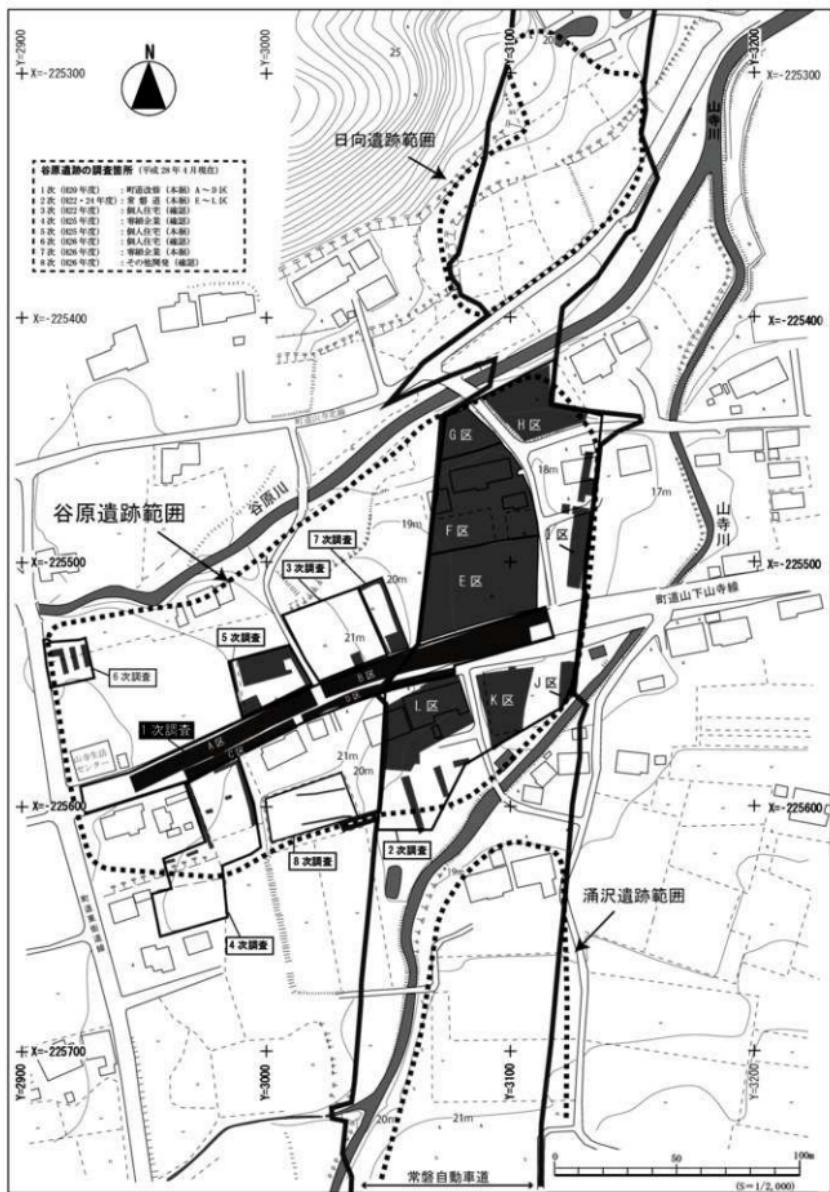
- 出土遺物の写真撮影

#### 【平成27年度の作業内容】

- 平面図、断面図のトレース、遺物実測図のトレース、各種遺構の基礎データの作成

#### 【平成28年度の作業内容】

- 報告書用写真の抽出、平面図・写真類の版組み、報告書執筆、出土遺物、記録類の収納



#### 第4図 谷原遺跡調査箇所

## 第Ⅲ章 発掘調査

### 第1節 発掘調査の方法

今回の調査は町道 24 号山下山寺線道路改良工事に伴う発掘調査であり、その現地調査・整理作業は下記の方法により実施した。

#### 1. 現地調査

##### 【調査区の設定】

谷原遺跡の 1 次調査は、道路の拡張工事及び既存道路の路盤改良に伴うものであり、調査実施にあたり既存道路の通行止め等の対応をとることができなかつた。そこで、まず拡張予定箇所について A・B 区の調査区を設定し、調査を実施した。A・B 区の調査完了後、道路の切り廻し工事を待つた後、既存道路箇所を C・D 区とし調査を行つた。

##### 【表土除去・遺構精査】

表土除去作業はバックホウ ( $0.45\text{ m}^3$ )、遺構検出以降の作業は人力により行つた。なお、遺構検出作業については、基本層 X 層上面で行つた。

##### 【遺構番号】

遺構番号は、現地調査の段階で、001 から通し番号 (001～) を振り、各種記録類を作成した (仮番号方式)。その後、整理作業の段階で再度振り直した。遺構の性格ごとの略記号については例言に示したとおりである。

##### 【遺構測量】

検出した遺構や調査区の平面図については、平板を用い実測図を作成し、その縮尺は個別遺構図を  $1/20$ 、全体図を  $1/100$  とした。その際、調査対象範囲に設置した国家座標系に基づく基準杭を利用した。遺構断面図は手実測により縮尺  $1/20$  で実測した。測量基準杭の国家座標については、例言に示したとおりである。

##### 【遺構の記録作成】

今回の調査で検出した遺構のうち、原則として、すべての記録作成 (平面図・断面図・写真撮影) を行つた。なお、後世に搅乱等により遺構の大部分が削平を受けている遺構については、平面図作成・土層注記の記録作成のみを行つた。この他、今回の調査で掘り込みを行つた遺構の底面標高はすべて記録した。

##### 【遺物の記録・取り上げ】

遺物の記録については、遺構から出土した遺物のうち、出土状況の平面記録の対象としたものは、遺構に伴う遺物または残存状況のよいもののみとした。遺物の取り上げについては、原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土遺物は基本層・検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半裁時 (分層前) に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。

##### 【写真撮影】

記録写真には、デジタルカメラ (Fine Pix S9000) を使用した。

### 2. 室内整理

#### ① 遺物の整理作業

##### 【遺物洗浄・接合・復元】

遺物の洗浄は、水洗により作業を行い、比較的脆い遺物 (繩文土器・土師器) については、土器強化剤 (使用薬剤: バインダー-17) による処理を施した。遺物の接合は、まず同一遺構内の出土遺物の接合を行い、その後、別々の遺構間、その他 (検出面・基本層・搅乱など) から出土した遺物の接合を行つた。遺物の復元は、実測図作成が可能なものを対象として作業を行つた。

##### 【注記作業】

遺物の注記は、手作業により行つた。遺物の注記内容は、原則として遺跡名の略号・調査年・出土遺構・

出土層位とし、遺物の内面等に注記した。なお、注記した出土遺構名は、現場調査で付した番号とした。

#### 【遺物抽出・登録】

遺物の抽出・登録は調査員が行った。遺物抽出に際しては、原則として遺構に伴う遺物を中心に抽出し、遺構に伴わないものや遺構外（基本層出土遺物も含む）出土のものについても図化が可能なものは抽出の対象とした。遺物の登録に際しては、それぞれの種別ごとに登録を行った。遺物種別の略記号は、例言に示したとおりである。土器類については、残存状態のよいものを優先的に抽出した。この他、小破片であっても、文様や器形などが特徴的なものや時期・产地推定が可能なものについても抽出の対象とした。抽出した資料は原則として報告書掲載遺物として扱い、それぞれ種別1点ごとに登録番号を付し、非抽出遺物は種別・出土遺構・層位ごとに分け袋詰めし、袋ごとに非抽出遺物の登録を行った。石器は原則として全点を登録の対象とし、全点登録番号を付したが、このうち報告書掲載としたものは完形品を優先し掲載した。

#### 【遺物の実測図作成】

遺物の実測図作成は調査員が行った。実測図は原則として手実測により作成した。

#### 【拓本図作成】

遺物の拓本作成は整理作業員、報告書用の拓本図作成は調査補助員が担当した。拓本図の作成は、墨拓と仙紙を使用し拓本を作成した後、スキャナーでPCに画像を取り込み、報告書掲載用に加工した。

#### 【実測図トレース、掲載遺物の写真撮影】

遺物の実測図のトレース図は、素図をスキャナーで取り込み、PC上のデジタルトレースを行い作成した。報告書に掲載する遺物の写真撮影・写真加工作業は、調査員が担当した。

### ②図面・記録写真的整理・報告書作成

遺構図の整理作業は、平面図修正・断面図修正・トレース、土層注記等のデータ入力を行ったのち、図版作成、図面収納の手順で行った。記録写真的整理作業は、撮影年月日ごとにデータを整理し、それらのデータをコピーしたものに対しリネームを行った。その後、各種遺構ごとに分け収納した。報告書の版組み・執筆は、調査員が担当した。なお、遺物・断面図のトレース図作成、写真画像処理、遺構図等の図版作成、報告書版組みは、遺構くん cubic 2016 12.03、Adobe Illustrator CS6、Adobe Photoshop CS6、Adobe InDesign CS6、表データ・報告書原稿の作成は Microsoft Office Word・Excel のソフトウェアを使用した。

## 3. 東日本大震災に伴う埋蔵文化財専門職員の自治法派遣・短期出張による支援

平成 23 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生し、岩手・宮城・福島の三県では甚大な被害を受けた。被災三県では、震災からの復旧・復興事業に関連した工事に伴う発掘調査が急増した。これを受け、震災復興事業に関連した復興調査に迅速に対応するため、文化庁を通じて、埋蔵文化財専門職員の自治法派遣や県内外陸市町村からの短期出張による、被災 3 県の発掘調査体制の強化が図られた（宮城県教育委員会 2014・2015・2016）。

#### 【山元町における復興調査等の現状】

山元町では、平成 22 年度から開始された常磐道関連遺跡の発掘調査を機に、町内での遺跡調査が増加した。そして、東日本大震災後の平成 24 年度以降、公共事業や個人住宅建設などの震災復興事業に関連した発掘調査が町内各所で行われるようになり、町内遺跡の発掘調査件数はここ数年で劇的に増加した。加えて、最近では、土砂採取事業等といった復興事業に関連した民間開発の案件も発生している。

具体的な実績でみてみると、平成 22 年 4 月から平成 28 年 3 月末の段階で、山元町において発掘調査が実施された遺跡は、58 遺跡 72 地点で、その調査総面積は約 185,000 m<sup>2</sup>にのぼる。

#### 【山元町における発掘調査体制と派遣職員受け入れ状況】

常磐道関連遺跡の調査が開始された平成 22 年度当時、山元町では、発掘調査に対応する専門職員（町職員）が 1 名のみの配置だったため、町単独でその調査に対応することが困難な状況にあった。このことから、常磐道関連遺跡の調査は、県教委の全面的な協力を得て対応していた。こうした状況の中、平成 23 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生したことにより、常磐道以外の各種復興関連事業や民間開発に関連した発掘調査がさらに増加し、専門職員の不足はさらに悪化した。

これを受け、町では、平成 25 年度から、前述の手法による専門職員の派遣を本格的に受けることができ、激増する発掘調査に対応することができた。

具体的な山元町での専門職員受け入れ状況は第 3・4 表のとおりで、平成 25 年 4 月～平成 28 年 3 月の 3 カ年でのべ 27 名の派遣を受けることができ、今回報告する谷原遺跡（1 次調査）の本報告書作成業務にあたっては、町担当職員の報告書刊行に係る業務時間確保のために、派遣職員による他の現場対応といった支援を受けることができ、町担当職員の負担軽減につながった。[町への直接派遣のべ 10 名（平成 25 年度 4 名、平成 26 年度 2 名、平成 27 年度 4 名）/県教委経由による職員派遣のべ 17 名（平成 26 年度 8 名、平成 27 年度 9 名）]。

第 3 表 山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況（直接派遣）（H25 年 4 月～H28 年 3 月末現在）

派遣年度	氏名	派遣元	派遣期間	備考
H25 年度	森 秀之	北海道恵庭市	H25. 4. 1～H26. 3. 31	文化財業務全般（埋蔵文化財事前協議・確認調査等対応・事務手続き、有形文化財修繕、標柱整備ほか）
	草場 啓一	福岡県筑紫野市	H26. 12. 1～12. 31	合戦原遺跡確認調査
	小鹿野 売	福岡県筑紫野市	H26. 1. 1～2. 28	合戦原遺跡確認調査
H26 年度	日下 和寿	宮城県白石市	H25. 12. 1～H26. 3. 31	酒 1 日程度の支援、中筋・谷原遺跡の弥生土器遺物整理
	小南 裕一	福岡県北九州市	H27. 1. 1～2. 28	大塚遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
H27 年度	中村 昇平	福岡県春日市	H27. 3. 1～3. 31	大塚遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
	木下 晴一	香川県	H27. 4. 1～H28. 3. 31	各種業務全般支援、復興事業・民間開発の支援
	城門 義廣	福岡県	H27. 4. 1～H28. 3. 31	各種業務全般支援、大塚遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
	熊代 昌之	福岡県久留米市	H27. 6. 1～7. 31	大塚遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
	川口 陽子	福岡県筑紫野市	H27. 8. 1～10. 9	北緑塚遺跡（民間・店舗開発）本調査対応

第 4 表 山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況（宮城県経由・出張扱い）（H25 年 4 月～H28 年 3 月末現在）

派遣年度	人数	派遣職員（派遣元）	備考
H26 年度	8 名	大友 邦彦・佐藤 則之（宮城県）、長橋 至（山形県）、石川 智紀（新潟県）、小瀧 忠司（岐阜県）、東影 悠（奈良県）、御嶽 真義（滋賀県）、守岡 正司（島根県）	復興事業の支援
H27 年度	9 名	高橋 洋彰・下山 貴生・長内 祐輔・佐藤 則之（宮城県）、長橋 至（山形県）、伊藤 智樹（千葉県）、飯坂 盛泰（新潟県）、小瀧 忠司（岐阜県）、杉山 一雄（岡山県）	復興事業の支援

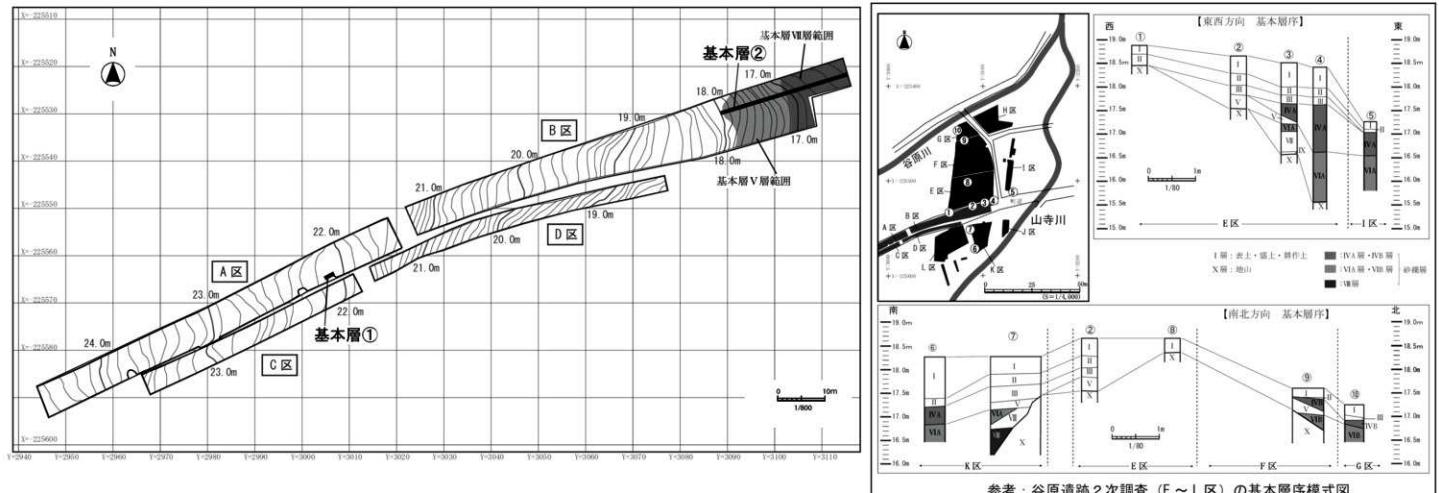
## 第 2 節 基本層序

今回の調査区（A～D 区）は、現在の谷原川と山寺川に挟まれた標高 16.6～24.4m の緩やかな平坦面に位置する（第 4 図）。谷原川は調査区北側を西から東に向かって流れ、山寺川は調査区南・東側を南北方向から北方向に向かって流れ。この谷原川と山寺川は、遺跡北東付近で合流し、さらに東に流れ。調査区の標高は、A 区西部の標高 24.4m で最も高く、そこから東に緩やかに傾斜し、B 区東端に至る。発掘調査実施前の調査区の土地利用状況は、町道及び畠地である。

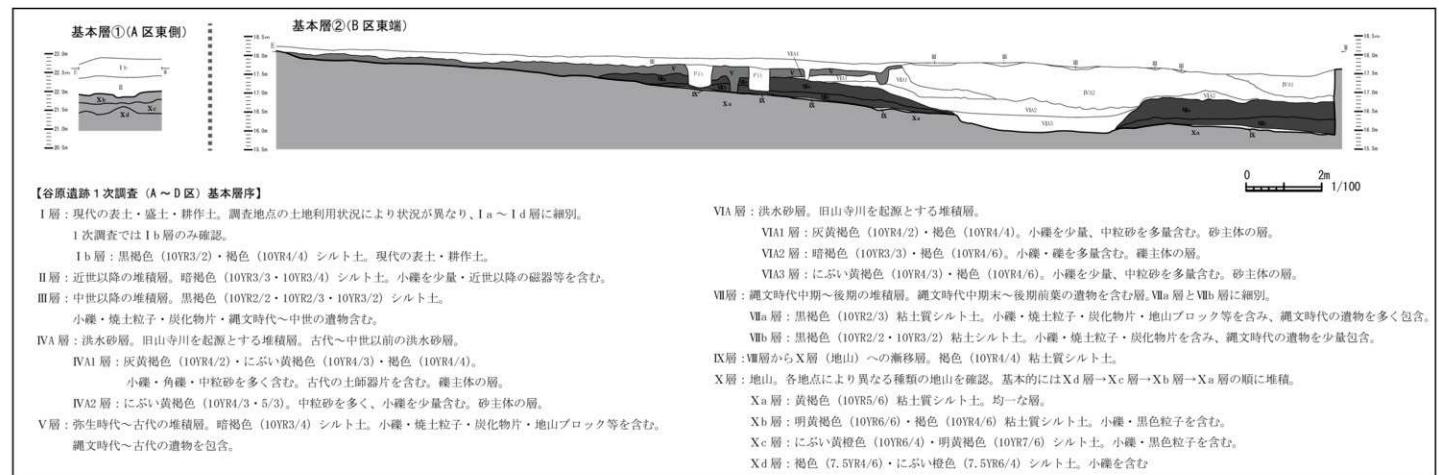
谷原遺跡は、今回報告する 1 次調査のほかに、常磐道建設工事に伴う調査（2 次調査）や個人住宅建設工事など数回にわたる発掘調査が実施されている（第 4 図）。したがって、ここでは、これまでの調査成果を踏まえ、A～D 区の基本層序について提示することとする。なお、今回の調査で確認した基本層序の概略については第 5 図にまとめた。

## 第 3 節 発見された遺構と遺物の概要

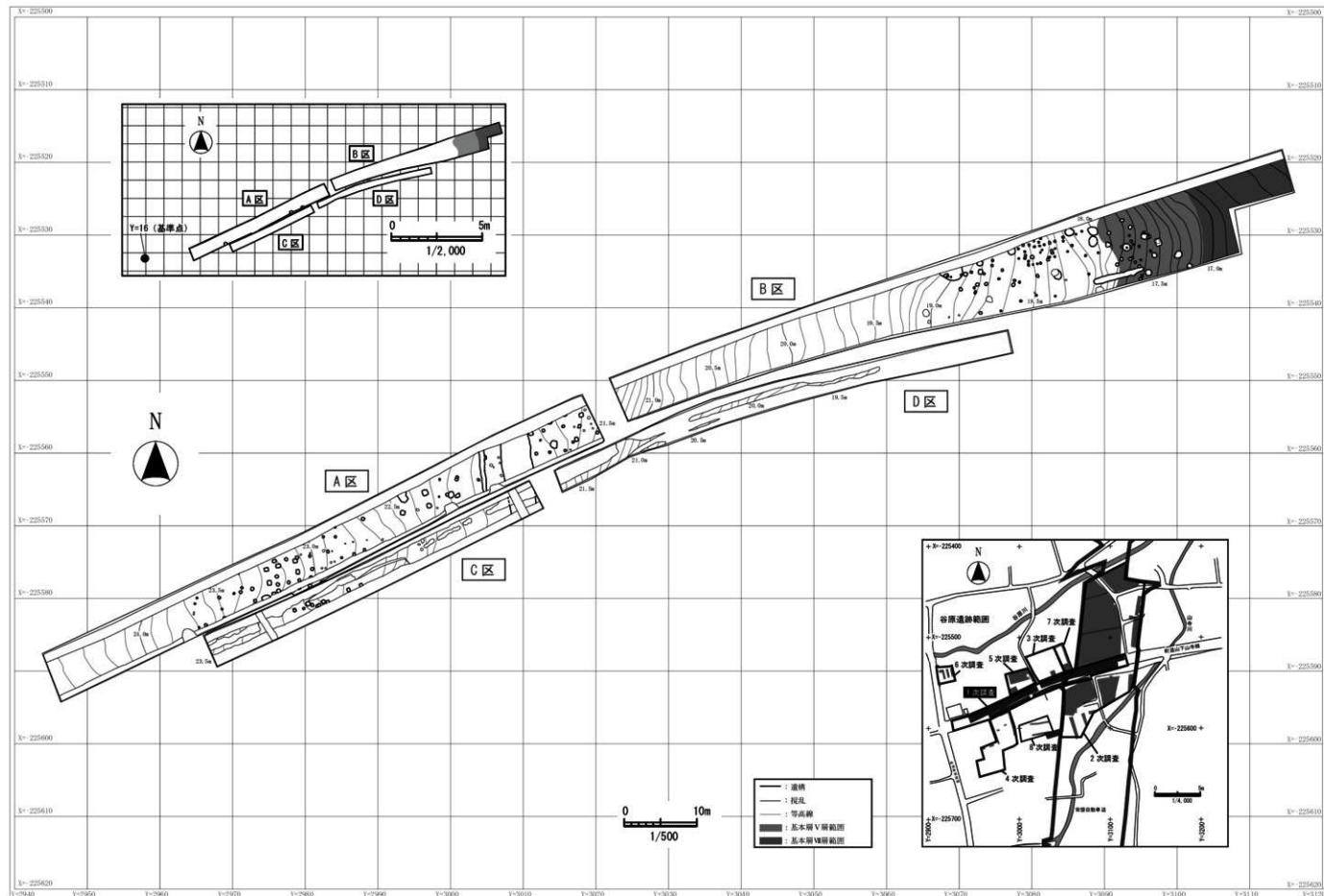
今回の調査区（A～D 区）で検出した遺構は、掘立柱建物跡 6 棟、溝跡 3 条、土坑 16 基、焼成遺構 3 基、柱穴・ビット 167 個（掘立柱建物跡を構成する柱穴も含む）、遺物包含層である（第 6～8 図）。これらの遺構から出土した遺物は、遺物収納箱（長 59cm×幅 38cm×深 20cm）で 11 箱出土しており、その内訳は、縄文土器、土師器（非ロクロ・ロクロ成形）、須恵器、中世陶器、鉄滓、鉄製品、石器である。以下、発見された遺構・遺物について、遺構の種別ごとに記述する。



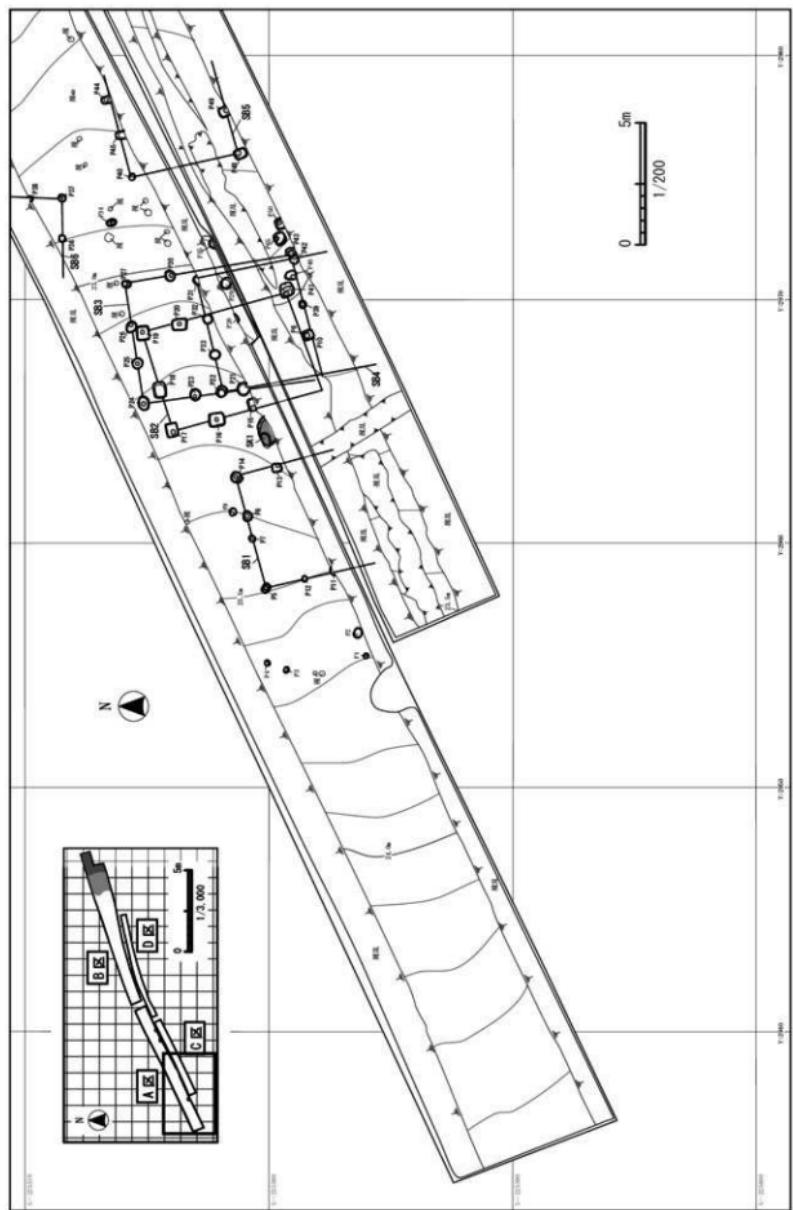
参考：谷原遺跡2次調査（E～L区）の基本層序模式図



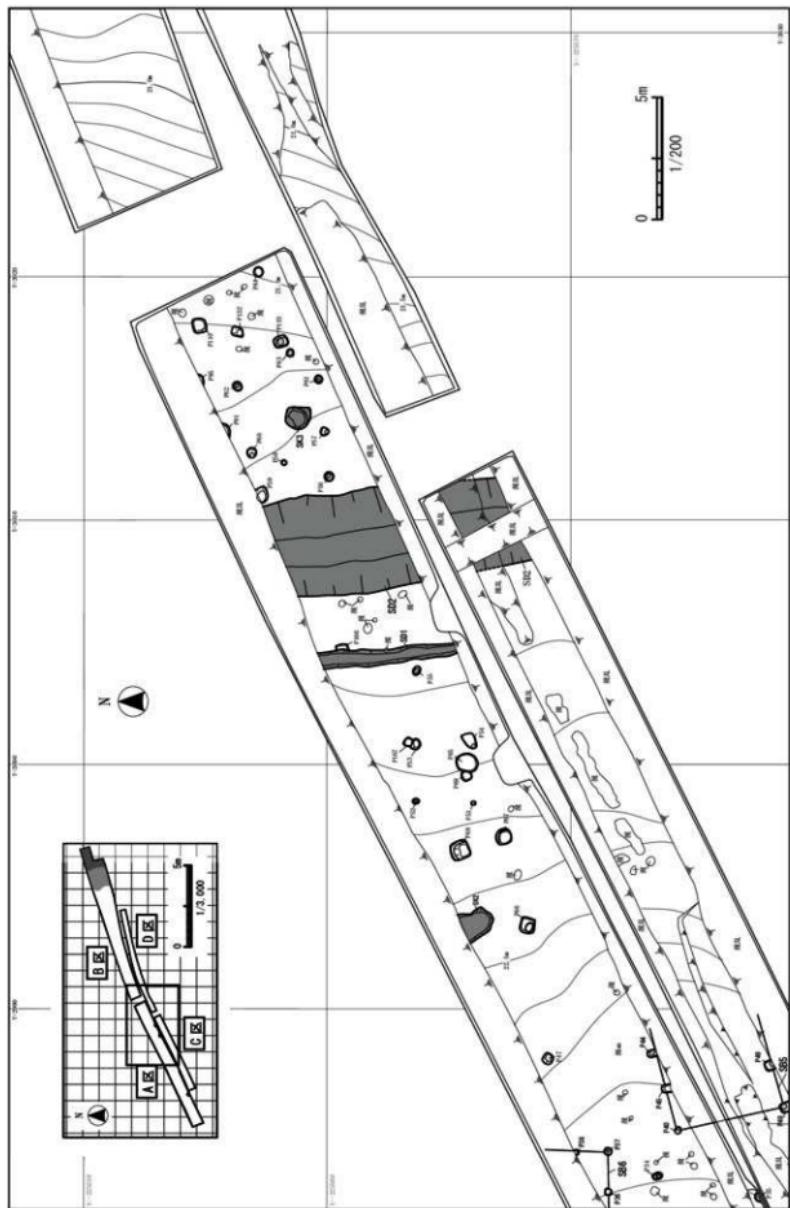
第5図 谷原遺跡1次調査(A~D区)基本層序



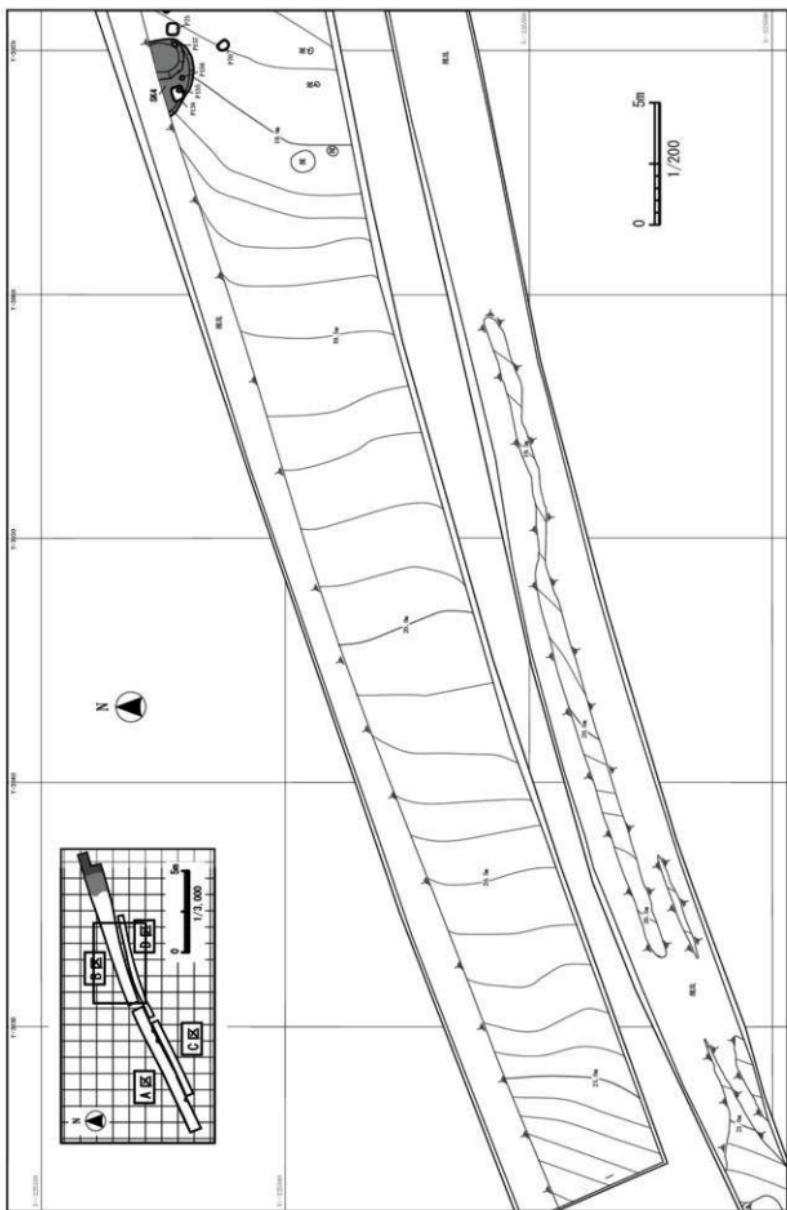
第6図 谷原遺跡（1次調査）遺構配置図（全体図）



第7-1図 谷原遺跡（1次調査）遺構配置図（1）—A・C区①—



第7-2図 谷原遺跡(1次調査)遺構配置図(2)-A・C区(2)-



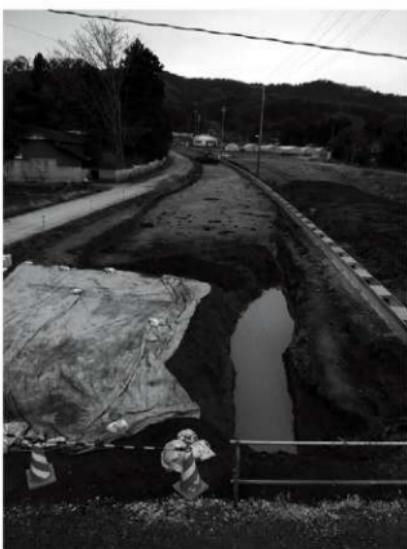
第7-3圖 谷原遺跡（1次調査）遺構配置図（3）—B・D区①—



第7-4図 谷原遺跡(1次調査)遺構配置図(4)-B・D区②—



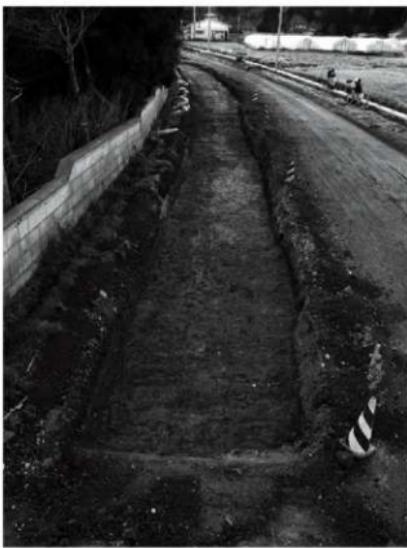
1. 谷原遺跡 A 区 調査区全景（東から）



2. 谷原遺跡 B 区 調査区全景（東から）



3. 谷原遺跡 C 区 調査区全景（東から）



4. 谷原遺跡 D 区 調査区全景（東から）

第8図 谷原遺跡 A~D区 調査区全景



第5表 谷原遺跡(1次調査) 堀立柱建物跡(SB1~6) 一覧表

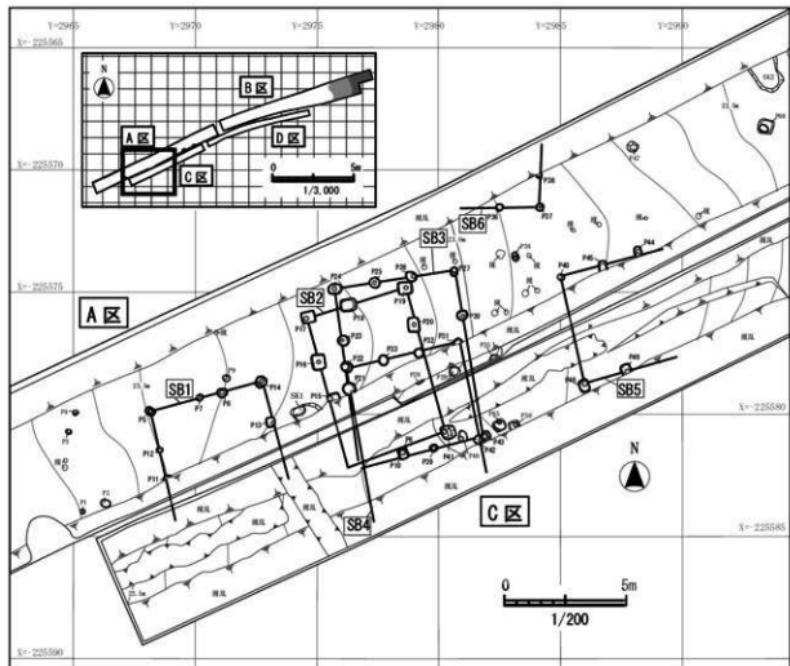
遺構 No.	遺物開口 標高 (m)	遺物開口 作業 番号	施設方向	平面面積(m) <sup>2</sup> ( ) 内: 推定面積/ ( ) 内: 底・幅の計測値			遺物の方向 遺物開口部位置/ 真北基準	遺物 面積 (m <sup>2</sup> )	参考	
				航行面積/推定面積	底・幅	柱間寸法				
SB 1	2以上	3	南北?	2.9 63.4	西	1.7+1.2+○~	4.7 北 1.7+0.9+1.7	西15° N-15° -W	13.4af 以上	構成P1-P3, T8, T11~12 余地物南北の柱穴現れの報告により8平
SB 2	(4)	2	南北	6.2	西	1.8+1.7+○+○	4.2 北 1.7+2.5	西15° N-15° -W	26.04af	構成P1-P3, T8, T11~12, 41 (すべて柱穴が丸形の柱穴で構成) 直角 P92-93-94
SB 3	(4)	3	南北	6.9	西	2.1+2.0+○+○	5.0 北 1.7+1.5+1.8	西10° N-10° -W	34.5af	構成P1-P10, T13-T15, 39, 43 (すべて柱穴が円形の柱穴で構成) 直角 P92-93-94
SB 4	-	3	南北?	4.1 以上	-	-	6.7 北 1.5+1.5+1.7	西15° N-12° -W	19.27af 以上	構成P1-P22, T3-T4, 31-42 直角 P91-92-93 必ず10cm等間隔の柱物なし 余地物南北現れの報告により8平
SB 5	2以上	1	東西	3.3 以上	北	1.8+1.5+○~	4.5 西 1.3	西15° N-12° -W	14.85af 以上	構成P1-P8, H4, H5, 46, 49 余地物東西の柱穴現れの報告により8平
SB 6	1以上	1	—	1.6 以上	南	~○+1.6	1.3 東 以上	~○+1.3 西0° (真北) N-0° -W	-	構成P1-P6~16 余地物南北現れの報告により8平

※ ( ) 内の数値は推定値を示す。

柱仕切寸法は、東西方向のものは西から、南北方向のものは北から順に記した。

余地物は現れ区間で記しているたれか、現れが不明な場合は柱穴現れしてない建物についててて、下記のとおり表記した。

○ 現れ区間に現れる建物、● 建物現れ、● (直角) 以上×1箇  
△ 平面現れ、柱位置 ● (直角) 柱位置上、● (直角) 柱位置下  
□ 仕立ての柱が現れない建物、- 建物、柱間寸法かうら。柱脚の柱頭部は ● (直角) 。不明な場合は (○) または (○~) を表記。



第9図 SB1~6掘立柱建物跡 遺構配置図

## 【SB1 据立柱建物跡】

[位置] A・C区西部、標高 23.3 ~ 23.5m の平坦面、検出面：基本層 Xb ~ Xc 層上面

[建物間数] 桁行 2 間以上 × 梁行 3 間 / 南北棟建物跡か？

[建物方向] N~15° ~ W

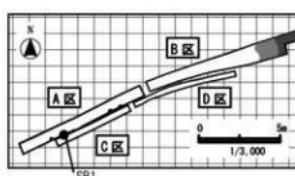
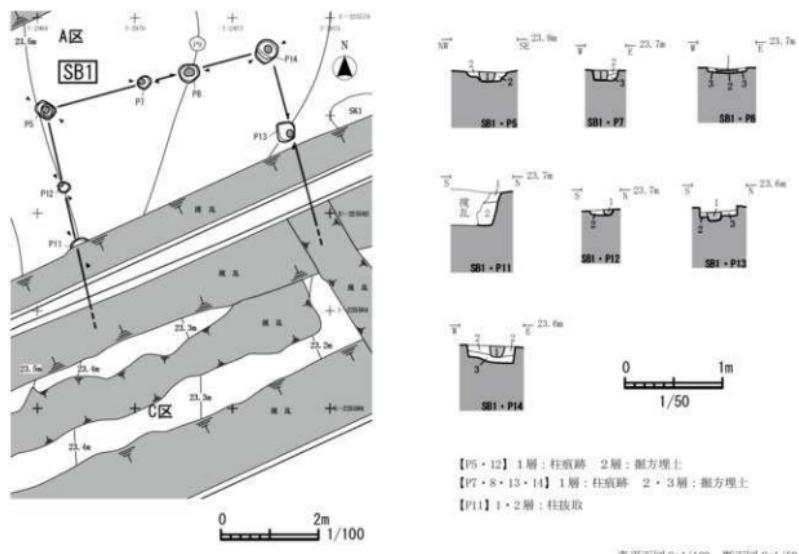
[構成 Pit] P5, 7, 8, 11 ~ 14

[平面規模] 桁行 2.9m 以上 × 梁行 4.7m (身舎面積 13.6 m<sup>2</sup> 以上)

[柱間寸法] 桁行 1.2 ~ 1.7m • 梁行 0.9 ~ 2.1m

[出土遺物] 土師器 (P11, 13, 14)

[重複] なし ※現代の搅乱により南半の柱穴は残存していない



第 10 図 SB1 据立柱建物跡

遺構番号	柱穴・ビット跡方 (井深・孔隙: cm, 検出標高: m)						構造跡			柱 築 造 (重複・出土遺物等)	
	平面形	直 通 路	側 壁 通 路	底面	底面 標高	所土	平面形	直 通 路	側 壁 通 路		
P5	四角形	0.0	0.0	21	1.1	23.3	柱穴 + s	円形	1.1	3.5	ホ モ ル ム 理 土 上 部
P7	円形	2.7	1.7	11	23.3	擬方 理土 + s	円形	1.1	1.2	3.4	ホ モ ル ム 理 土 下 部
P9	楕円形	11	3.7	8	23.3	擬方 理土 + s	楕円形	2.2	1.8	3.4	レ ジ モ ル ム 理 土 上 部
P11	円形?	3.8	1.1	34	23.2	擬方 理土 + s 擬方 理土 + s	円形	1.1	—	—	レ ジ モ ル ム 理 土 下 部
P12	円形	2.4	2.2	6	23.3	11cm	円形	1.0	0.4	3.4	ホ モ ル ム 理 土 多 量
P13	四角形	0.0	0.0	16	23.2	擬方 理土 + s 擬方 理土 + s	円形	1.0	1.1	3.4	レ ジ モ ル ム 理 土 上 部
P14	円形	1.6	1.1	19	23.3	擬方 理土 + s 擬方 理土 + s	円形	1.0	0.5	3.4	ホ モ ル ム 理 土 上 部

## 【SB2 挖立柱建物跡】

【位置】 A・C 区西部、標高 23.0 ~ 23.2m の平坦面、検出面：基本層 Xb ~ Xc 層上面  
【建物間数】 桁行 4 間（推定） × 梁行 2 間 / 南北棟建物跡

【建物方向】 N-15° -W  
【構成 Pit】 P6.15 ~ 20.41

【平面規模】 桁行 6.2m × 梁行 4.2m (身舎面積 26.04 m<sup>2</sup>)

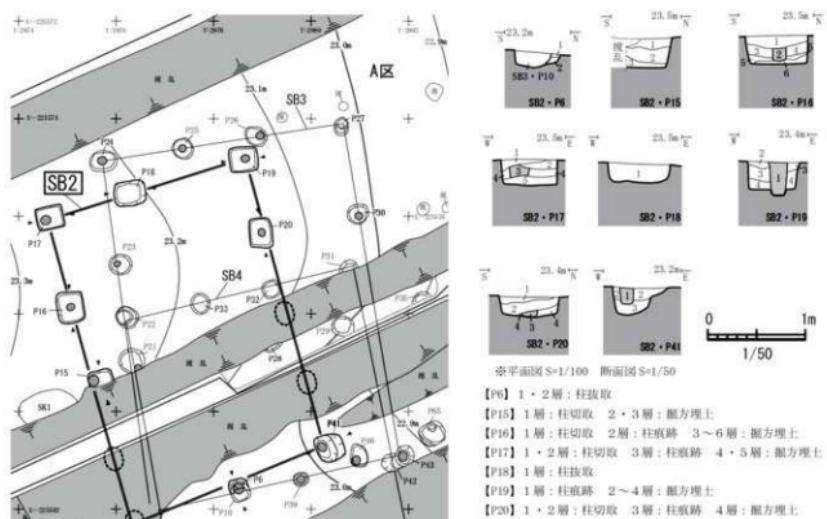
【柱間寸法】 桁行 1.5 ~ 1.8m · 梁行 1.7 ~ 2.5m

【出土遺物】 土師器・須恵器 (P15 ~ 20)、石器 (P16)

/ うち P16 柱切取穴出土土師器壺 (ロクロ成形・内黒坏) を図示 (第 22 図 1)

【重複】 SB2 · P6 → SB3 · P10 [SB2 → SB3]

※現代の搅乱により南半の柱穴の多くは残存していない



※平面図 S=1/100 断面図 S=1/50

[P6] 1・2 層：柱抜取

[P15] 1 層：柱切取 2・3 層：掘方埋土

[P16] 1 层：柱切取 2 层：柱痕跡 3~6 層：掘方埋土

[P17] 1・2 層：柱切取 3 層：柱痕跡 4・5 層：掘方埋土

[P18] 1 层：柱抜取

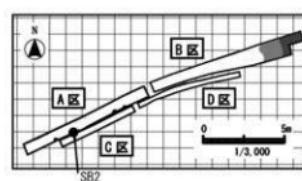
[P19] 1 层：柱痕跡 2~4 層：掘方埋土

[P20] 1・2 層：柱切取 3 层：柱痕跡 4 层：掘方埋土

[P21] 1 层：柱痕跡 2・3 層：掘方埋土

遺物番号	柱穴・ピット概要 (基盤・埋蔵・c.s. 深度高さ : m)			柱 縦 距			柱 横 距			施 用 (表面・出土遺物等)
	平面形	長	幅	埋蔵	深度	柱	平面形	長	幅	
SB2-P6	楕円形	3.2	1.0	10	22.8	—	—	—	—	SB2-P15 以下: 柱抜取 SB2-P16: 柱上土 SB2-P17: 柱上土 SB2-P18: 柱上土 SB2-P19: 柱上土 SB2-P20: 柱上土 SB2-P21: 柱上土
SB2-P15	楕円形	3.1	1.1	31	22.9	楕円形	22	22	28	SB2-P15 以下: 柱抜取 SB2-P16: 柱上土 SB2-P17: 柱上土 SB2-P18: 柱上土 SB2-P19: 柱上土 SB2-P20: 柱上土 SB2-P21: 柱上土
SB2-P16	楕円形	4.4	3.4	29	23.0	楕円形	18	15	34	SB2-P15 以下: 柱抜取 SB2-P16: 柱上土 SB2-P17: 柱上土 SB2-P18: 柱上土 SB2-P19: 柱上土 SB2-P20: 柱上土 SB2-P21: 柱上土
SB2-P17	楕円形	3.5	4.7	28	23.0	楕円形	22	18	34	SB2-P15 以下: 柱抜取 SB2-P16: 柱上土 SB2-P17: 柱上土 SB2-P18: 柱上土 SB2-P19: 柱上土 SB2-P20: 柱上土 SB2-P21: 柱上土
SB2-P18	楕円形	4.4	3.0	20	23.0	楕円形	—	—	—	SB2-P15 以下: 柱抜取 SB2-P16: 柱上土 SB2-P17: 柱上土 SB2-P18: 柱上土 SB2-P19: 柱上土 SB2-P20: 柱上土 SB2-P21: 柱上土
SB2-P19	楕円形	3.9	3.1	35	22.7	楕円形	18	17	34	SB2-P15 以下: 柱抜取 SB2-P16: 柱上土 SB2-P17: 柱上土 SB2-P18: 柱上土 SB2-P19: 柱上土 SB2-P20: 柱上土 SB2-P21: 柱上土
SB2-P20	楕円形	4.0	4.4	22	22.9	楕円形	18	15	34	SB2-P15 以下: 柱抜取 SB2-P16: 柱上土 SB2-P17: 柱上土 SB2-P18: 柱上土 SB2-P19: 柱上土 SB2-P20: 柱上土 SB2-P21: 柱上土
SB2-P21	楕円形	3.7	3.5	30	22.5	楕円形	20	17	34	SB2-P15 以下: 柱抜取 SB2-P16: 柱上土 SB2-P17: 柱上土 SB2-P18: 柱上土 SB2-P19: 柱上土 SB2-P20: 柱上土 SB2-P21: 柱上土

第 11 図 SB2 挖立柱建物跡



### 【SB3 掘立柱建物跡】

【位置】A・C区西部、標高 23.0 ~ 23.2m の平坦面、検出面：基本層Xb ~ Xc 層上面

〔建物間数〕 柱行4間（推定）×梁行3間／南北棟律物跡

[建物方向] N=10° ±W

〔構成 Pit 〕 P10.21.23 ≈ 27.30.39.43

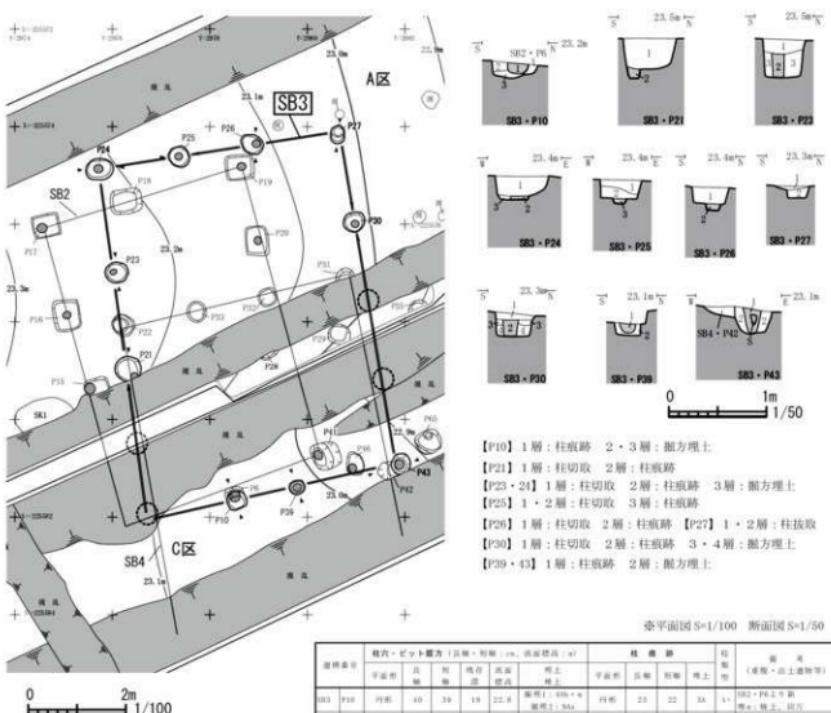
〔平面規模〕 柱行 6.9m × 檻行 5.0m (身全面積 34.5 m<sup>2</sup>以上)

[柱間寸法] 柱行 1.6(推定) ≈ 2.1m; 梁行 1.3 ≈ 2.2m

〔出土遺物〕 繩文土器・土師器 (P24)

[重複] SB2 : P6 → SB3 : P10 / SB4 : P42 → SB3 : P43 [SB2 : 4 → SB3]

※現代の搅乱により南半の柱穴のうち残存していないものが多い



第12図 SB3掘立柱建物跡

## 【SB4 挖立柱建物跡】

[位 置] A・C区西部、標高 23.0 ~ 23.2m の平坦面、検出面：基本層 Xb ~ Xc 層上面

[建物間数] 枝行 2 間以上 × 梁行 3 間 / 南北棟建物跡か?

[建物方向] N-12° -W

[構成 Pit] P22, 31 ~ 33, 42

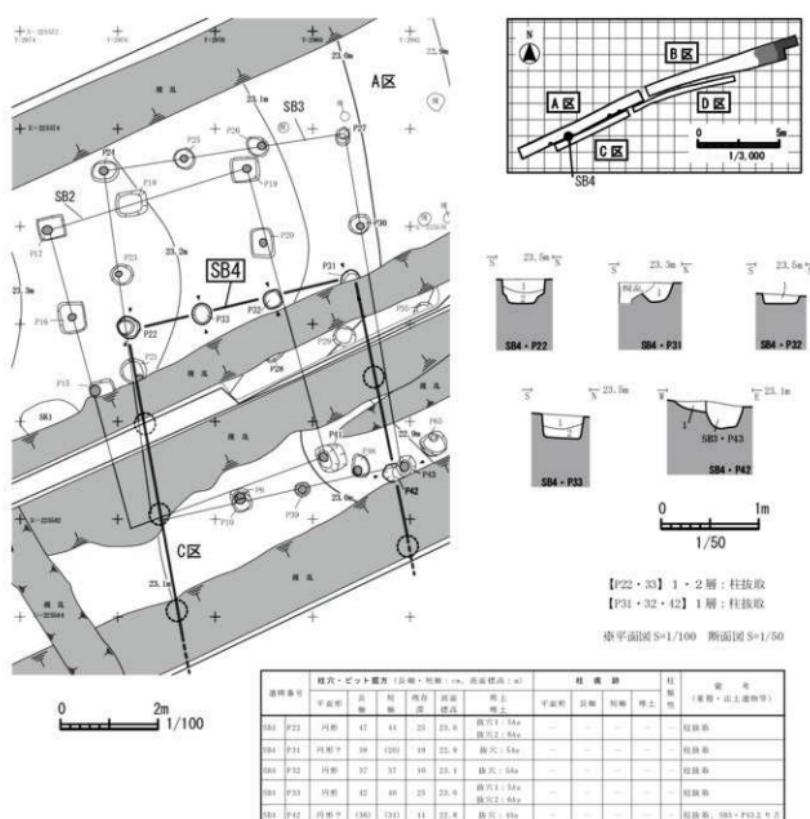
[平面規模] 枝行 4.1m 以上 × 梁行 4.7m (身舎面積 19.27 m<sup>2</sup> 以上)

[柱間寸法] 枝行不明・梁行 1.5 ~ 1.7m

[出土遺物] なし

[重複] SB4・P42→SB3・P43 【SB4→SB3】

※現代の搅乱により南北の柱穴は残存していない



第 13 図 SB4 挖立柱建物跡

### 【SB5 堀立柱建物跡】

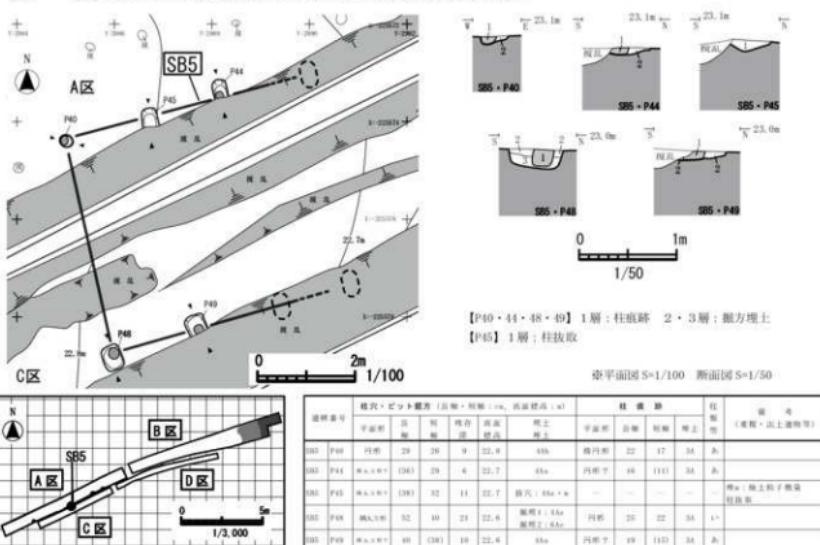
【位 置】 A・C 区西部、標高 22.7 ~ 22.8m の平坦面、検出面：基本層 Xb ~ Xc 層上面

【建物間数】 桁行 2 間以上 × 梁行 1 間 / 東西棟建物跡 【建物方向】 N-13° -W

【構成 Pit】 P40, 44, 45, 48, 49 【平面規模】 桁行 3.3m 以上 × 梁行 4.5m (身舎面積 14.85 m<sup>2</sup> 以上)

【柱間寸法】 桁行 1.6 ~ 1.8m · 梁行 4.5m 【出土遺物】 なし

【重 複】 なし ※現代の搅乱により東半の柱穴は残存していない



第 14 図 SB5 堀立柱建物跡

### 【SB6 堀立柱建物跡】

【位 置】 A 区西部、標高 22.9m の平坦面、検出面：基本層 Xb ~ Xc 層上面

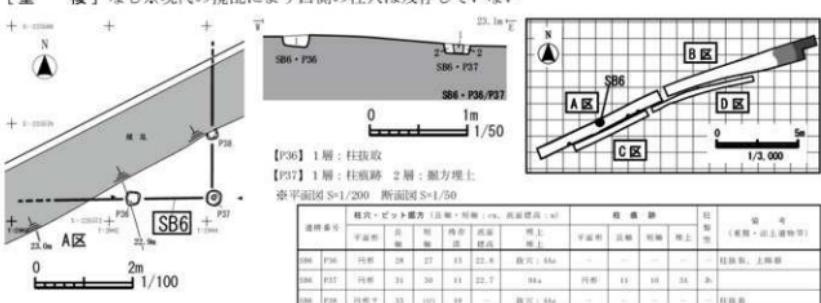
【建物間数】 桁行 1 間以上 × 梁行 1 間以上 / 棟方向不明 ※調査区外 (北側) へ延びる

【建物方向】 N-0° -W 【構成 Pit】 P36 ~ 38

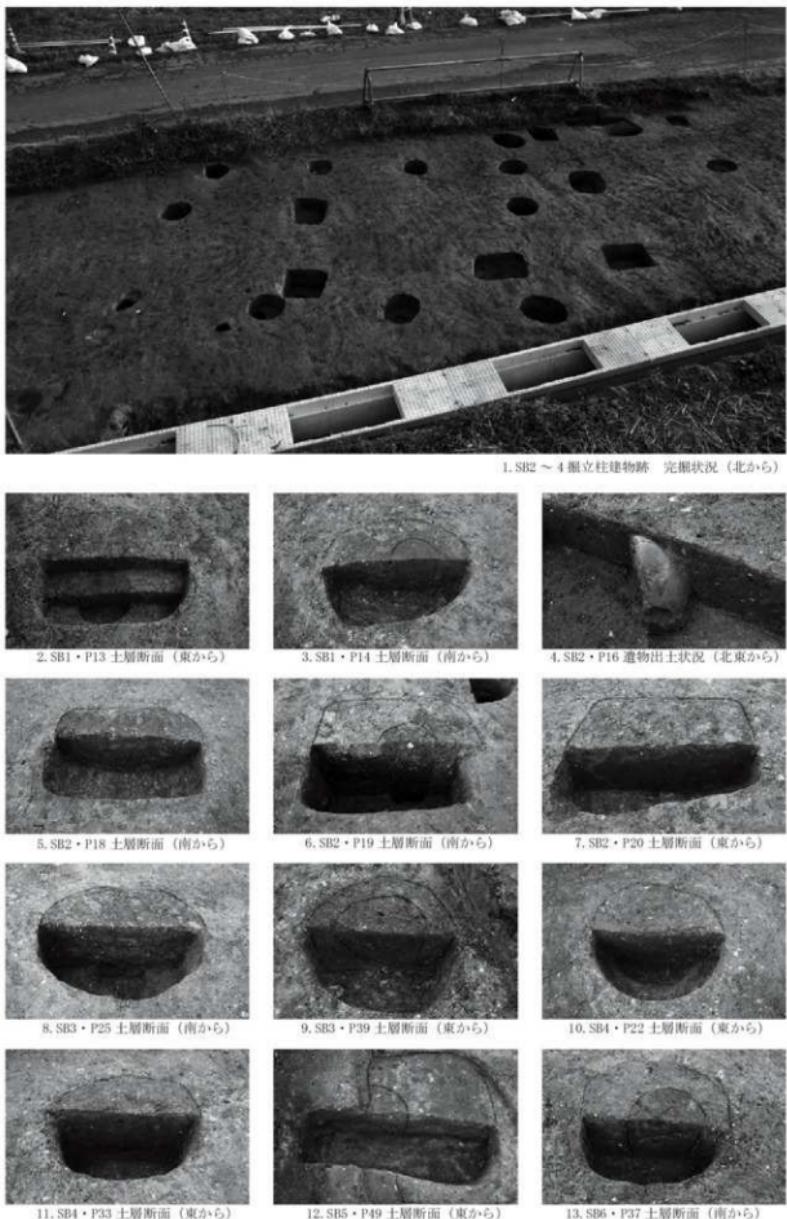
【平面規模】 桁行 1.6m 以上 × 梁行 1.3m 以上 (身舎面積 不明)

【柱間寸法】 桁行 1.6m · 梁行 1.3m 【出土遺物】 土師器 (P36)

【重 複】 なし ※現代の搅乱により西側の柱穴は残存していない



第 15 図 SB6 堀立柱建物跡



第16図 SB1~6 掘立柱建物跡（写真図版）

(2) その他の柱穴・ピット (第17~24図、第6表)

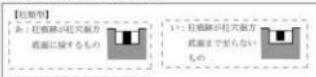
本項では、建物として認定できなかった柱穴・ピット 129 個について若干の記載を行う。なお、柱穴・ピット個別の情報は、今後もさらなる検討が加えられるよう、平面図を第 17-1~5 図、断面図を第 18~20 図、規模・堆積土・出土遺物などのデータを第 6 表に掲載した。

柱穴・ビットは、基本層Xb～c層において確認した。柱穴・ビットは、A区の西端を除くほぼ全域、B区東半、C区西侧の範囲に分布するが、特にB区東半部分に多くのビットが分布している。検出した柱穴・ビットの規模・平面形は、長軸17～131cm、短軸15～75cmの円形・楕円形・隅丸方形を呈し、残存深は4～54cmほどである。検出した129個のうち、33個で直径11～28cmの円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。全体として、今回確認した柱穴・ビットは、平面形が円形・楕円形、掘方規模が長軸20～40cm前後、柱痕跡が15cm前後のものが主体といえる。

第6-1表 谷原遺跡1次調査(A~D区) ピット・柱穴跡属性表(1)-P1~110-

第6-2表 谷原遺跡1次調査(A~D区) ピット・柱穴跡属性表(2)-P111~167-

#### ● ピット（柱穴・小穴）類型



5：柱頭脚が柱穴張力  
直面よりさらに下  
に傾けます。

- 往復翻，應力的傳導，應變的量型**

#### ■ 土色

- |                      |                      |                  |
|----------------------|----------------------|------------------|
| 1: 黑褐毛(10W4/3)       | 2: 黑褐色(10W3/2)       | 3: 黄褐色(10W3/3)   |
| 4: 猫耳毛(10W4/3)       | 5: 黄褐色毛(10W4/3)      | 6: 金毛(10W3/3)    |
| 7: 1/2黑-黄褐色毛(10W3/2) | 8: 1/2黑-黄褐色毛(10W5/3) | 9: 褐毛(10W4/3)    |
| 10: 褐毛(10W4/3)       | 11: 黄褐色毛(10W5/3)     | 12: 黄褐色毛(10W3/3) |
| 13: 猫耳毛(10W4/3)      | 14: 褐毛(10W3/3)       | 15: 猫耳毛(10W3/3)  |
| 16: 褐毛(10W4/3)       | 17: 黑褐色毛(10W2/2)     | 18: 黄褐色毛(10W4/3) |
| 19: 黑褐色毛(10W6/3)     | 20: 黑褐色毛(10W2/3)     |                  |

■ 10

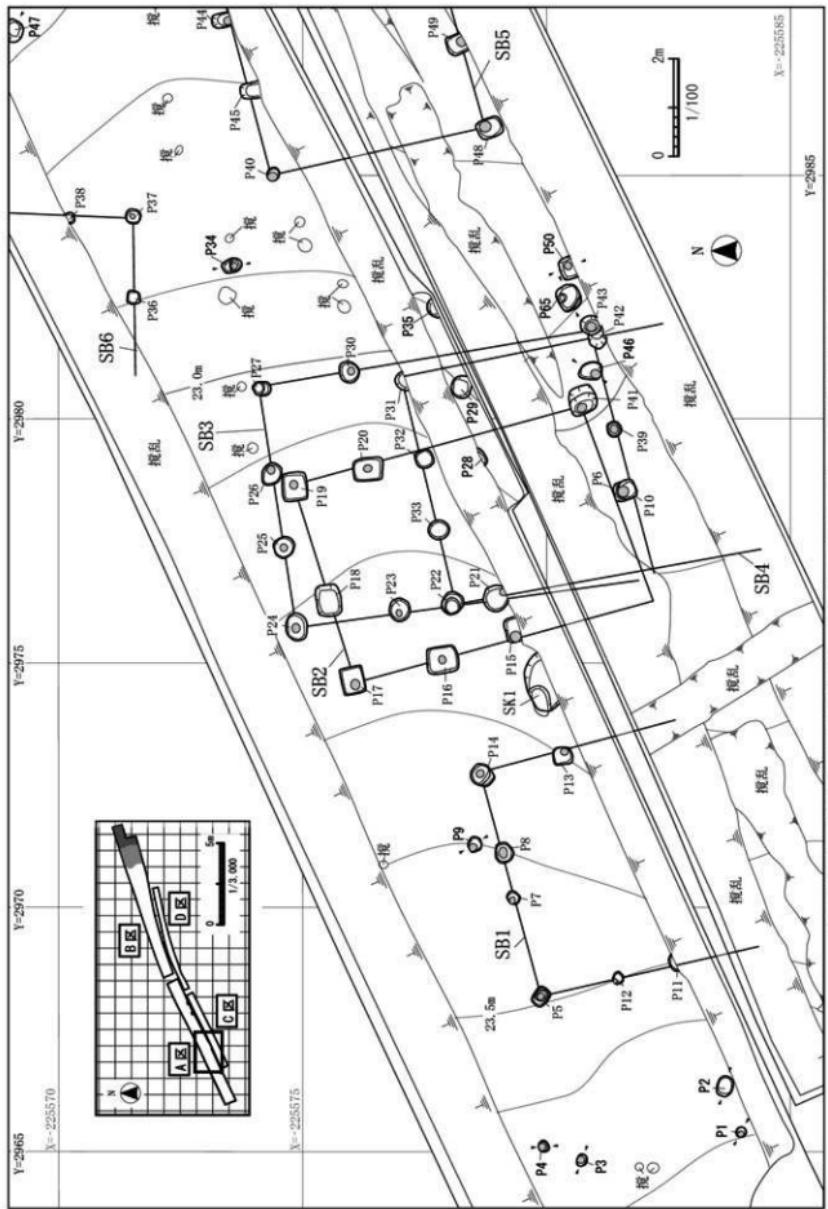
- |                 |              |              |
|-----------------|--------------|--------------|
| a: 地山ブック多く含む    | b: 地山ブック少く含む | c: 地山ブック少く含む |
| d: 地山ブック微々含む    | e: 地山地図少く含む  | f: 地山地図少く含む  |
| g: 地図地図少く含む     | h: 地図地図少く含む  | i: 地図地図少く含む  |
| j: 小冊子含む        | k: 小冊子少く含む   | l: 小冊子少く含む   |
| m: その他(上記以外のもの) |              |              |

4

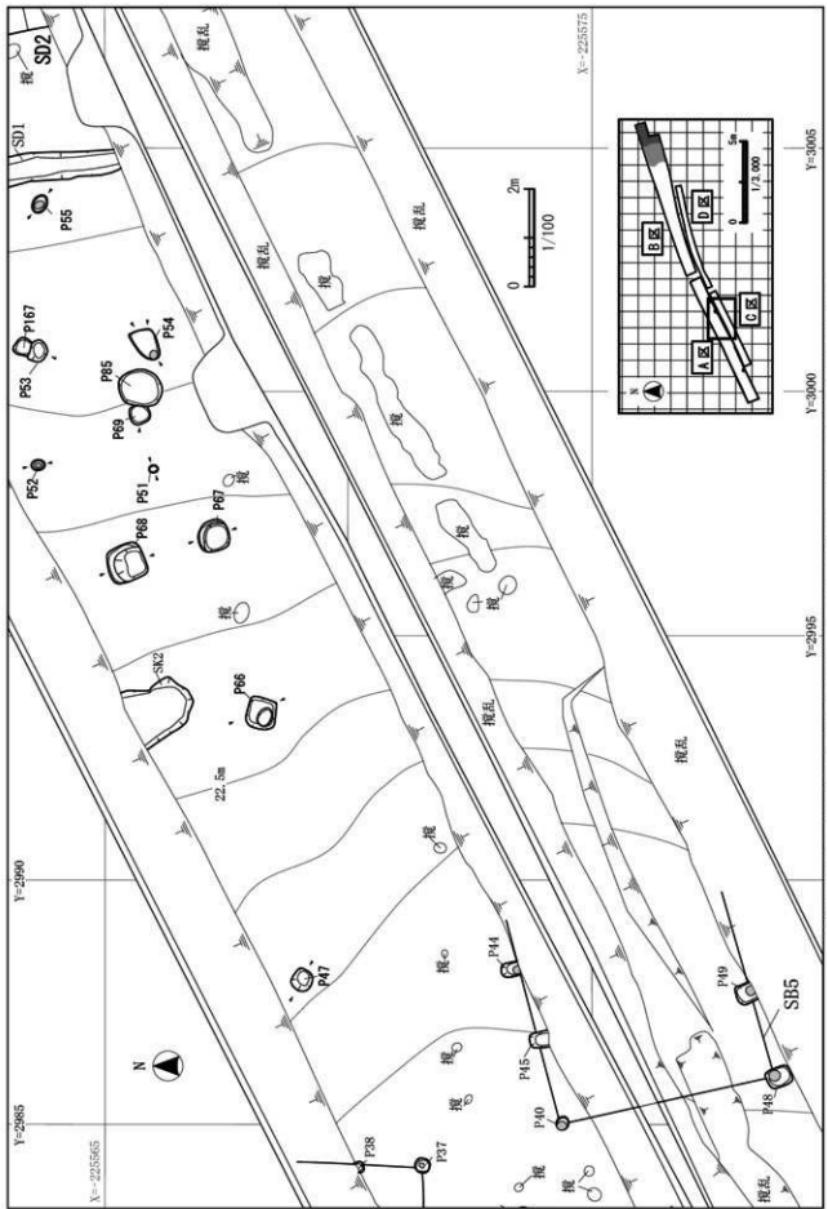
- 【記載例】  
■性別・土色：黒褐色(10W3/1)、土性：シルト、混入物：地山ブロック多く含む  
●その他の記載事項

■巨大・モードの新開拓

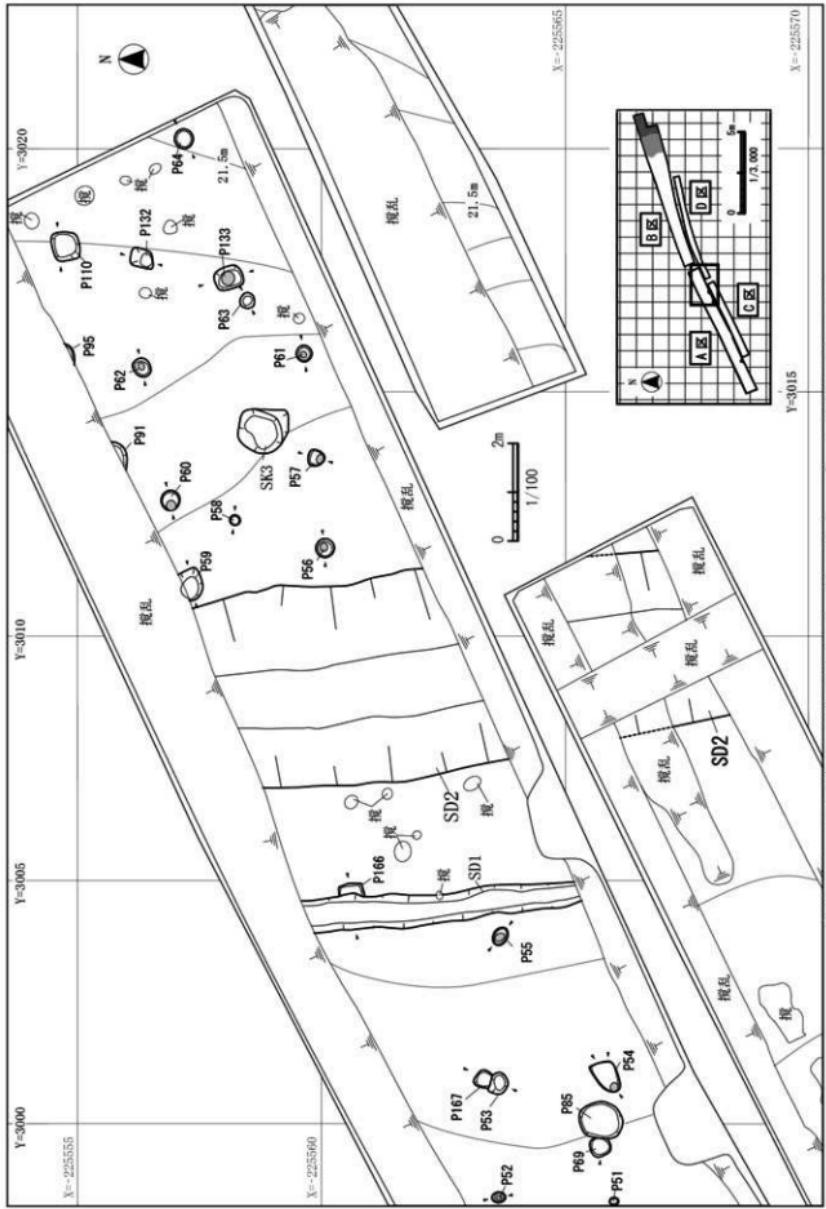
- 虹のビット新規の「種子・堆積土（堆積土）」記載事例
  - 虹の場合は「施設」を意味する
    - 「種」・「種子」等の用語は「種子」・「穴」の堆積土が2種以上に分離した場合を示す
    - 「穴」は「堆積土の隙間に、堆積土」、「穴」は「底」、抜き取り穴」の堆土・堆積土。
    - 「切」は「切り取った堆土の堆土・堆積土」、「切穴」は「抜き取り穴」の堆土・堆積土。
  - 参考例の記載事例
  - 虹取則：虹を抜き取られているもの。虹取則：虹が切り取られているもの。
    - この二つの用語は、出土物を指す



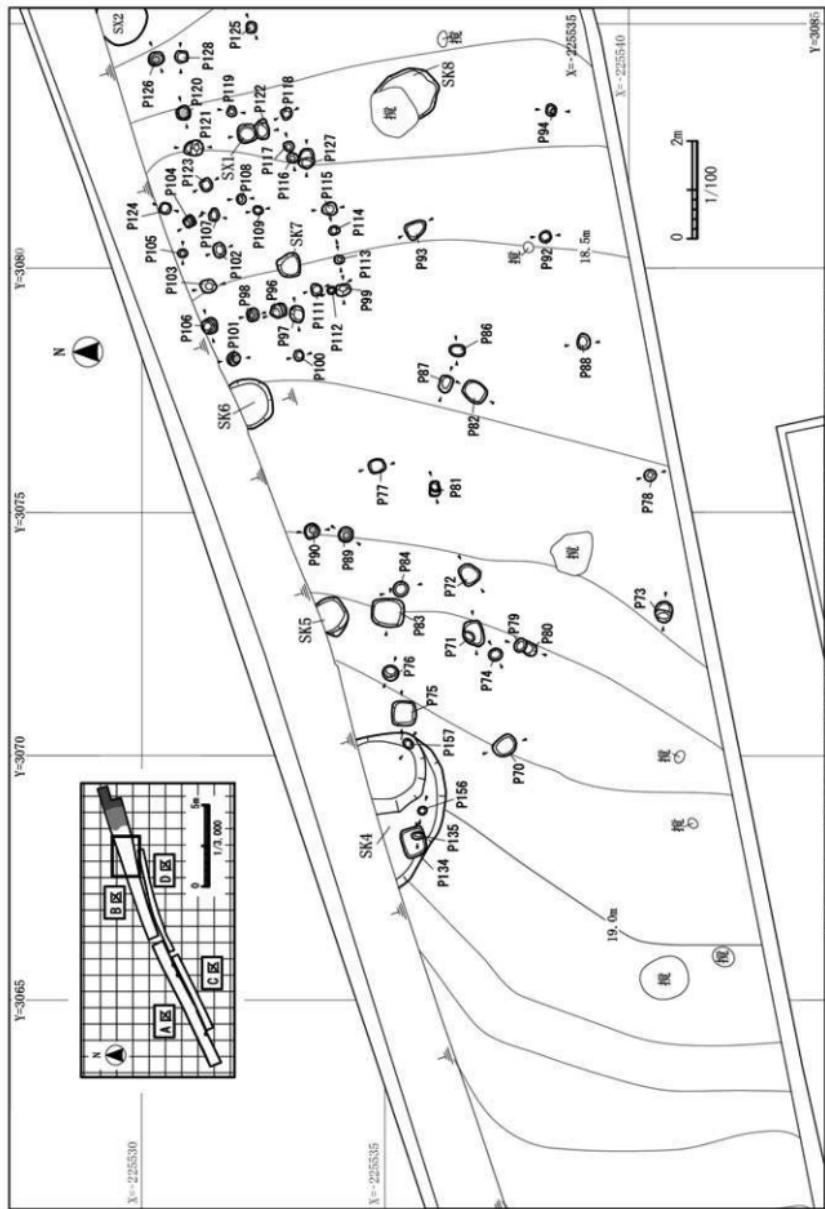
第三回 谷原道跡（次調査）モジツ下遣構能圖（一）



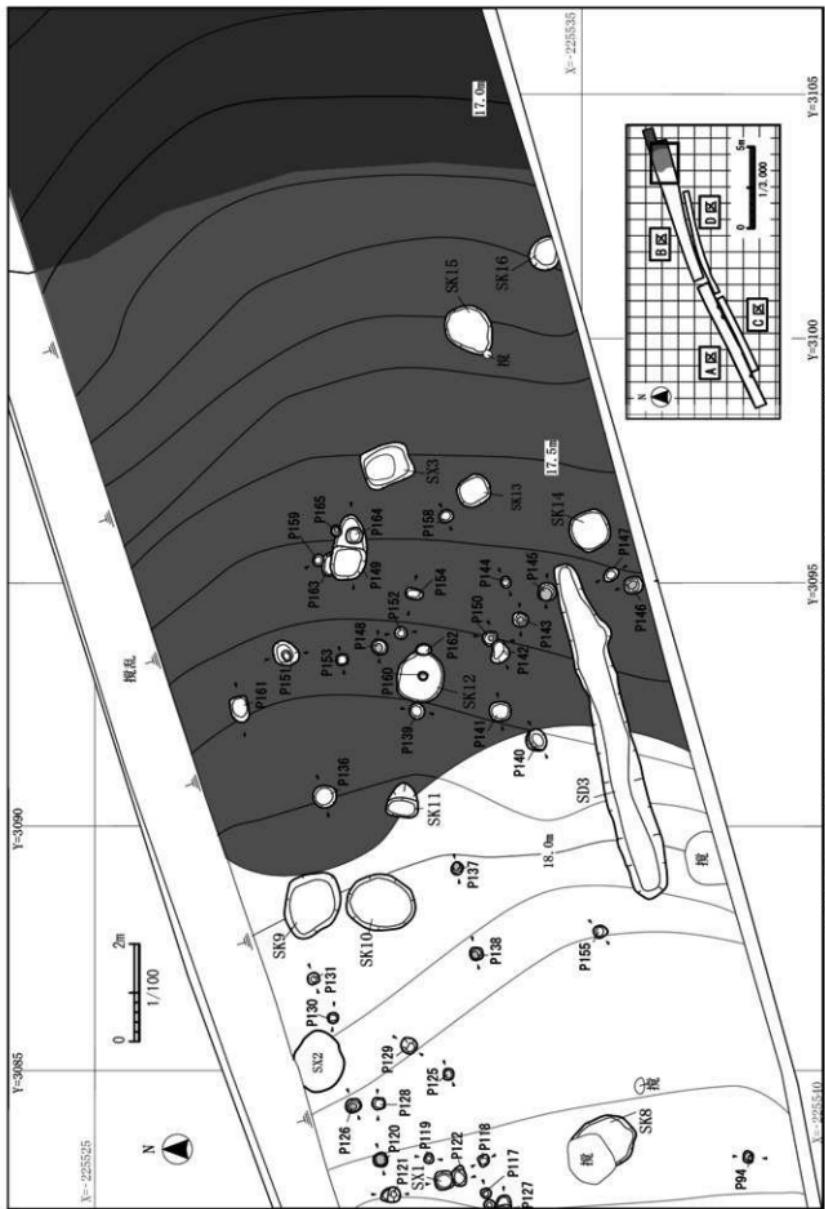
第17-2図 谷原遺跡（1次調査）その他の柱穴・ビット遺構配置図（2）



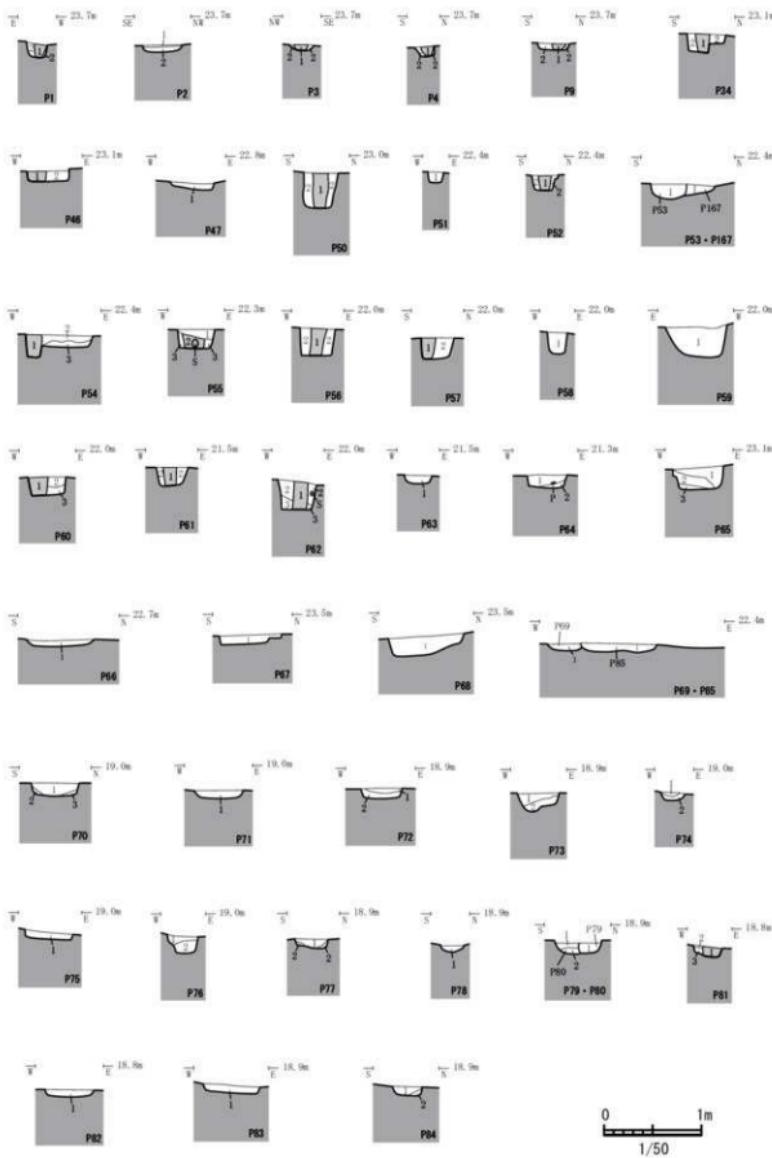
第17-3図 谷原遺跡(1次調査) その他の柱穴・ビット遺構配置図 (3)



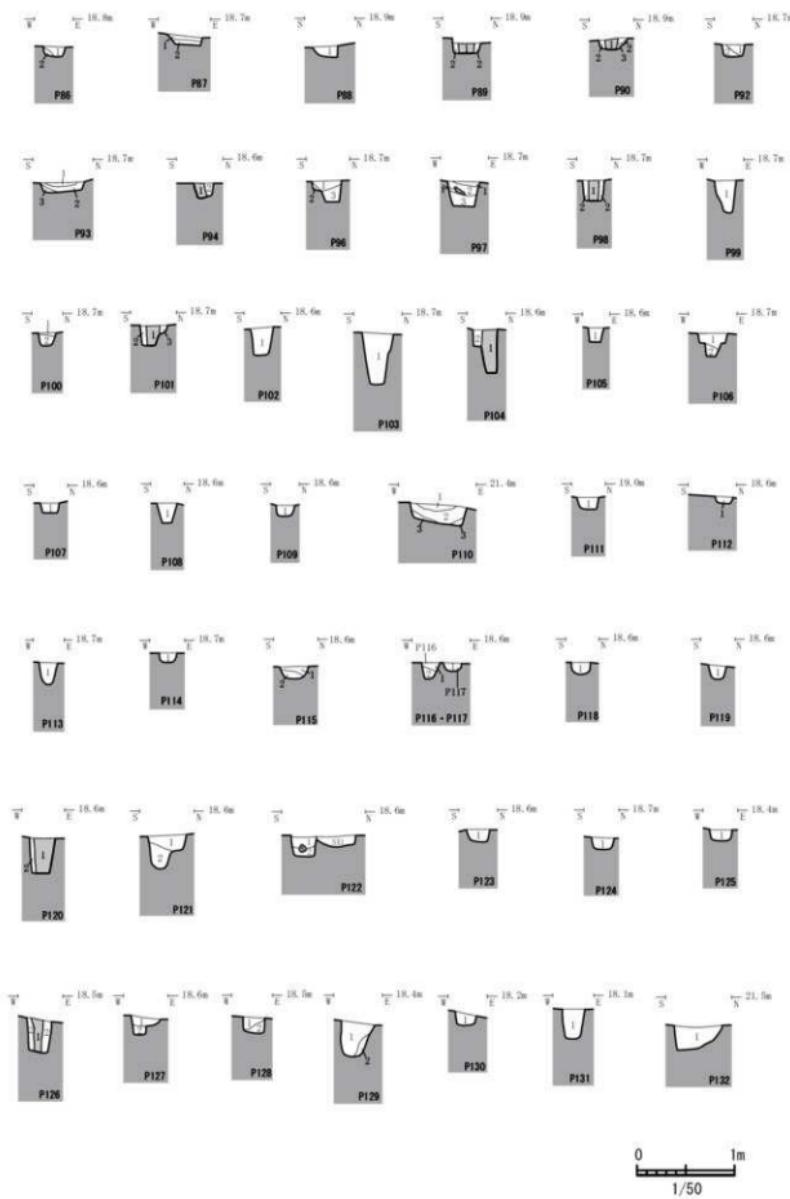
第17-4図 谷原遺跡(1次調査)その他の柱穴・ビット遺構配置図(4)



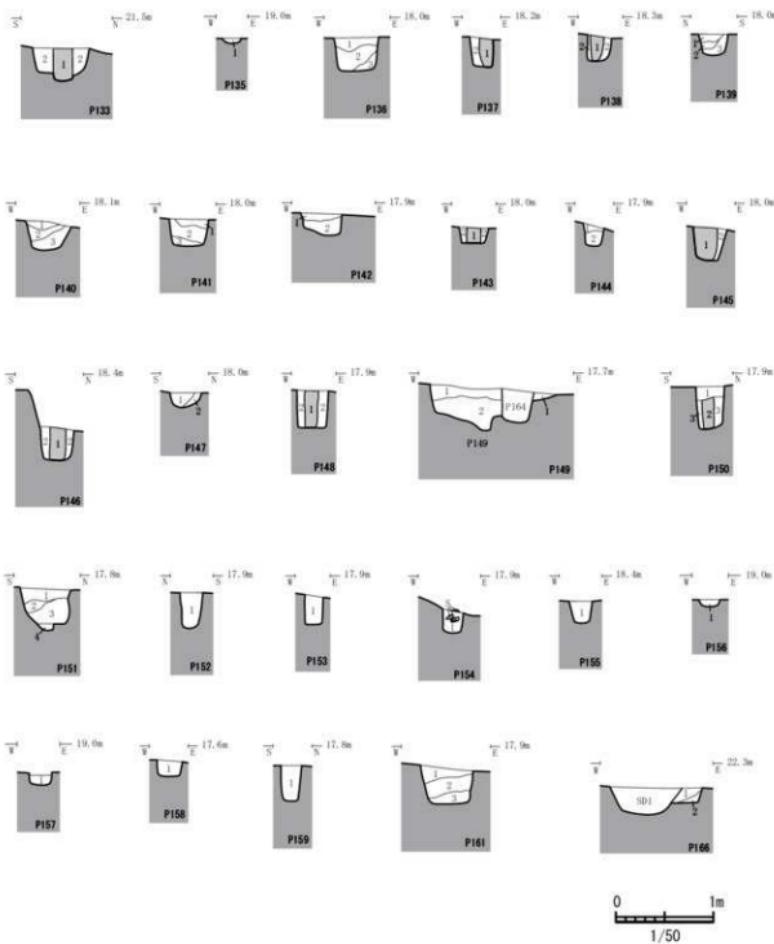
（5）圖式下記述の如きは、各々の種類を示すものである。



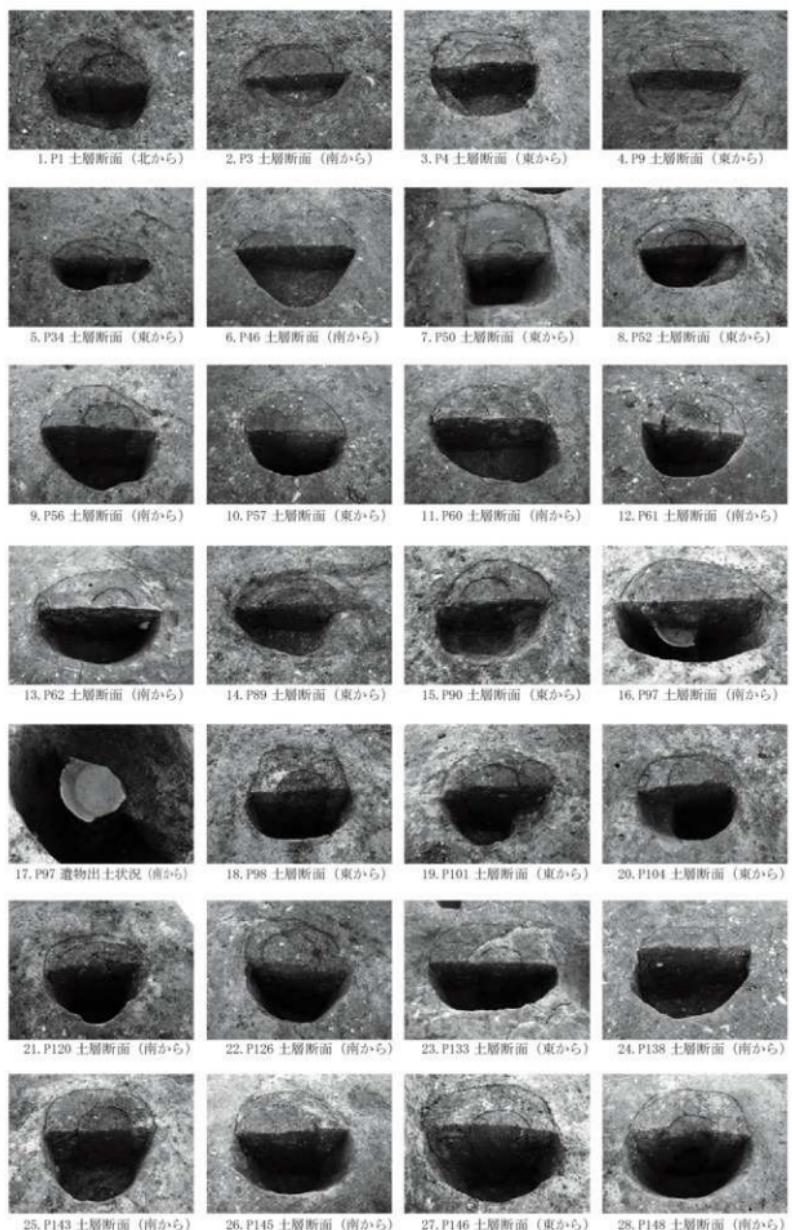
第18図 その他のピット・柱穴 断面図（1）- P1~84 -



第19図 その他のピット・柱穴 断面図（2）- P86～132 -



第20図 その他のピット・柱穴 断面図（3）－P133～166－



第21図 その他のピット・柱穴（写真図版）

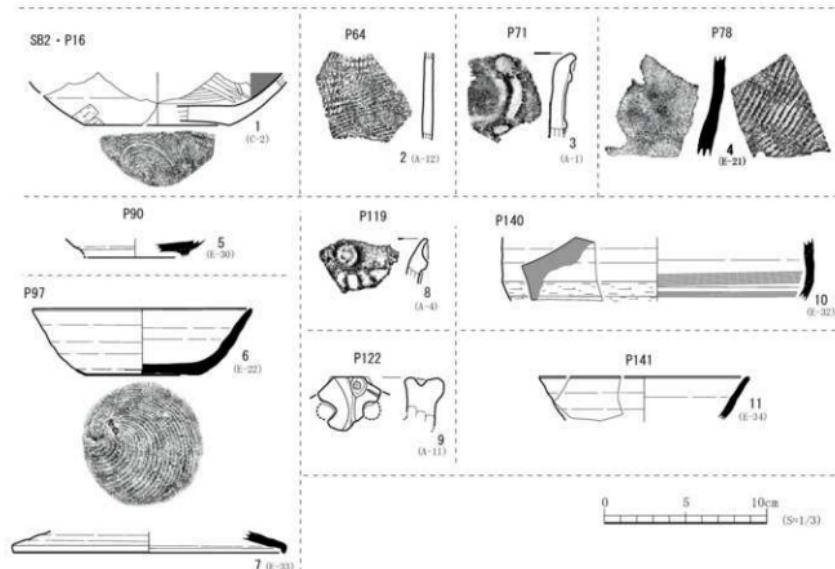
## (3) 堀立柱建物跡、その他の柱穴・ピット出土遺物 (第22~24図、第7表)

堀立柱建物跡及び建物の柱穴として認定できなかった柱穴・ピットからは、第7表のとおり、縄文土器313点[深鉢313点(2,340g)]、土師器213点[壺71点(365g)・高台付壺1点(15g)・甕141点(835g)]、須恵器31点[壺12点(185g)・高台付壺2点(15g)・蓋2点(15g)・瓶類1点(10g)・甕14点(375g)]、石器11点[剥片11点(206,6g)]が出土した。

第7表 谷原遺跡1次調査 堀立柱建物跡、その他の柱穴・ピット出土遺物一覧

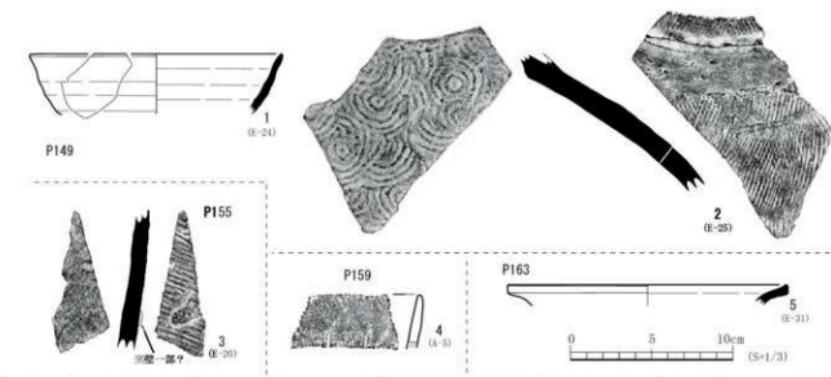
遺跡・部位	縄文土器		土師器		須恵器		石器		小計
	件	高台付 壺	件	高台付 壺	件	高台付 壺	件	高台付 壺	
SB1	P11 壺底	1			1		(15)		2
	P12 壺底		(10)		2		(15)		2
	P13 壺底		(10)		1		(115)		1
	P14 壺底		(10)		6		(45)		5
SB2	P15 柱穴六	1	9	1	11		(55)		2
	P16 柱穴六	3	9	3	3	14	(102)		2
	P17 柱穴六	(105)	(20)	(5)	(5)	13	(45)		1
	P18 柱穴六	1	11	1	12		(115)		1
	P19 柱穴六	10	4	1	2	17	(115)		4
	P20 柱穴六	4	2	2	6	11	(25)		2
	P21 柱穴六	(20)		(5)	(5)	7	(25)		1
	P22 柱穴六	8	1			(30)	(45)		1
	P23 柱穴六	(25)	(5)						1
	P24 柱穴六	3	1						1
SB3	P25 柱穴六	1				4			1
	P26 柱穴六		(10)			1	(5)		1
P27	P27 壺底	1			1		(5)		1
	P28 壺底		(5)			2	(25)		1
P29	P29 壺底	2			2		(20)		1
	P30 壺底		(10)			2	(20)		1
P31	P31 壺底	1	1	1	2		(10)		1
	P32 壺底	(5)	(5)			5	(15)		1
P33	P33 壺底	5			5		(15)		1
	P34 壺底	(10)			1		(5)		1
P35	P35 壺底				1		(5)		1
	P36 壺底				1		(5)		1
P37	P37 壺底	2			2		(10)		1
	P38 壺底	(10)			1		(5)		1
P39	P39 壺底	1	2	1	2		(25)		1
	P40 壺底	(10)	(20)	(10)	(10)	2	(20)		1
P41	P41 壺底	1	1	1	2		(20)		1
	P42 壺底	(5)	(15)	(5)	(5)	5	(20)		1
P43	P43 壺底	4			4		(20)		1
	P44 壺底	2			2		(20)		1
P45	P45 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P46 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P47	P47 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P48 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P49	P49 壺底	2	2	1	2		(20)		1
	P50 壺底	(10)	(20)	(5)	(10)	5	(20)		1
P51	P51 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P52 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P53	P53 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P54 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P55	P55 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P56 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P57	P57 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P58 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P59	P59 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P60 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P61	P61 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P62 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P63	P63 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P64 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P65	P65 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P66 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P67	P67 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P68 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P69	P69 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P70 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P71	P71 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P72 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P73	P73 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P74 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P75	P75 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P76 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P77	P77 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P78 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P79	P79 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P80 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P81	P81 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P82 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P83	P83 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P84 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P85	P85 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P86 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P87	P87 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P88 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P89	P89 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P90 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P91	P91 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P92 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P93	P93 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P94 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P95	P95 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P96 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P97	P97 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P98 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P99	P99 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P100 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P101	P101 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P102 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P103	P103 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P104 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P105	P105 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P106 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P107	P107 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P108 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P109	P109 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P110 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P111	P111 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P112 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P113	P113 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P114 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P115	P115 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P116 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P117	P117 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P118 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P119	P119 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P120 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P121	P121 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P122 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P123	P123 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P124 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P125	P125 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P126 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P127	P127 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P128 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P129	P129 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P130 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P131	P131 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P132 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P133	P133 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P134 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P135	P135 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P136 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P137	P137 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P138 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P139	P139 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P140 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P141	P141 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P142 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P143	P143 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P144 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P145	P145 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P146 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P147	P147 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P148 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P149	P149 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P150 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P151	P151 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P152 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P153	P153 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P154 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P155	P155 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P156 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P157	P157 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P158 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P159	P159 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P160 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P161	P161 壺底	1	1	1	1		(10)		1
	P162 壺底	(5)	(5)	(5)	(5)	5	(20)		1
P163	P163 壺底								

柱穴・ピットから出土した遺物のほとんどは、出土状況からみて、遺構の周辺から流入もしくは柱穴造成時に埋土に混入したものと考えられ、遺構に伴うと判断できたものは少ない。このうち、図示できたものは、SB2・P16 出土の土師器壺（第 22 図 1）、P64・71・119・122・159 出土の縄文土器深鉢（第 22 図 2・3・8・9、第 23 図 4）、P90 出土の須恵器高台付壺（第 22 図 5）、P97 出土の須恵器壺（第 22 図 6）・須恵器蓋（第 22 図 7）、P140 出土の須恵器瓶類（第 22 図 10）、P141 出土の須恵器壺（第 22 図 11）、P149 出土の須恵器壺（第 23 図 1）・甕（第 23 図 2）、P78・155・163 出土の須恵器甕（第 22 図 4、第 23 図 3・5）である。



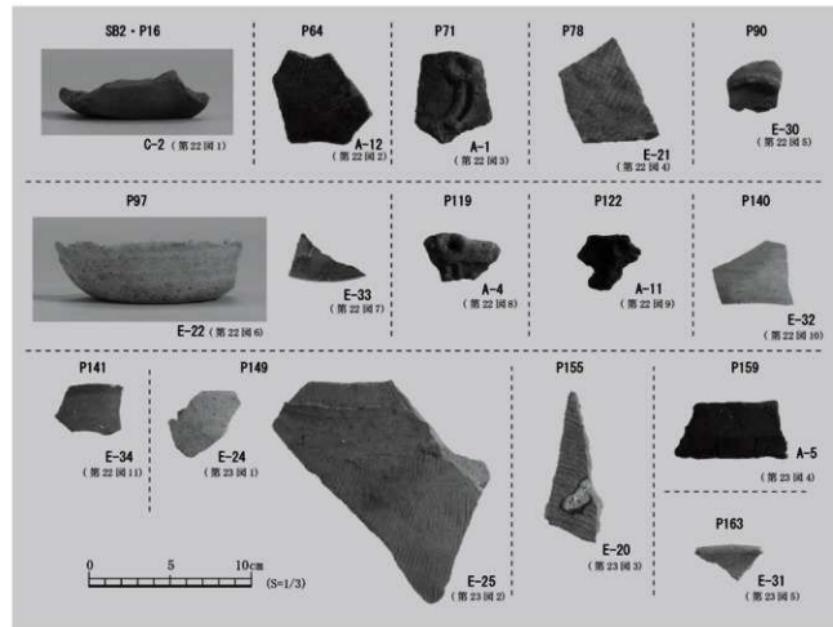
No.	番	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)・色調(外面・内面)・法蓋】その他の特徴の順に記載】	9番
1	SB2・P16	土師器	壺	脚部 ~底部	外面：脚部下部ノラ削り・底部輪郭系切手無調整・縦縫、内面：ツラミガサ・黑色処理、色調：外面・褐色(7.5YR4/3)、内面・褐色(10YR3/1)、法蓋：底径(9.0)cm・残存高3.2cm・縦厚0.6~1.2cm	C-2
2	P64	縄文土器	深鉢	脚部	外面・縄文(縦)、内面・ナマ、色調：外面・灰褐色(5YR4/2)・深褐色(10YR3/2)、内面・灰褐色(7.5YR4/4)、法蓋：底径(9.0)cm・残存高3.2cm・縦厚0.6~1.2cm	A-12
3	P71	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：断面・軽突起・口縁部付・沈縫・盲孔、内面：縫隙のため不明、色調：外面・ぶい赤褐色(5YR4/1)、内面・ぶい赤褐色(5YR4/4)、法蓋：底厚0.5~0.6cm	A-1
4	P78	須恵器	甕	脚部	外面：平行タタキ、内面：当て具ノナダ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・黄褐色(8YR4/1)、法蓋：器厚0.6~0.8cm	E-21
5	P90	須恵器	高台付壺	底部	外面：ロクロナダ・底部切り離し底法不明・一回輪ハラ削り・脚部ノラ削り無調整、内面：ロクロナダ、色調：外・内面・灰色(10YR4/1)、法蓋：底径(6.0)cm・残存高1.2cm・縦厚0.4~0.5cm、高台部低粗	E-30
6	P97	須恵器	瓶	口縁部 ~底部	外面：ロクロナダ・底部削り出し無調整、内面：ロクロナダ、色調：外・内面・ぶい黄褐色(10YR4/3)、法蓋：口径(13.4)cm・底径4.1cm・残高6.8cm・縦厚0.5~0.7cm	E-22
7	P97	須恵器	蓋	口縁部	外・内面：ロクロナダ、色調：外・灰褐色(5YR4/0)、内面：灰褐色(7.5YR4/1)、法蓋：口径(16.6)cm・残存高1.2cm・縦厚3~0.5cm	E-33
8	P119 1番	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：沈縫文・盲孔、内面：縫隙のため不明、色調：外・灰褐色(2.5YR4/2)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法蓋：縦厚1.1cm	A-4
9	P122 2番	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：ロ口唇部・盲孔・口縁部 他舟形・盲孔・沈縫文・黄褐色、内面：縫隙のため不明、色調：外・灰褐色(5YR4/1)、内面・ぶい赤褐色(5YR4/3)、法蓋：縦厚0.7~1.1cm	A-11
10	P140 2番	須恵器	瓶類	脚部	外面：ロクロナダ・回転ハラ削り・カギ目、色調：外・灰褐色(10YR4/2)、内面・灰褐色(5YR4/1)、法蓋：脚部径29.2cm・残存高3.9cm・縦厚0.4~0.5cm	E-32
11	P141 1番	須恵器	甕	口縁部	外・内面：ロクロナダ、色調：外・内面・灰色(10YR4/1)、法蓋：口径(12.8)cm・残存高2.8cm・縦厚0.3~0.4cm	E-34

第22図 堀立柱建跡、その他のピット・柱穴出土遺物 (1)



No.	番	種別	断面	現存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴(欄に記載)】	登録
1	P149 1番	須恵器	環	口縁部 ～脚部	外表面：ロクロナガ。色調：外面・灰黄色(5B6/2)、内面・灰黄褐色(10B6/2)。法量：口径(15.4)cm・残存高3.7cm・厚0.3～0.4cm	E-24
2	P149 1番	須恵器	甕	脚部	外表面：平行タタキ→ナガ。内面：当て其一ナガ。色調：外面・灰黄色(2.5B4/1)、内面・灰黄色(5B5/1)。法量：厚0.6～1.4cm	E-25
3	P155 1番	須恵器	甕	脚部	外表面：平行タタキ。内面：当て其一ナガ。色調：内外面・灰色(5B4/1)。法量：厚0.7～1.1cm。外面：縦付帯	E-26
4	P159 1番	陶文土器	深鉢	口縁部	外表面：網目状文。内面：ナガ。色調：外面・暗赤褐色(5B3/2)、内面・暗褐色(10B3/2)。法量：厚0.6～1.0cm	A-5
5	P163 1番	須恵器	甕	口縁部	外表面：ロクロナガ。色調：内外面・に高い赤褐色(5B6/3)。法量：口径(17.0)cm・残存高1.3cm・厚0.6cm	E-31

第23図 掘立柱建物跡・その他のピット・柱穴出土遺物（2）



第24図 掘立柱建物跡・その他のピット・柱穴出土遺物（写真図版）

## 2. 溝跡・土坑・焼成遺構

今回の調査（A～D区）では、溝跡3条（SD1～3）、土坑16基（SK1～16）、焼成遺構3基（SX1～3）を検出した（第25図）。以下、遺構ごとにその特徴等について記載する。なお、各遺構の特徴・出土遺物については第8・9表に示したとおりである。

第8表 谷原遺跡（1次調査）溝跡（SD1～3）・土坑（SK1～16）・焼成遺構（SX1～3）一覧表

遺構No.	検出箇所	検出長 (m)	規模 (cm) 上幅 下幅 厚さ	方向	断面形	出土遺物	備考	
							上幅	下幅
SD1	A区	5.6	北-南 40～76 26～44 27	東西形	土師器・須恵器・鉄製品	直壁：P166～SD1・直面標高：溝の内側が高く、北側が低い		
SD2	A・C区	9.6	北-南 360～422 112～153 119	U字形	調文土器・土師器・須恵器	直面標高：溝の内側が高く、北側が低い		
SD3	B区	7.1	東-西 67～90 49～50 18	東西形	土師土器・石器・土師器・須恵器	直面標高：溝の内側が高く、東側が低い		

遺構No.	検出箇所	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	断面形	堆積土	出土遺物		備考
							上幅	下幅	
SK1	A区	楕円形?	120×(52)	27	進行形	自然	土師器		
SK2	A区	小楕円形?	(334)×122	15	直状	自然	土師器・須恵器		
SK3	A区	不規則	100×90	41	進行形	自然	土師器		
SK4	B区	楕円形?	213×(152)	27	直状	自然	調文土器・石器・土師器・須恵器	直壁：SK4～P134・135・156・157	
SK5	B区	楕円形?	76×(32)	17	進行形	自然	調文土器・土師器		
SK6	B区	楕円形?	102×(70)	22	進行形	自然	調文土器・須恵器		
SK7	B区	不規則	48×47	15	進行形	人馬	調文土器		縦（大）を配えた土坑
SK8	B区	楕円形?	104×(65)	18	進行形	自然	調文土器		
SK9	B区	楕円形?	120×117	26	U字形	自然	調文土器・土師器・須恵器		
SK10	B区	楕円形?	140×116	18	直状	自然	調文土器・土師器		
SK11	B区	不規則	70×62	10	不規則	自然	調文土器		
SK12	B区	円形	106×100	18	不規則	自然	調文土器・土師器・須恵器	直壁：SK12～P160・162	
SK13	B区	円形	70×60	8	直状	自然	調文土器		
SK14	B区	円形	83×79	30	U字形	自然	調文土器		
SK15	B区	楕円形	99×95	27	U字形	自然	調文土器		
SK16	B区	円形?	465×(96)	44	U字形	自然	調文土器		

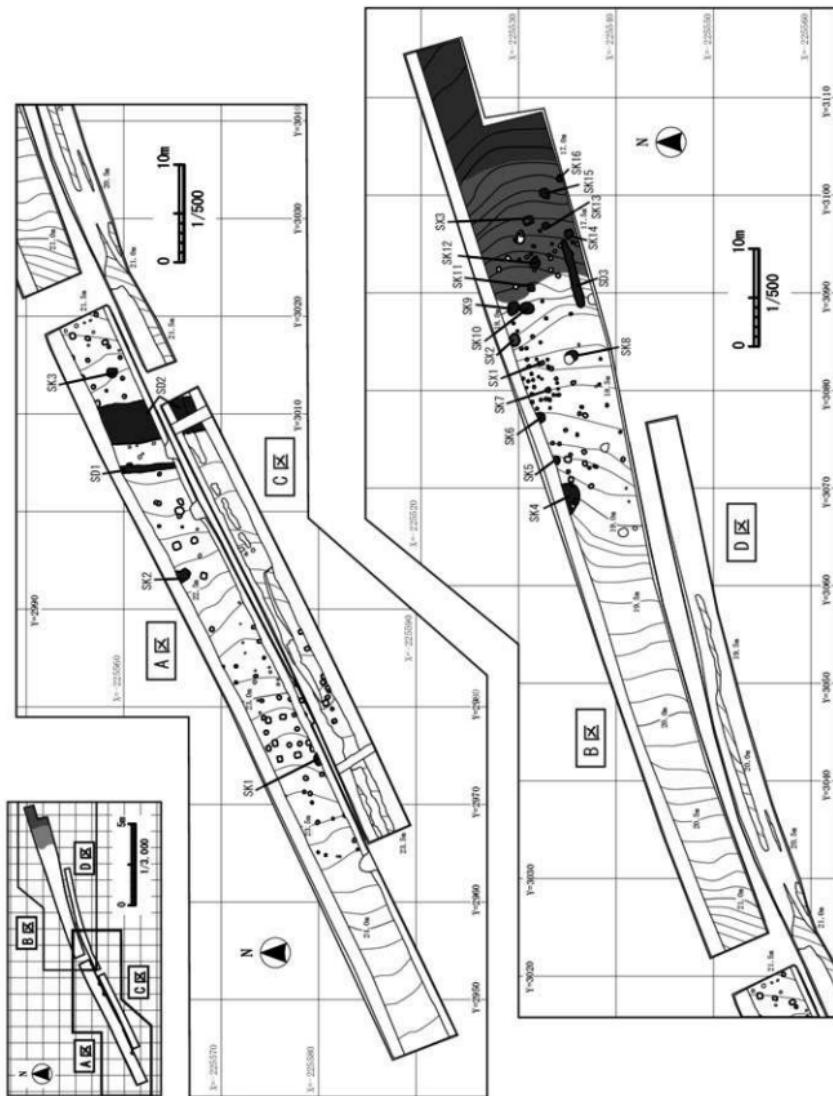
遺構No.	検出箇所	平面形	規模 (cm) [左: 幅/奥行/右: 厚さ]	深さ (cm) [左: 埋深/右: 厚さ]	底面形	堆積土	出土遺物		備考
							左: 幅	右: 厚さ	
SK1	A区	円形 (V形)	28×(138～36)	6 (10)	直状	調文土器・石器	瓶丸有・直壁：SK1～P122		
SK2	A区	楕円形? (-)	120×(96) (-)	4 (-)	直状	調文土器・土師器	瓶丸無		
SK3	A区	楕円形? (楕丸有・直壁)	62×(90) (102×81)	4 (-) (11)	不規則	調文土器・土師器・須恵器	瓶丸有・土師器・須恵器		

第9表 谷原遺跡1次調査 溝跡・土坑・焼成遺構 出土遺物一覧

SX1～3 遺構・部位	調文土器 深壁・鋸歯	土師器			調査部			SX1～3 堆積・部位	調文土器 深壁・鋸歯	土師器	調査部	石器 片剝	SK 堆積別 合計	
		横	縦	片	横	縦	片							
SD1		1	1	1	1	1	1	4 (20)	SK1 直壁	20 (100)	1	1	21 (140)	
		2	1	1	1	1	1	12 (40)	SK2 直壁	10 (100)	2	1	12 (100)	
		3	1	1	1	1	1	43 (840)	SK3 直壁	1 (100)	3	1	76 (200)	
SX2	1層	29 (96)	9 (130)	1 (5)	1 (130)	1 (105)	3 (85)	58 (415)	SX3 直壁	1 (100)	3 (25)	1 (200)	1 (100)	111 (236)
	2層	31 (120)	22 (165)	3 (25)	1 (20)	1 (85)	8 (70)	64 (71)						88
	3・4層	1 (25)	16 (105)	1 (30)	1 (105)	1 (105)	3 (20)	1 (20)						
SD3	1層	1 (80)	16 (60)	1 (25)	1 (60)	1 (50)	3 (40)	1 (40)						
	8	86 (440)	22 (20)	80 (335)	13 (29)	1 (105)	3 (105)	26 (48)						
SD+複別合計		1	1	1	1	1	1	224 (219)						

-総計

SK1～3 遺構・部位	調文土器 深壁・鋸歯	土師器			調査部			SK1～3 堆積・部位	調文土器 深壁・鋸歯	土師器	調査部	石器 片剝	SK 堆積別 合計	
		横	縦	片	横	縦	片							
SK1	堆積土	1 (35)	1 (35)	1 (5)	1 (35)	1 (35)	1 (5)	27 (115)	SK2 直壁	50 (100)	1	1	21 (140)	
	1層	3 (35)	3 (35)	1 (5)	3 (35)	3 (35)	1 (5)	43 (130)	SK3 直壁	43 (100)	1	1	43 (100)	
	2層	3 (35)	3 (35)	1 (5)	3 (35)	3 (35)	1 (5)	58 (130)						
SK2	1層	1 (35)	1 (35)	1 (5)	1 (35)	1 (35)	1 (5)	1 (35)	SK3 直壁	1 (100)	1	1	21 (140)	
	2層	1 (35)	1 (35)	1 (5)	1 (35)	1 (35)	1 (5)	1 (35)						
SK3	堆積土	1 (35)	1 (35)	1 (5)	1 (35)	1 (35)	1 (5)	1 (35)						
	1層	93 (325)	2 (15)	1 (5)	1 (15)	1 (15)	1 (5)	99 (322)	SK4 直壁	50 (100)	1	1	200 (200)	
	2層	25 (25)	3 (15)	1 (5)	2 (15)	2 (15)	1 (5)	43 (130)	SK5 直壁	43 (100)	1	1	43 (100)	
SK4	1層	3 (15)	3 (15)	1 (5)	3 (15)	3 (15)	1 (5)	34 (130)	SK6 直壁	1 (100)	1	1	21 (140)	
	2層	7 (20)	7 (20)	1 (5)	7 (20)	7 (20)	1 (5)	12 (20)	SK7 直壁	12 (100)	3	4	1 (210)	
SK5	堆出層	4 (60)	4 (60)	1 (5)	4 (60)	4 (60)	1 (5)	46 (160)						
	底層	6 (60)	6 (60)	1 (5)	6 (60)	6 (60)	1 (5)	46 (160)						
SK6	1層	4 (25)	2 (20)	1 (5)	4 (25)	2 (20)	1 (5)	8 (25)	SK7 直壁	8 (55)	1	1	8 (55)	
	2層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	19 (20)						
SK7	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	35 (20)						
	1層	1 (15)	1 (15)	1 (5)	1 (15)	1 (15)	1 (5)	1 (15)						
SK8	堆積土	1 (15)	1 (15)	1 (5)	1 (15)	1 (15)	1 (5)	1 (15)						
	1層	6 (60)	6 (60)	1 (5)	6 (60)	6 (60)	1 (5)	6 (60)						
SK9	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK10	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK11	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK12	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK13	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK14	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK15	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK16	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK17	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK18	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK19	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK20	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK21	堆積土	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
	1層	2 (20)	2 (20)	1 (5)	2 (20)	2 (20)	1 (5)	46 (20)						
SK22	堆積土	2 (20)	2 (20)</											



第25図 谷原遺跡（1次調査）SD・SK・SX遺構配置図

### (1) 溝跡

### 【SD1 溝跡】(第 26~28 図)

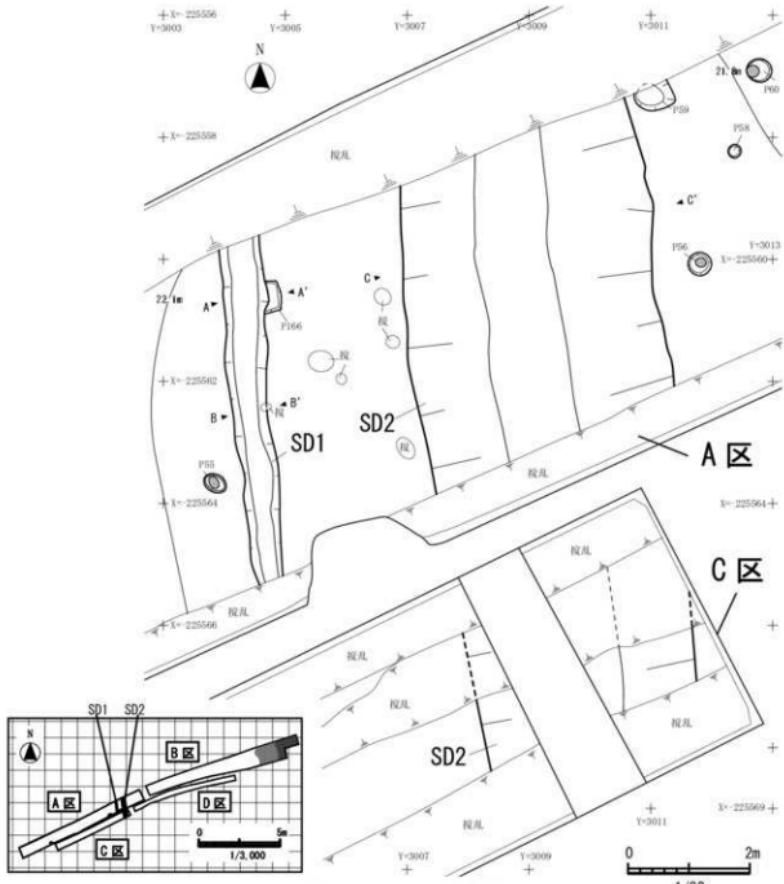
[位置] A区東部の標高 22.0~22.1m の平坦面で確認した。検出面はXb層である。

**[重複]** P166 と重複し、これより新しい (P166→SD1)。遺構の北端・南端は現代の擾乱により削平を受けており残存していない。

**[規模・形状]** 南-北方向に延びる溝で、構造北側は調査区外に延びるとみられる。検出長 5.6m、上幅 40~76cm、下幅 26~44cm、深さ 27cm、底面の標高は溝の南側が高く、北側が低い。溝の断面形は逆台形である。

[堆積土] 3層確認した。いずれも自然堆積層である。

**[出土遺物]** 堆積土1層からロクロ成形の土師器坏破片1点(5g)・高台付坏破片1点(5g)・甕破片1点(5g)、須恵器坏破片1点(5g)、堆積土2層からロクロ成形の土師器坏破片10点(15g)、須恵器坏破片1点(5g)、不明鉄製品1点(15g)が出土した。小破片のため、図示できたものはないが、出土したロクロ成形の土師器坏の大半は赤焼土器である。



第26図 SD1・2 溝跡 (1)

## 【SD2 溝跡】(第 26~29 図)

【位置】 A 区東部及び C 区東部の標高 21.8~22.0m の平坦面で確認した。検出面は Xb 層である。

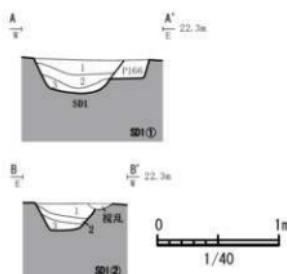
【重複】 なし。遺構の一部は現代の擾乱により削平を受けており残存していない。

【規模・形状】 南~北方向に延びる溝で、遺構南側及び北側は調査区外に延びるとみられる。検出長 9.6m、上幅 360~422cm、下幅 112~133cm、深さ 110cm、底面の標高は溝の南側が高く、北側が低い。溝の断面形は U 字形である。

【堆積土】 10 層確認した。このうち、1 層は地山ブロック等が多量に含まれる人為堆積層で、それ以下の 2~10 層は自然堆積層である。2~10 層堆積後に人為的に埋め戻された溝跡であると考えられる。

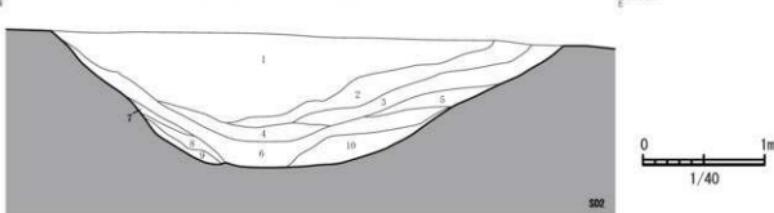
【出土遺物】 堆積土 1 層（人為堆積層）から非ロクロ成形の土師器壊破片 1 点 (10g)、ロクロ成形の土師器壊破片 28 点 (180g)・甕破片 9 点 (130g)、須恵器壊破片 1 点 (5g)・鉢破片 1 点 (130g)・甕片 3 点 (185g)、堆積土 3~4 層からロクロ成形の土師器壊破片 31 点 (120g)・甕破片 22 点 (165g)、須恵器壊破片 3 点 (25g)・蓋破片 1 点 (20g)・甕破片 1 点 (85g)、堆積土 6 層から繩文土器破片 1 点 (75g)、ロクロ成形の土師器壊破片 15 点 (115g)・高台付壺 1 点 (15g)・甕 38 点 (185g)、須恵器壊破片 1 点 (10g)・甕破片 8 点 (310g) が出土した。このうち、ロクロ成形の内黒処理が施された土師器壊底部破片 1 点（第 28 図 1）、非内黒処理の土師器壊（赤焼土器）底部破片 1 点（第 28 図 2）、須恵器壊底部破片 1 点（第 28 図 3）・蓋天井部破片 1 点（第 28 図 8）・鉢底部破片 1 点（第 28 図 4）・甕口縁部破片 1 点（第 28 図 9）・甕体部破片 5 点（第 28 図 5~7・10）を図示した。

【SD1 溝跡 土層断面図 A-A' ~ B-B'】

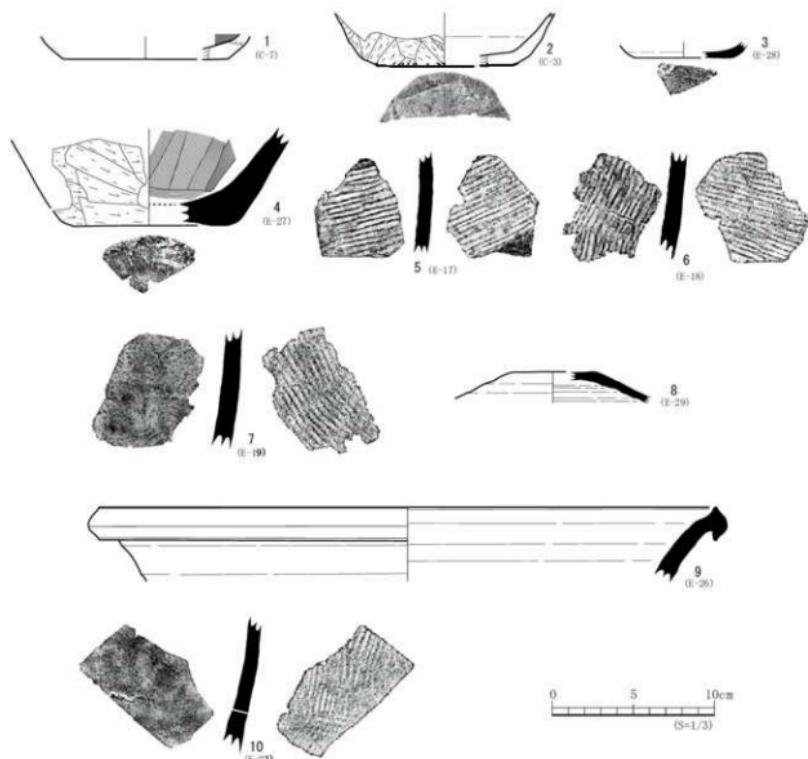


層	土色	土性	備考
SD1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒子・炭化物片・燒土粒子含む。
	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック含む。
	にら・暗褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロック多く含む。
SD2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山ブロック・黒褐色ブロック多く含む。燒土粒子・小礫含む。人為堆積。
	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック含む。
	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	小礫少量化。
	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック・地山粒子少量化。
	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒子多く含む。
	褐灰色 (10YR4/1)	粘土質	炭化物片・燒土ブロック・小礫含む。
	暗褐色 (10YR4/2)	シルト	一部グライ化（水性堆積層）。
	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック多く含む。
	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	炭化物質・小礫含む。
	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	地山粒子多く含む。

【SD2 溝跡 土層断面図 C-C'】



第27図 SD1・2 溝跡 (2)



SD2 出土遺物

No.	編	種別	器種	所 在	特徴【技法(外面・内面)・色調(外面・内面)・出量→その他の特徴の順に記載】	世紀
1	SD2 3・4層	土師器	环	脚部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し無調整・崩壊、内面：ヘラヒガリ・黑色処理、色調：外面・にじみ・褐色(7.5YR5/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)・黒褐色(10R3/1)、法量：底径(10.2)cm・残存高1.4cm・器厚0.6~1.0cm	E-7
2	SD2 6層	土師器	环	脚部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整、内面：ロクロナデ、色調：外面・にじみ・褐色(7.5YR5/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：底径(9.0)cm・残存高3.3cm・器厚0.3~0.7cm、本體上部	E-3
3	SD2 1層	瓦類器	环	底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整、内面：ロクロナデ、色調：外面・灰黄褐色(10YR6/2)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：底径(6.0)cm・残存高1.0cm・器厚0.3~0.5cm	E-28
4	SD2 1層	瓦類器	錘	脚部 ～底部	外面：ヘラ削り、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/1)、内面・灰色(5YR4/1)、法量：底径(9.6)cm・残存高6.1cm・器厚1.0~2.2cm	E-27
5	SD2 1層	瓦類器	便	脚部	外面：平行タタキ、内面：当て其底、色調：外面・褐色(10YR4/1)、内面・灰色(10Y4/1)、法量：器厚0.7~0.8cm	E-17
6	SD2 1層	瓦類器	便	脚部	外面：平行タタキ、内面：当て其底、色調：外面・灰褐色(5YR4/1)、内面・褐色(10Y4/1)、法量：器厚0.9~1.0cm	E-18
7	SD2 1層	瓦類器	便	脚部	外面：平行タタキ、内面：ナデ、色調：内外面・黄褐色(2.5YR4/1)、法量：器厚1.0~1.2cm	E-19
8	SD2 3・4層	瓦類器	蓋？	天井部 ～側部	外面：ロクロナデ・天井部外調整(技法不明)・自然縫、内面：ロクロナデ、色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)、内面・褐色(5YR4/0)、法量：天井径(5.4)cm・残存高1.9cm・器厚0.4~0.6cm	E-29
9	SD2 4層	瓦類器	口縁部		外内面：ロクロナデ、色調：外面・灰色(5YR4/0)、内面・灰色(5YR5/0)、法量：口径(38.0)cm・残存高4.6cm・器厚0.8~1.1cm	E-26
10	SD2 6層	瓦類器	便	脚部	外面：平行タタキ・自然縫、内面：当て其→ナデ、色調：外面・灰色(5YR4/0)、内面・褐色(10YR5/1)、法量：器厚0.9~1.1cm	E-23

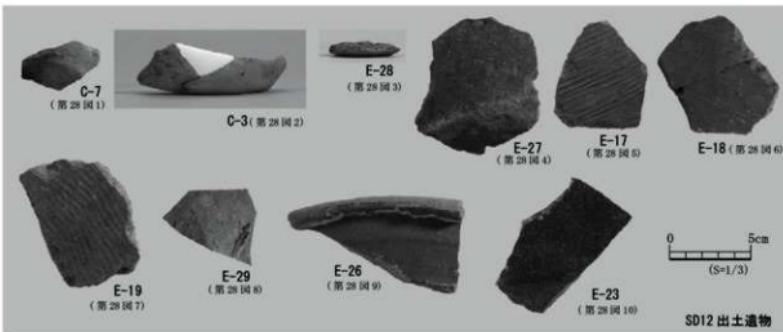
第28図 SD2 出土遺物



SD1・2溝跡 完掘状況(北から)/SD1:右・SD2:左



SD2溝跡 土層断面(南から)



SD1・2 溝跡 (3)

## 【SD3 溝跡】(第30図)

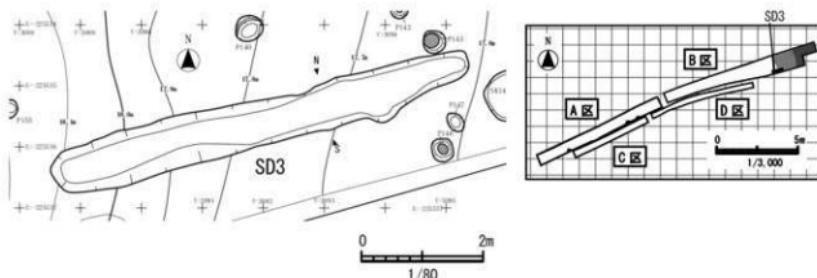
【位置】B区東部の標高 17.6~18.1m の平坦面で確認した。検出面はXb層である。

【重複】なし。

【規模・形状】東-西方向に延びる溝で、検出長 7.10m、上幅 67~90cm、下幅 48~50cm、深さ 18cm、底面の標高は溝の西側が高く、東側が低い。溝の断面形は逆台形である。

【堆積土】3層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】堆積土1層から繩文土器破片7点(80g)、石器剥片1点(4.8g)、ロクロ成形の土師器壺破片10点(50g)、須恵器壺破片6点(25g)・甕破片14点(230g)・壺破片5点(150g)が出土した。いずれも小破片のため、図示できたものはない。



層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物片・燒土粒子含む。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック多く含む。
3	灰黃褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒子多く含む。



SD3 溝跡 断面(東から)



SD3 溝跡 検出状況(東から)

第30図 SD3 溝跡

## (2) 土坑

### 【SK1 土坑】(第31・41図)

【位置】 A区西部の標高23.3mの平坦面で確認した。検出面はXb層である。

【重複】なし。遺構の南半は現代の擾乱により削平を受けており残存していない。

【規模・形状】 120cm×52cm以上の楕円形を呈するとみられる。深さ27cm。底面は平坦で、土坑北西部がさらに窪む。断面形は逆台形である。

【堆積土】 4層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土からロクロ成形の土師器壊破片9点(35g)・甕破片18点(90g)が出土した。小破片のため、図示できたものはない。

### 【SK2 土坑】(第31・41図)

【位置】 A区中央部の標高22.4mの平坦面で確認した。検出面はXb層である。

【重複】なし。遺構の北半は現代の擾乱により削平を受けており残存していない。

【規模・形状】 長軸134cm以上×短軸122cmの不整形を呈するとみられる。深さ15cm。底面は平坦で、短軸方向の断面形は皿状である。

【堆積土】 1層確認した。自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土1層からロクロ成形の土師器壊破片3点(5g)・甕破片3点(15g)、須恵器壊破片1点(5g)が出土した。小破片のため図示できたものはない。

### 【SK3 土坑】(第31・41図)

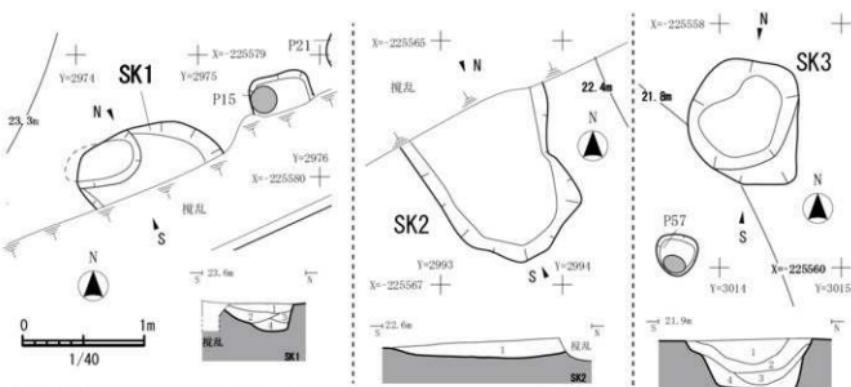
【位置】 A区東部の標高21.8mの平坦面で確認した。検出面はXb層である。

【重複】なし。

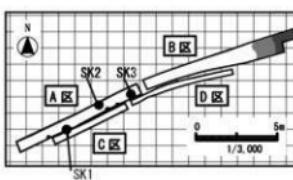
【規模・形状】 100cm×90cmの不整形。深さ41cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。

【堆積土】 4層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土からロクロ成形の土師器壊破片3点(10g)・甕破片5点(15g)が出土した。小破片のため、図示できたものはない。



遺構	層	土色	土性	備考
SK1	1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物片、焼土ブロック多く含む。
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物片微少、焼土ブロック少含む。
	3	黒褐色(10YH2/3)	シルト	地山粒子微量含む。
	4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物粒子、焼土粒子含む。
SK2	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック、炭化物片、焼土粒子含む。
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック、炭化物片、小礫含む。
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック、焼土粒子、小礫含む。
	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒子、焼土粒子少含む。
SK3	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック多く含む。
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック、炭化物片、小礫含む。
	3	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック、焼土粒子、小礫含む。
	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒子、焼土粒子少含む。



第31図 SK1~3 土坑

## 【SK4 土坑】(第32・40・41図)

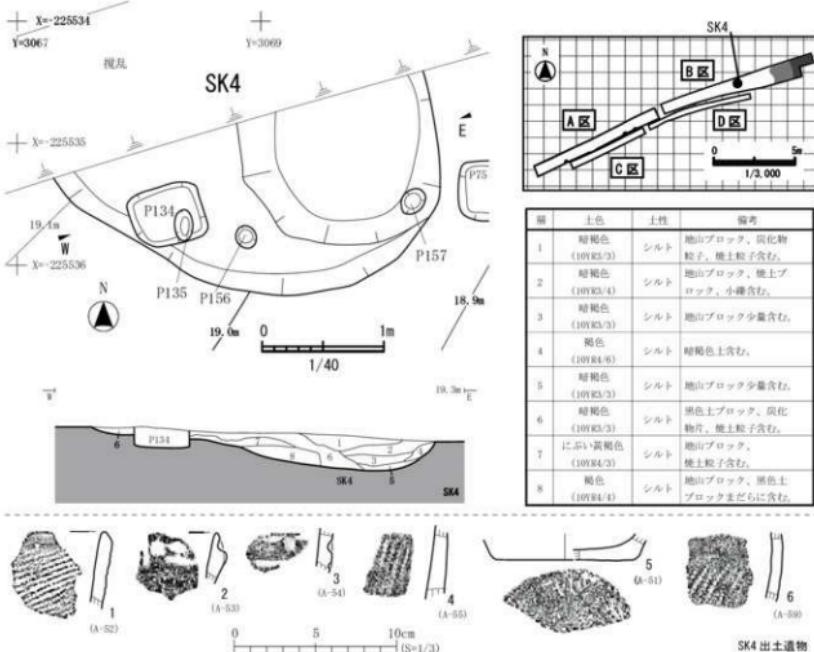
【位置】B区中央部の標高18.9~19.1mの平坦面で確認した。検出面はXb層である。

【重複】P134・135・156・157と重複し、これらより古Ⅵ(SKA→P134・135・156・157)。遺構の北半は現在の擾乱により削平を受けており残存していない。

【規模・形状】長軸313cm×短軸152cm以上の楕円形を呈するとみられる。深さ27cm。底面は平坦で、遺構東側が深い。断面形は皿状である。

【堆積土】8層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】検出面から縄文土器深鉢破片7点(65g)、堆積土1層から縄文土器深鉢破片53点(325g)・石器剥片3点(7.7g)・クロコ成形の土器師甕破片2点(15g)・須恵器坏破片1点(5g)、堆積土6層から縄文土器深鉢破片3点(25g)、7層から縄文土器深鉢破片3点(15g)、8層から縄文土器深鉢破片1点(20g)、底面から縄文土器深鉢破片4点(60g)出土した。このうち、縄文土器深鉢口縁部破片2点(第32図1・2)、体部破片3点(第32図3・4・6)、底部破片1点(第32図5)を図示した。



No.	層	種別	性質	地 存	特徴【技術(外側・内側)→色調(外側・内側)→法量→その他の特徴の順に記載】	分類
1	SK4 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外側：縄文(Ⅹ)、内側：ナデ。色調：内外面・褐色(7.5YR4/2)、法量：厚さ0.7~0.8cm	A-52
2	SK4 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外側：陰帯・沈縄文・管孔・縫隙。内側：縫隙のため不明。色調：外側・にじみ・赤褐色(5YR4/3)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：厚さ0.4~1.0cm	A-53
3	SK4 1層	縄文土器	深鉢	縫隙	外側：沈縄文・乳孔・縫隙。内側：縫隙のため不明。色調：外側・にじみ・赤褐色(5YR4/3)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：厚さ0.55~0.9cm	A-54
4	SK4 1層	縄文土器	深鉢	制部	外側：縄文(Ⅹ)・縫隙、内側：縫隙のため不明。色調：外側・にじみ・褐色(7.5YR5/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：厚さ0.7~1.0cm	A-55
5	SK4 1層	縄文土器	深鉢	底部	外側面・縫隙のため不明。色調：外側・黒褐色(7.5YR3/2)・褐色(7.5YR4/3)、内面・にじみ・赤褐色(5YR4/4)、法量：底径8.6cm・残存高1.6cm・厚さ0.1~1.2cm	A-56
6	SK4 8層	縄文土器	深鉢	制部	外側：縄文(Ⅹ)、内側：ナデ。色調：外側・にじみ・赤褐色(5YR4/3)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：厚さ0.6~0.7cm	A-59

第32図 SK4 土坑

## 【SK5 土坑】(第33・41図)

【位置】B区中央部の標高18.8mの平坦面で確認した。検出面はXb層である。

【重複】なし。構造の北半は現在の擾乱により削平を受けており残存していない。

【規模・形状】76cm×52cm以上の楕円形を呈するとみられる。深さ17cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。

【堆積土】2層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】堆積土1層から縄文土器深鉢破片47点(500g)、ロクロ成形の土師器壊破片6点(25g)・甕破片6点(30g)、須恵器壊破片1点(10g)・蓋破片1点(5g)、堆積土2層から縄文土器深鉢破片4点(25g)、底面から須恵器蓋破片1点(5g)出土した。小破片のため、図示できたものはない。

## 【SK6 土坑】(第33・41図)

【位置】B区中央部の標高18.6mの平坦面で確認した。検出面はXb層である。

【重複】なし。構造の北半は現在の擾乱により削平を受けており残存していない。

【規模・形状】102cm×70cm以上の楕円形を呈るとみられる。深さ22cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。

【堆積土】4層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】堆積土2層から縄文土器深鉢破片6点(50g)・須恵器甕破片1点(15g)、堆積土3層から縄文土器深鉢破片1点(15g)、堆積土4層から縄文土器深鉢破片2点(30g)が出土した。小破片のため、図示できたものはない。

## 【SK7 土坑】(第33・41図)

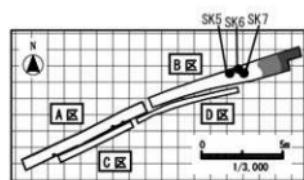
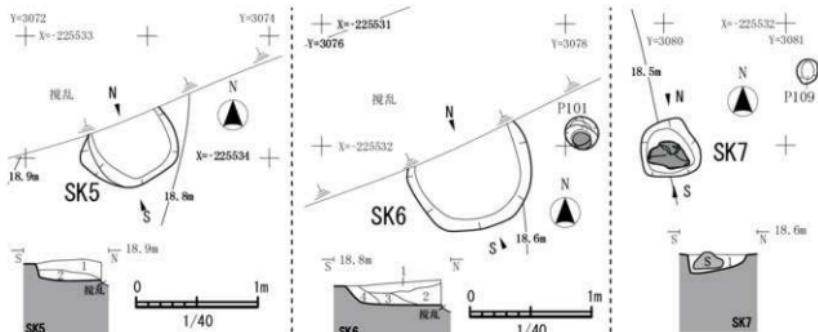
【位置】B区中央部の標高18.5mの平坦面で確認した。検出面はXb層である。

【重複】なし。

【規模・形状】48cm×47cmの不整形。深さ15cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。

【堆積土】1層確認した。堆積土は人為堆積層で、底面付近には礫が据えられていた。掘立柱建物跡の柱穴の可能性も考えられたが、柱穴と断定できる根拠に乏しいことから、土坑として取り扱った。

【出土遺物】堆積土1層から縄文土器深鉢破片1点(5g)が出土した。小破片のため、図示できたものはない。



遺構	層	土色	土性	備考
SK5	1	暗褐色(10YR5/4)	シルト	地山粘子、埴土ブロック含む。
	2	暗褐色(10YR5/3)	シルト	地山粘土(10YR3/2)含む。
SK6	1	暗褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック、埴土粒子含む。
	2	暗褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック、埴土粒子含む。
	3	暗褐色(10YR5/4)	シルト	地山粘土(10YR3/2)ブロック含む。
	4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロック多く含む。
SK7	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山粘土(10YR3/2)ブロックまだらに含む。

第33図 SK5~7 土坑

## 【SK8 土坑】(第34・40・41図)

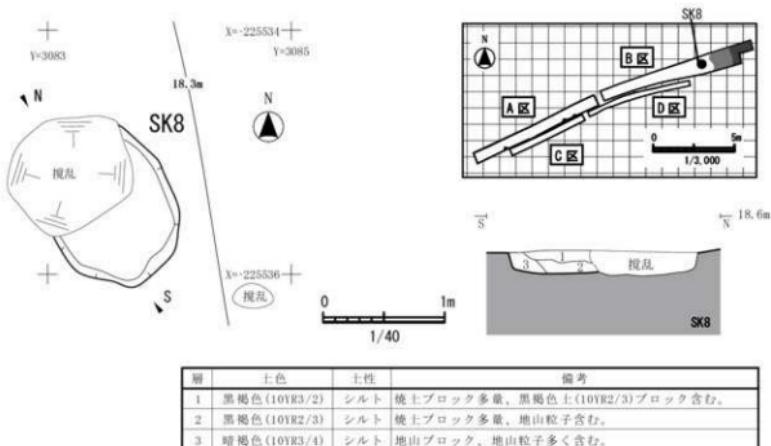
【位置】B区中央部の標高18.3mの平坦面で確認した。検出面はXb層である。

【重複】なし。遺構の北西部は現在の擾乱により削平を受けており残存していない。

【規模・形状】104cm×65cm以上の楕円形を呈するとみられる。深さ18cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。

【堆積土】3層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】堆積土1層から縄文土器深鉢破片50点(580g)、堆積土2・3層から縄文土器深鉢破片43点(310g)出土した。このうち、縄文土器深鉢口縁部破片2点(第34図1・2)、体部破片2点(第34図3・4)を図示した。



SK8 出土遺物

No.	層	種別	器種	残存	特徴【注記(外側・内面)→色調(外側・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK8 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：沈縄文・磨滅、内面：磨滅のため不明。色調：外面・にぶい褐色(5YR4/4)・褐色(7.5YR4/3)。内面・にぶい黄褐色(10YR4/3)。法量：厚さ0.7~1.0cm	A-61
2	SK8 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：擦痕・沈縄文・質孔、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR2/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)。法量：厚さ0.7~1.0cm	A-62
3	SK8 1層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：調文L・磨滅、内面：磨滅のため不明。色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)。内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)。法量：厚さ0.9~1.2cm	A-63
4	SK8 堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	外面：調文L・沈縄文・質孔、内面：ナゲ、色調：外面・暗褐色(5YR3/2)、内面・暗褐色(2.5YR3/2)。法量：厚さ0.6~1.0cm	A-6

第34図 SK8 土坑

### 【SK9 土坑】(第 35・40・42 図)

【位置】 B 区東部の標高 18.0m の平坦面で確認した。検出面は Xb 層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 120cm×117cm の楕円形。深さ 26cm。底面は平坦で、断面形は U 字形である。

【堆積土】 3 層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土 1 層から縄文土器深鉢破片 10 点 (95g)、ロクロ成形の土師器壊破片 1 点 (105g)、堆積土 3 層から縄文土器深鉢破片 14 点 (75g)、ロクロ成形の土師器壊破片 1 点 (10g)・土師器壊破片 5 点 (35g)、須恵器壊破片 1 点 (20g) が出土した。このうち、土師器壊底部破片 1 点 (第 35 図 1)、土師器壊 (赤焼土器) 底部破片 1 点 (第 35 図 2) を図示した。

### 【SK10 土坑】(第 35・42 図)

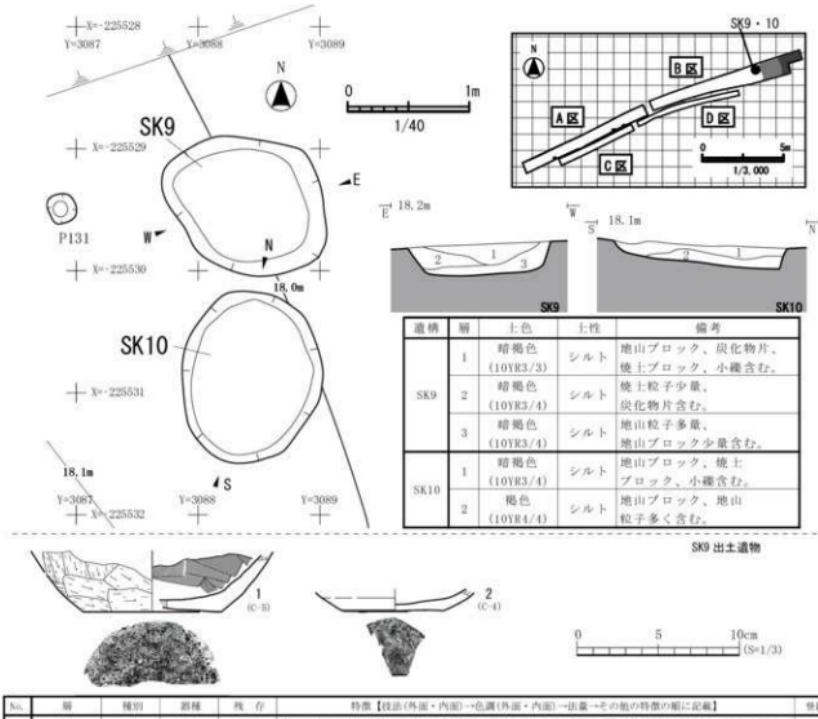
【位置】 B 区東部の標高 18.0m の平坦面で確認した。検出面は Xb 層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 140cm×116cm の楕円形。深さ 18cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 2 層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土から縄文土器深鉢破片 34 点 (330g)、ロクロ成形の土師器壊破片 3 点 (15g)・壊破片 17 点 (155g) が出土した。小破片のため、図示できたものはない。



No.	層	種別	器種	現存	特徴【技術(外面・内面)→色調(外面・内面)→寸法】その他の特徴の欄に記載】	備考
1	SK9 1層	土師器	壊	胸部 外面: B4 色→ヘラ削り、底部手打ち→フリエリ、内面: ヘナナ、色調: 外面・褐色 (7.5YR4/3)、底径: 低径 (0.40)cm、残存高 3.8cm、底厚 0.5cm~0.9cm		C-5
2	SK9 3層	土師器	壊	胸部 外面: ロクロナダ、底部削り→無調整、内面: ロクロナダ、色調: 外面・褐色 (7.5YR6/6)、内面・にがい、底径 (6.0)cm、残存高 1.4cm、底厚 0.4cm~0.7cm、赤燒土器		C-4

第35図 SK9・10 土坑

## 【SK11 土坑】(第36・42図)

【位置】 B区東部の標高17.9mの平坦面で確認した。検出面はXb層である。

【重複】 なし。

【規模・形状】 70cm×62cmの不整形。深さ10cm。底面は平坦で、断面形は不整形である。

【堆積土】 3層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

## 【SK12 土坑】(第36・40・42図)

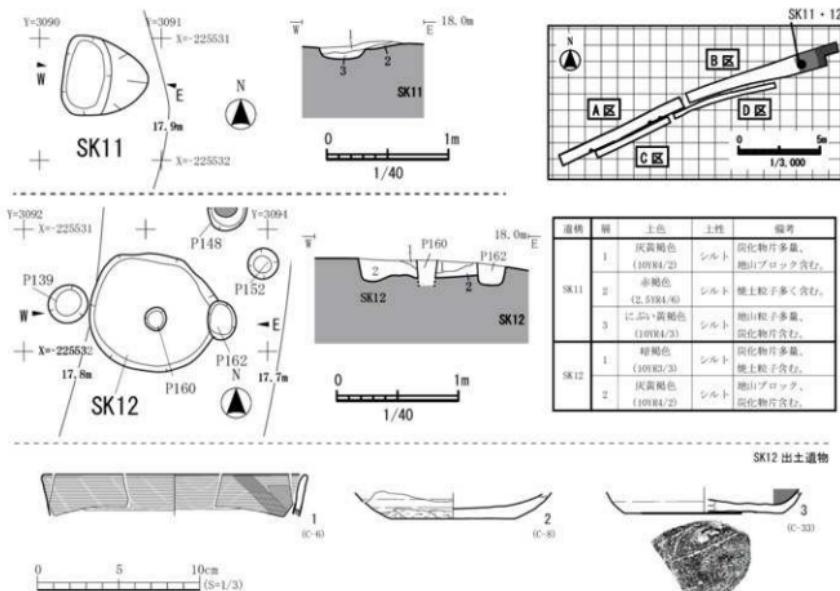
【位置】 B区東部の標高17.7~17.8mの平坦面で確認した。V層中で検出した。

【重複】 P160・162と重複し、これらより古い(SK12→P160・162)。

【規模・形状】 106cm×100cmの円形。深さ18cm。底面は平坦で、断面形は不整形である。

【堆積土】 2層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土1層から繩文土器深鉢破片12点(80g)、非クロロ成形の土師器壊破片1点(10g)、ロクロロ成形の土師器壊破片2点(80g)、甕破片4点(30g)、須恵器壊破片1点(10g)、堆積土2層から繩文土器深鉢破片10点(100g)、非クロロ成形の土師器甕破片3点(5g)、須恵器壊破片1点(10g)が出土した。このうち、非クロロ成形の土師器壊口縁部破片1点(第36図1)、ロクロロ成形の土師器壊(赤焼土器)底部破片1点(第36図2)、ロクロロ成形の内墨処理が施された土師器壊1点(第36図3)を図示した。



No.	層	種別	源種	残存	特徴(外側・内面)→色調(外側・内面)→法量→その他の特徴(欄に記載)	登錄
1	SK12 1層	土師器	壊	口縁部	外側: ロコナデ、内面: ナラ。色調: 外面、灰褐色(7.5B8/2)、内面、黒褐色(10B3/2)、法量: 直径(16.4cm)・残存高(2.9cm)・厚さ(0.3~0.4cm)	C-6
2	SK12 1層	土師器	壊	胴部 ~底部	外側: ロクロナデ・胴部下端手跡+ヘラ削り。底部切り離し技術不明→手持ち+ヘラ削り再調整、内面: ロクロナデ・崩壊。色調: 外面(にぶる)褐色(7.5B8/4)・(にぶる)真褐色(10B7/4)、内面、灰褐色(2.5B6/2)、法量: 底径(7.4cm)・残存高(1.6cm)・厚さ(0.4~0.6cm)、赤焼土器	C-8
3	SK12 1層	土師器	壊	胴部 ~底部	外側: ロクロナデ・崩壊、底部切り離し技術不明→手持ち+ヘラ削り再調整。内面: 崩壊、ナラ+ナラに黒色処理の痕跡残る。色調: 外面、黄褐色(2.5B6/1)、内面、灰褐色(2.5B6/2)、法量: 直径(9.8cm)・残存高(1.6cm)・厚さ(0.3~0.7cm)	C-33

第36図 SK11・12 土坑

## 【SK13 土坑】(第37・40・42図)

【位置】B区東部の標高17.5mの平坦面で確認した。基本層V層除去後のXa層で検出した。

【重複】なし。

【規模・形状】70cm×60cmの円形。深さ8cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】1層確認した。自然堆積層である。

【出土遺物】堆積土1層下層の底面付近から縄文土器深鉢破片2点(125g)が出土した。このうち、縄文土器深鉢口縁部破片1点(第37図1)を図示した。

## 【SK14 土坑】(第37・40・42図)

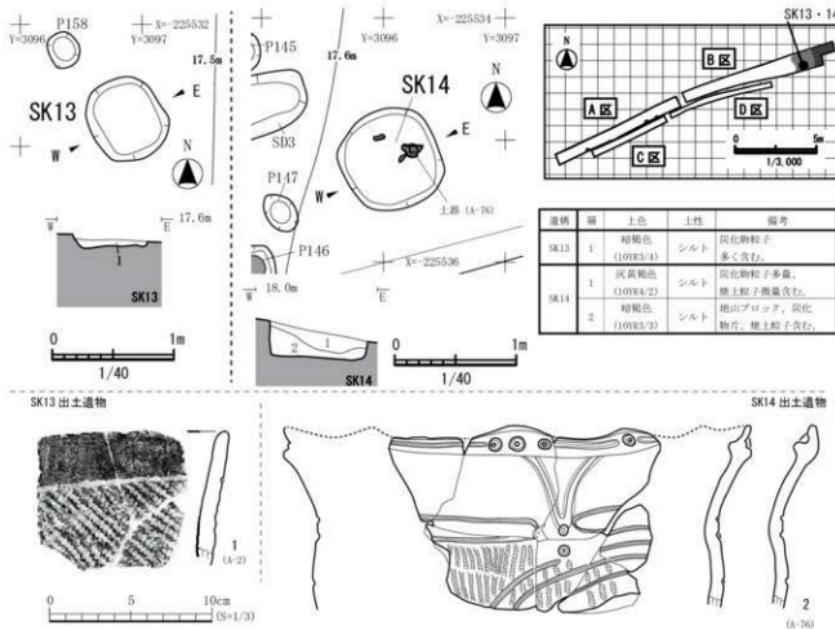
【位置】B区東部の標高17.6mの平坦面で確認した。基本層V層除去後のXa層で検出した。

【重複】なし。

【規模・形状】83cm×79cmの円形。深さ30cm。底面は平坦で、断面形はU字形である。

【堆積土】2層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】堆積土1層から縄文土器深鉢破片16点(170g)、堆積土2層下層の底面付近から縄文土器深鉢破片15点(335g)が出土した。このうち、縄文土器深鉢口縁部～胴部破片1点(第37図2)を図示した。



No.	層	種別	器種	現存	特徴【往復(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	参考
1	SK13 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外側：縄文LR・沈殿灰。内側：ナデ。色調：外面・灰褐色(5YR4/2)・黒褐色(7.5YR2/1)。内面・褐色(7.5YR4/2)。法量：器厚0.9~1.1cm	A-2
2	SK14 2層下層	縄文土器	深鉢	口縁部 ～胴部	外側：縄文LR・沈殿灰・質孔。内側：ナデ・質孔。色調：外面・暗赤褐色(5YR3/2)・黒褐色(7.5YR2/2)。内面・灰褐色(5YR4/2)。法量：口径(28.6)cm・残存高11.3cm・器厚0.25~1.1cm	A-76

第37図 SK13・14 土坑

## 【SK15 土坑】(第38・40・42図)

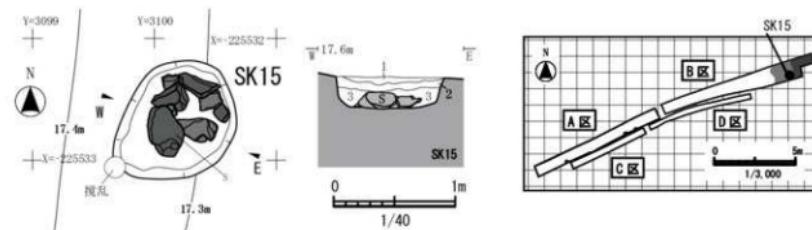
【位置】B区東部の標高17.3mの平坦面で確認した。基本層V層除去後のXa層で検出した。

【重複】なし。遺構南西部の一部が後世の擾乱により削平を受けている。

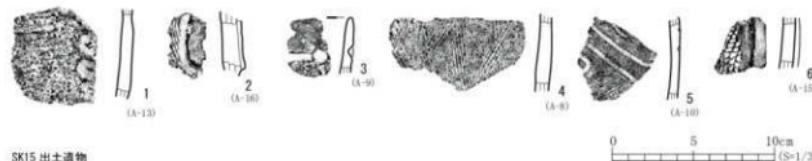
【規模・形状】99cm×95cmの楕円形。深さ27cm。底面は平坦で、断面形はU字形である。

【堆積土】3層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】堆積土1~3層から縄文土器深鉢破片71点(700g)が出土した。このうち、縄文土器深鉢口縁部破片1点(第38図3)、体部破片5点(第39図1・2・4~6)を図示した。この他、遺構の底面では縄文土器が集積された形で出土しており、中には被熱を受けている跡も確認されている。



層	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物片、焼土ブロック含む。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック、炭化物粒子、焼土粒子含む。
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物片、焼土ブロック多く含む。



SK15 出土遺物

No.	層	種別	断面	堆積	堆積	特徴【技術(外側・内面)・色調(外側・内面)・法量】その他の特徴の欄に記載】	写真
1	SK15 2層	縄文土器	深鉢	脚部	外表面：縄文文(シザギク文)、表面、内面：磨滅のため不明。色調：外表面・褐色(7.5YR4/3)、内面・にぶい・黄褐色(10YR5/3)、法量：厚さ0.6~0.7cm	A-13	
2	SK15 2層	縄文土器	深鉢	脚部	外表面：既崩・縄文文、内面：磨滅のため不明。色調：外表面・暗赤褐色(5YR3/3)、内面・灰褐色(5YR4/2)、法量：厚さ0.9~1.3cm	A-16	
3	SK15 堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	外表面：縄文文、内面：乳孔、内面：ナデ、色調：外表面・黒褐色(10YR3/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：厚さ0.3~0.6cm	A-9	
4	SK15 堆積土	縄文土器	深鉢	脚部	外表面：擦痕状文、内面：ナデ、色調：外表面・黒褐色(10YR3/2)、内面・變色(7.5YR4/3)、法量：厚さ0.7~0.8cm	A-8	
5	SK15 堆積土	縄文土器	深鉢	脚部	外表面：沈縄文・縄文文?、内面：磨滅のため不明。色調：外表面・暗赤褐色(5YR3/3)、内面・にぶい・赤褐色(5YR4/2)、法量：厚さ0.5~0.6cm	A-10	
6	SK15 堆積土	縄文土器	深鉢	脚部	外表面：擦痕・縄文文、内面：磨滅のため不明。色調：外表面・にぶい・赤褐色(5YR4/3)、法量：厚さ0.9~1.1cm	A-15	

第38図 SK15 土坑

## 【SK16 土坑】(第39・40・42図)

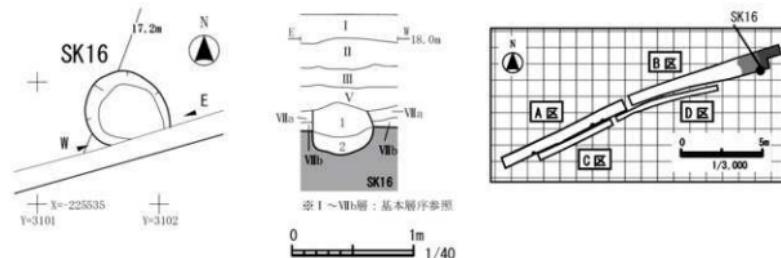
【位置】B区東部の標高17.2mの平坦面で確認した。基本層V層除去後のVIIa層上面で検出した。

【重複】なし。遺構の南半は調査区外に延びる。

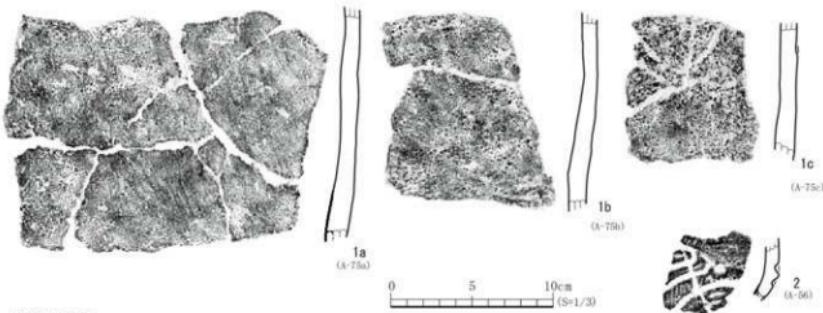
【規模・形状】65cm×56cm以上の円形を呈するとみられる。深さ44cm。底面は平坦で、断面形はU字形である。

【堆積土】2層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】堆積土1・2層から縄文土器深鉢破片45点(1,420g)が出土した。このうち、縄文土器深鉢体部破片4点(第39図1a~e・2)を図示した。



層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック、炭化物片、焼土粒子含む。
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック含む。

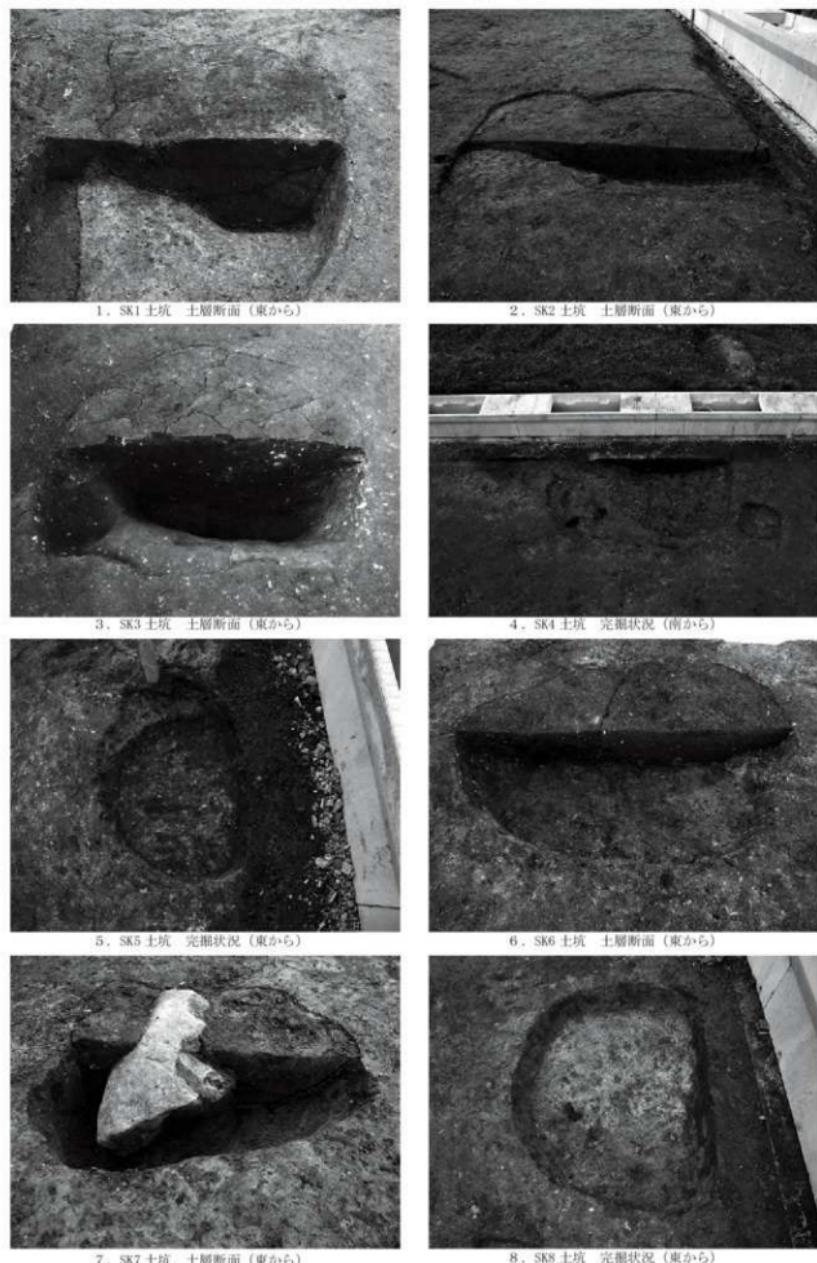


No.	層	種別	部位	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	量級
1a ~ 1c	SK16 2層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：ミギタ、内面：ナデ、色調：外面・暗赤褐色(8YR3/3)、内面・暗赤褐色(2, 8YR3/3)、法量：厚0.9~1.3cm	A-75a ~75c
2	SK16 2層上面	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR、沈綱文、唇乳、内面：ナデ、色調：外面・灰黃褐色(10YR4/2)、内面・灰褐色(5YR4/2)、法量：厚0.65~0.9cm	A-56

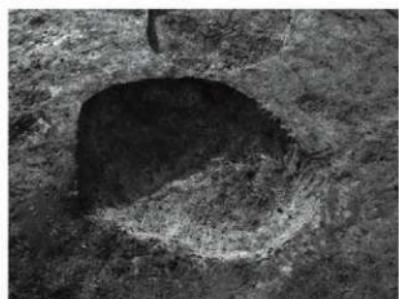
第39図 SK16 土坑



第40図 SK4・8・9・12~16 土坑出土遺物（写真図版）



第41図 SK1～8土坑（写真図版）



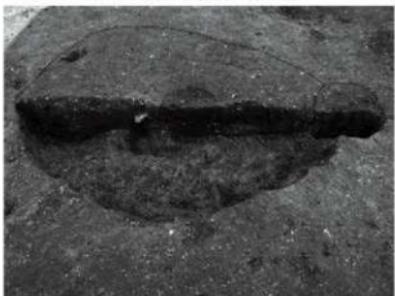
1. SK9 土坑 完掘状況（北から）



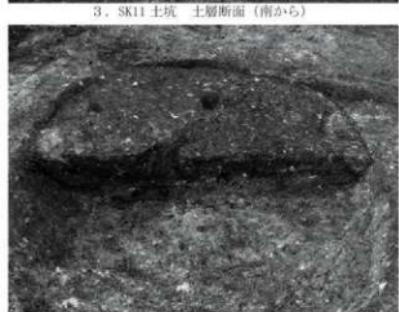
2. SK10 土坑 土層断面（東から）



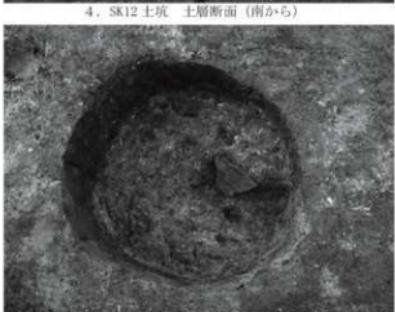
3. SK11 土坑 土層断面（南から）



4. SK12 土坑 土層断面（南から）



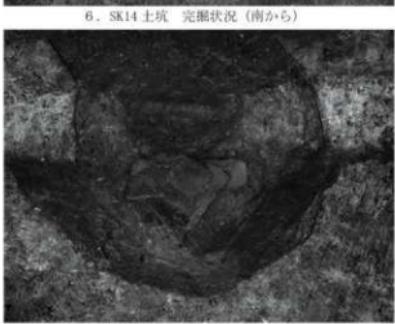
5. SK13 土坑 土層断面（南から）



6. SK14 土坑 完掘状況（南から）



7. SK15 土坑 完掘状況（南から）



8. SK16 土坑 遺物出土状況（北から）

### (3) 焼成遺構

#### 【SX1 焼成遺構】(第43図)

【位置】 B区東部の標高 18.3~18.4m の平坦面で確認した。検出面はXb層である。

【重複】 P122と重複し、これより古い(SX1→P122)。

【規模・形状】 挖方のある焼成遺構で、掘方の規模は長軸 38cm × 短軸 36cm、深さ 10cm である。掘方の平面形は円形、断面形は皿状である。焼け面の範囲は 28×24cm・被熱は深さ 6cm 下まで及んでいた。

【堆積土】 2層確認した。1層が掘方埋土の焼け面被熱範囲、2層が掘方埋土(人為堆積層)である。

【出土遺物】 挖方埋土から縄文土器破片 20点(110g)、石器剥片 1点(16g)が出土した。このうち、縄文土器深鉢口縁部破片 1点(第43図1)を図示した。

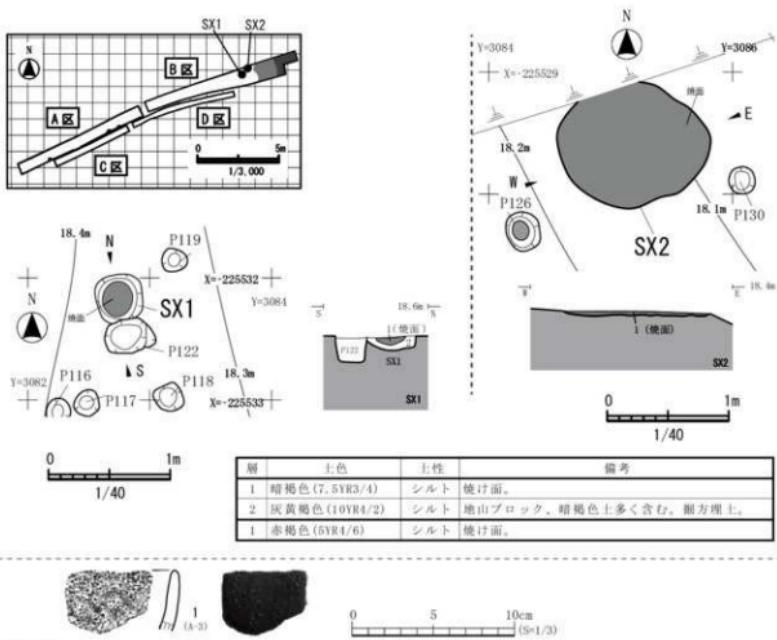
#### 【SX2 焼成遺構】(第43図)

【位置】 B区東部の標高 18.1m の平坦面で確認した。検出面はXb層である。

【重複】 なし。遺構の北端部分は現在の擾乱により削平を受けており残存していない。

【規模・形状】 焼け面の範囲は長軸 120cm × 短軸 96cm 以上の楕円形を呈する。掘方は認められなかった。被熱は深さ 4cm 下まで及んでいた。

【出土遺物】 焼け面上から縄文土器破片 10点(50g)、ロクロ成形の土師器坏破片 2点(10g)が出土した。小破片のため、図示できたものはない。



第43図 SX1・2 焼成遺構

## 【SX3 焼成遺構】(第44~46図)

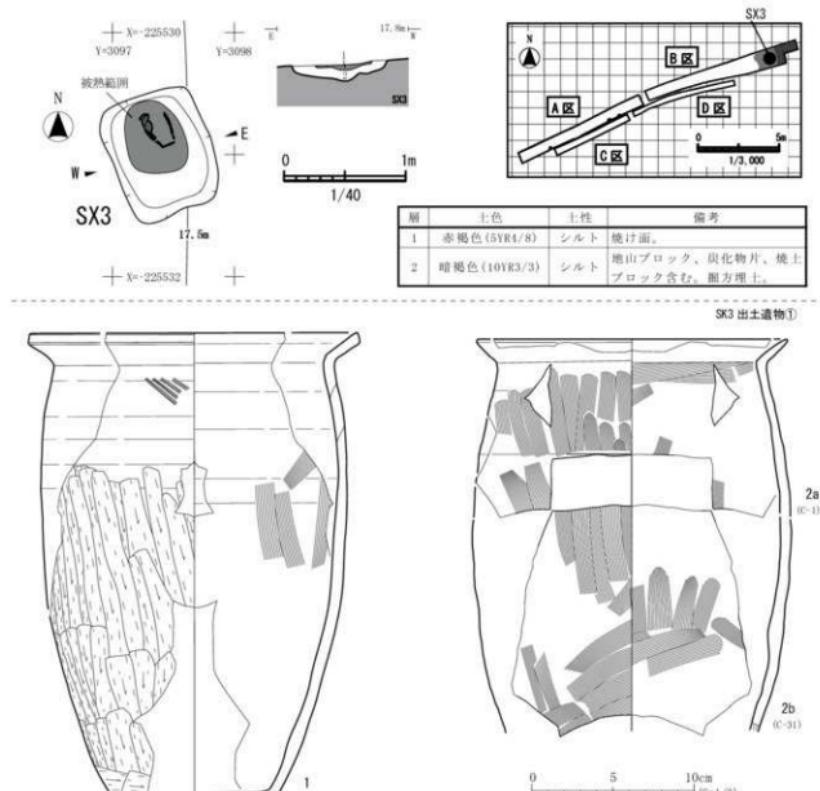
【位置】B区東部の標高17.5mの平坦面で確認した。検出面はV層上面である。

【重複】なし。

【規模・形状】掘方のある焼成遺構で、掘方の規模は長軸102cm×短軸81cm、深さ13cmである。掘方の平面形は隅丸長方形、断面形は不整形である。焼け面の範囲は62×50cm・被熱は深さ4cm下まで及んでいた。掘方埋土内からは土師器甕が横位に据えられた状態で出土しており、甕を据えた後、焼成行為が行われたと考えられる。

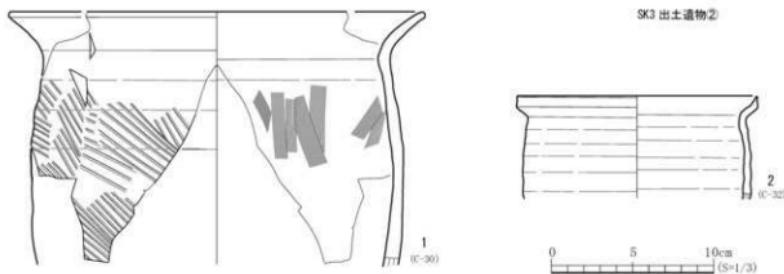
【堆積土】2層確認した。1層が掘方埋土の焼け面被熱範囲、2層が掘方埋土(人為堆積層)である。

【出土遺物】掘方埋土から縄文土器破片1点(10g)、ロクロ成形の土師器坏破片3点(25g)・甕破片73点(2,160g)、須恵器坏破片1点(5g)が出土した。このうち、ロクロ成形の土師器甕4点(第44図1・2a・2b、第45図1・2)を図示した。

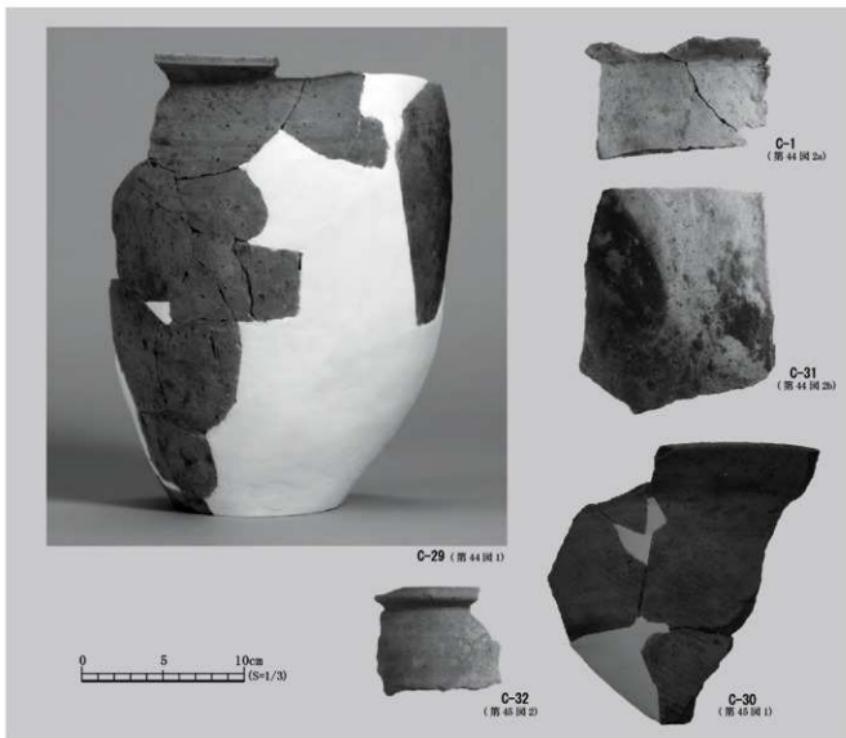


No.	層	種別	断面	残存	特徴【技法(外表面・内面)→色調(外表面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SX3 掘方埋土	土師器	甕	口縁部～底部	外面：口縁部～底部上位ロクロナデ・側面下位タチキサ・側面中下位ハク削り・直縁手持ちハク削り・内面：ロクロナデ・ナデ。色調：外面にぶい・燈色(7.5YR6/4)。内面・灰褐色(7.5YR4/2)。法量：口径(20.2cm)・高さ29.2cm・底径9.4cm・源厚0.6~1.0cm	C-29
2a	SX3 掘方埋土	土師器	甕	口縁部～底部	外面：ロクロナデ・側面上～中位ナデ・側面下位ハク削り・内面：ロクロナデ・ナデ。色調：外面にぶい・黄褐色(10YR5/3)・黒褐色(2.5Y3/1)、内面・灰黄褐色(10YR4/2)にぶい・黄褐色(10YR5/3)。法量：口径(19.0cm)・残存高24.2cm・源厚0.6~1.0cm	C-1
2b						C-31

第44図 SX3 焼成遺構 (1)



第45図 SX3 焼成遺構 (2)



第46図 SX3 焼成遺構 (3)

### 3. 遺物包含層（基本層出土遺物）

調査区東側の地形的に低い地点（B区東端部）の標高16.6～17.9m付近に堆積している基本層III層・V層・VII層に遺物が比較的多く含まれていたことから、この分布範囲を遺物包含層と認識し調査を行った（第5図、基本層の詳細は第III章第3節を参照）。調査にあたっては、遺物包含層と認識された範囲にサブトレンチを設定し、土層断面で包含層の基本層序を確認した後、各層ごとに掘削を行い、遺物の取り上げを行った。

基本層III層では繩文土器・土師器（ロクロ成形）・須恵器・中世陶器・石器・鉄滓、基本層V層では繩文土器・土師器（非ロクロ成形・ロクロ成形）・須恵器・石器、基本層VII層では繩文土器・石器が出土した（第10表）。出土した遺物は、ほとんどが破片資料で、その出土状況から、遺構が多数確認されたB区などの標高の高い地点から流入または遺棄され堆積したものと考えられる。出土遺物の特徴から、基本層VII層が繩文時代、基本層V層が古代前後、基本層III層が中世以降に堆積した層と判断される。基本層III・V・VII層から出土した遺物のほとんどは破片資料で、その出土状況から、遺構が多数確認されたB区東半の標高の高い地点から流入または遺棄され堆積したものと考えられる。

この他、砂礫層である**基本層IVA**層で須恵器、**基本層VIA**層で縄文土器（第53図1・2）・石器が少量出土している（第10表）。基本層IVA層・VIA層で出土した土器の器面は非常に磨滅しているものが多い。基本層IVA層・VIA層は、遺跡の南を流れる山寺川の氾濫により堆積した砂礫層を考えられ、これらの遺物は河川の氾濫により周囲から流入したものと考えられる。基本層IVA層・VIA層の年代は、出土遺物・基本層の関係から、IVA層が古代以降・中世以前、VIA層が縄文時代以降の堆積層と考えられる。

以下、遺物が多く出土した基本層Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅶ層の遺物について概要を提示する（それぞれの遺物の特徴や年代等については第Ⅳ章第1節を参照）。

第10表 谷原遺跡1次調査 基本層出土遺物一覧

括弧( )内の数値は遺物の乾燥重量(g)を示す

140

### (1) 基本層Ⅲ層出土遺物 (第47・59図)

基本層Ⅲ層から出土した遺物の総数は218点(2,052.7g)で、その内訳は縄文土器56点(680g)、土師器150点(765g)、須恵器3点(115g)、中世陶器4点(400g)、石器4点(67.7g)、鉄滓1点(25g)である(第10表)。Ⅲ層出土遺物のうち、図示できたのは、土師器2点、陶器4点、石器1点である。

#### [石器] (第47図)

石器は、石匙・剥片が出土した。このうち、石匙(第47図7)を図示した。

#### [土師器] (第47図)

土師器は、ロクロ成形の壺・甕が出土した。このうち、ロクロ成形の土師器甕(第47図1・2)を図示した。壺類については、小破片のため図示できるものがないが、内面黒色処理を施したものと赤焼土器の両者が出土した。

#### [須恵器]

須恵器は、壺・甕が出土した。小破片のため図示できたものはない。

#### [中世陶器] (第47図)

陶器は、鉢・壺・甕が出土し、すべて図示した(第47図3~6)。このうち、第47図4の甕と第47図5の壺については白石窯産、第47図3の鉢と第47図6の甕は在地産のものとみられる。

### (2) 基本層V層出土遺物 (第48~52・59~61図)

基本層V層から出土した遺物の総数は998点(14,892.3g)で、その内訳は縄文土器623点(7,590g)、土師器281点(3,735g)、須恵器69点(3,075g)、石器25点(492.3g)である(第10表)。V層出土遺物のうち、図示できたのは、縄文土器26点、石器4点、土師器19点、須恵器16点である。

#### [縄文土器] (第48~49図)

縄文土器は深鉢・袖珍土器が出土した。出土した土器は、文様の特徴から、縄文時代中期末葉～後期前葉の土器が主体である。このうち、図示できたものは、深鉢口縁部破片(第48図1~7)・胴部破片(第48図8~18、第49図1~6)・底部破片(第49図7)・袖珍土器底部破片(第49図8)である。

#### [石器] (第49図)

石器は、楔形石器・不定形石器・磨製石斧・剥片が出土した。このうち、楔形石器(第49図9)・不定形石器(第49図10)・磨製石斧(第49図12)・剥片(第49図11)を図示した。

#### [土師器] (第50・51図)

土師器は、壺・高台付壺・甕・器種不明品が出土した。このうち、非ロクロ成形の土師器壺(第50図1)・甕(第51図1~6)・ロクロ成形の内黒処理を施した土師器壺(第50図2~7・9・11~13)・赤焼土器壺(第50図8・10)・甕(第51図2~5)を図示した。

#### [須恵器] (第51・52図)

須恵器は、壺・高台付壺・蓋・鉢・瓶類・壺・甕が出土した。このうち、壺(第51図7~12)・高台付壺(第52図1~2)・蓋(第52図3)・鉢(第52図4)・瓶類(第52図5)・壺(第52図6)・甕(第52図7~10)を図示した。

### (3) 基本層VII層出土遺物 (第54~58・61・62図)

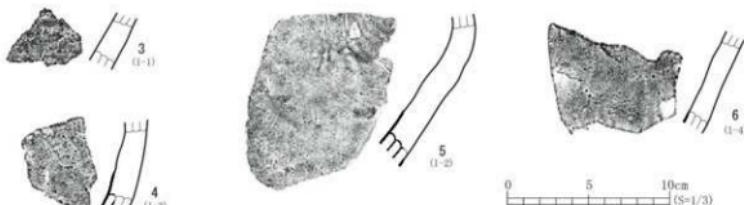
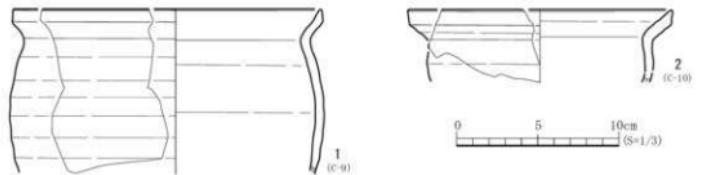
基本層VII層は、土色と混入物の違いによりさらにVIIa層とVIIb層に細別され(詳細については第III章第3節を参照)、このうち、縄文時代の遺物は基本層VIIa層に多く含まれていた。基本層VII層から出土した遺物の総数は607点(10,107.1g)で、その内訳は土器類590点(9,200g)、石器類17点(907.1g)である(第10表)。出土した土器は、破片資料がほとんどで、器面が磨滅しているものが多い。VII層出土遺物のうち、図示できたのは、縄文土器49点、石器5点である。

#### [縄文土器] (第54~56図)

縄文土器は深鉢が出土した。出土した土器は、文様の特徴から、縄文時代中期末葉～後期前葉の土器が主体である。このうち、図示できたものは、深鉢口縁部破片(第54図1~9、第55図1~5、第58図1~3)・深鉢胴部破片(第55図6~17、第56図1~9、第58図4~10)・深鉢底部破片(第56図10~12、第58図11)である。

## 【石器】(第57図)

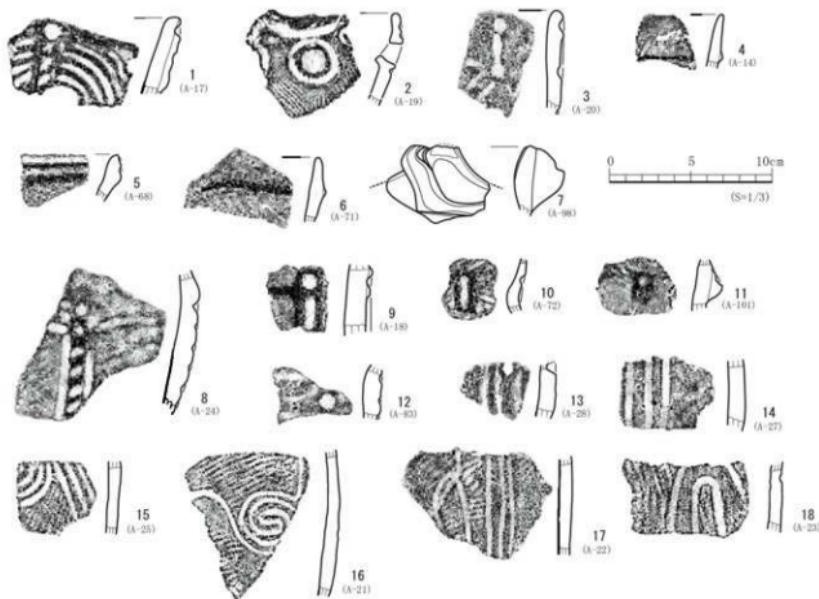
石器は、楔形石器・不定形石器・扁平片刃石斧・石核・剥片が出土した。このうち、楔形石器(第57図1)・不定形石器(第57図2)・石核(第57図3)・扁平片刃石斧(第57図4)・剥片(第57図5)を図示した。



No.	層	種別	部種	性	存	特徴【技法(外面・内面)・色調(外面・内面)・重量・その他の特徴の順に記載】	写真
1	基本層	石核	上部器	塊	口縁部 ～側部	内外面：ロクロナギ、色調：外面・赤褐色(SYR5/6)、内面・にぶい赤褐色(T.SYR4/3)。法量：口径(19.9)cm・残高(10.2)cm・器厚(4.0~6.0)cm	C-9
2	基本層	石核	上部器	塊	口縁部 ～側部	内外面：ロクロナギ、色調：外面・褐色(T.SYR4/3)、内面・にぶい褐色(T.SYR5/3)。法量：口径(16.2)cm・残高(4.4)cm・器厚(4.0~6.0)cm	C-10
3	基本層	中世陶器	鉢	脚部	内外面：ナギ、色調：外面・にぶい赤褐色(SYR5/3)、内面・にぶい赤褐色(2.SYR5/4)。法量：器厚1.2~1.45cm、底地：有地	I-1	
4	基本層	中世陶器	甕	脚部	内外面：ナギ、色調：外面・灰褐色(T.SYR4/2)。法量：器厚1.3~1.6cm、底地：白石窯	I-3	
5	基本層	中世陶器	甕？	脚部	外面：ナギ、内面：ナギ・オサニ。色調：外面・灰褐色(T.SYR4/2)、内面・黒褐色(1.0HC1/1)・褐色(1.0VR1/1)。法量：器厚1.3~1.8cm、底地：白石窯	I-2	
6	基本層	中世陶器	甕	脚部	外面・ケズリ・ナギ、内面：ナギ、色調：外面・暗赤灰色(10RA4/1)・赤褐色(2.SYR4/1)、内面・灰褐色(17.SYR4/2)。法量：器厚1.2~1.4cm、底地：有地	I-4	

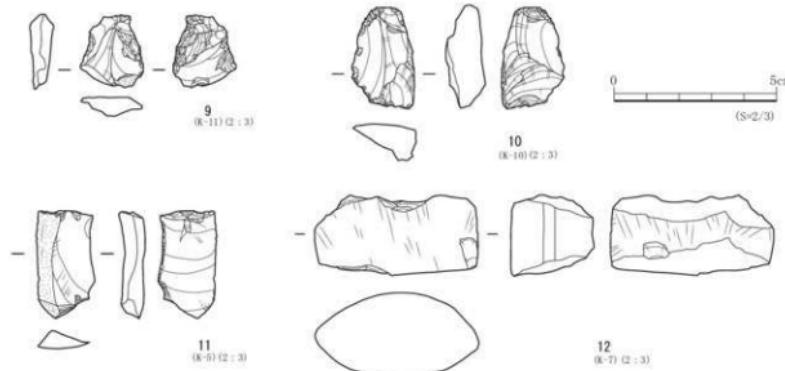
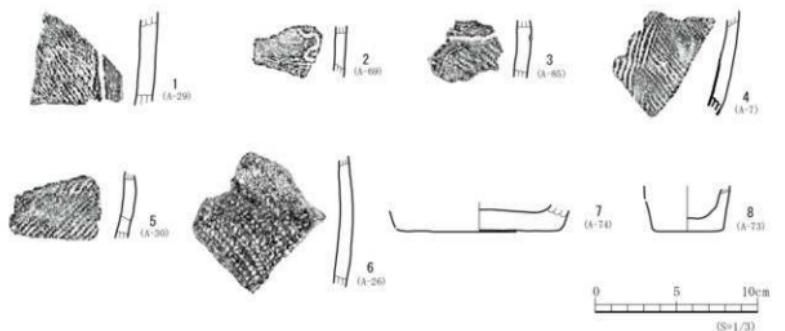
No.	層	部種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	写真
7	基本層	6題	珪質頁岩	2.15	2.8	0.8	4.0		I-6

第47図 基本層Ⅲ層出土遺物



No.	番	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	壁厚
1	基本層V層	調文土器	深鉢	口縁部	外面：陰刻文・官孔・脚穴・沈鍵文・官孔。内面：ナデ。色調：外面・に赤褐色(10YR5/3)、内面・褐色(7, 5YR4/4)。法量：器厚0.8~1.3cm	A-17
2	基本層V層	調文土器	深鉢？	口縁部	外面：沈鍵文・調文B・貫通孔。内面：ナデ。色調：外面・に赤褐色(5YR4/3)、内面・暗赤褐色(5YR3/3)。法量：器厚0.5~1.2cm	A-19
3	基本層V層	調文土器	深鉢	口縁部	外面：沈鍵文・官孔・唐城。内面：唐城のため不明。色調：外面・黒褐色(10YR3/2)、内面・に赤褐色(5YR4/4)。法量：器厚0.7~0.9cm	A-20
4	基本層V層	調文土器	深鉢	口縁部	外面：陰刻文・脚穴。内面：ナデ。色調：外内面・に赤褐色(7, 5YR5/4)。法量：器厚0.5~0.9cm	A-14
5	基本層V層	調文土器	浅鉢	口縁部	外面：沈鍵文・唐城。内面：唐城のため不明。色調：外内面・に赤褐色(10YR4/4)、内面・暗赤褐色(5YR3/3)。法量：器厚0.6~1.0cm	A-68
6	基本層V層	調文土器	深鉢	口縁部	外面：陰刻文・調文B・唐城。内面：唐城のため不明。色調：外面・に褐色(7, 5YR5/3)。法量：器厚0.6~1.0cm	A-71
7	基本層V層	調文土器	深鉢	口縁部	外面：陰刻文・内面・に赤褐色(10YR5/3)。法量：器厚0.7~2.9cm	A-98
8	基本層V層	調文土器	深鉢	脚部	外面：陰刻文・脚穴文・調文B・沈鍵文・官孔・唐城。内面：唐城のため不明。色調：外面・に赤褐色(7, 5YR4/4)。法量：器厚0.9~1.1cm	A-24
9	基本層V層	調文土器	深鉢	脚部	外面：陰刻文・官孔・脚穴文・調文B・沈鍵文・内面：唐城のため不明。色調：外面・暗赤褐色(7, 5YR4/2)。内面・に褐色(5YR3/3)。法量：器厚1.3~1.5cm	A-18
10	基本層V層	調文土器	深鉢	脚部	外面：陰刻文・脚穴文・官孔・調文B・唐城。内面：唐城のため不明。色調：外面・暗赤褐色(7, 5YR3/4)。内面・黒褐色(7, 5YR4/1)。法量：器厚0.9~1.2cm	A-72
11	基本層V層	調文土器	深鉢	脚部	外面：陰刻文・脚穴文・沈鍵文・唐城。内面：唐城のため不明。色調：外面・暗赤褐色(5YR3/4)。内面・に赤褐色(5YR4/4)。法量：器厚0.9~1.0cm	A-101
12	基本層V層	調文土器	深鉢	脚部	外面：沈鍵文・官孔。内面：ナデ。色調：外面・に赤褐色(7, 5YR4/4)。内面・に褐色(7, 5YR4/3)。法量：器厚0.9~1.1cm	A-93
13	基本層V層	調文土器	深鉢	脚部	外面：沈鍵文・官孔・唐城。内面：唐城のため不明。色調：外面・黒褐色(2, 5YR3/1)。内面・に赤褐色(10YR5/2)。法量：器厚0.25~0.9cm	A-28
14	基本層V層	調文土器	深鉢	脚部	外面：調文B・沈鍵文・内面：ナデ。色調：外内・黒褐色(10YR3/2)。内面・暗赤褐色(5YR3/3)。法量：器厚0.9~1.0cm	A-27
15	基本層V層	調文土器	脚部	外面：沈鍵文・唐城。内面：唐城のため不明。色調：外内・暗赤褐色(2, 5YR3/3)。内面・黒褐色(0.2/0)。法量：器厚0.6~0.7cm	A-25	
16	基本層V層	調文土器	深鉢	脚部	外面：調文B・沈鍵文・唐城。内面：唐城のため不明。色調：外内・暗赤褐色(5YR4/3)。内面・褐色(7, 5YR4/1)。法量：器厚0.6~0.8cm	A-21
17	基本層V層	調文土器	深鉢	脚部	外面：調文B・沈鍵文・唐城。内面：唐城のため不明。色調：外内・暗赤褐色(5YR4/3)。内面・褐色(7, 5YR4/1)。法量：器厚0.6cm	A-22
18	基本層V層	調文土器	深鉢	脚部	外面：調文B・沈鍵文・唐城。内面：唐城のため不明。色調：外内・暗赤褐色(5YR4/3)。内面・褐色(7, 5YR4/3)。法量：器厚0.5~0.7cm	A-23

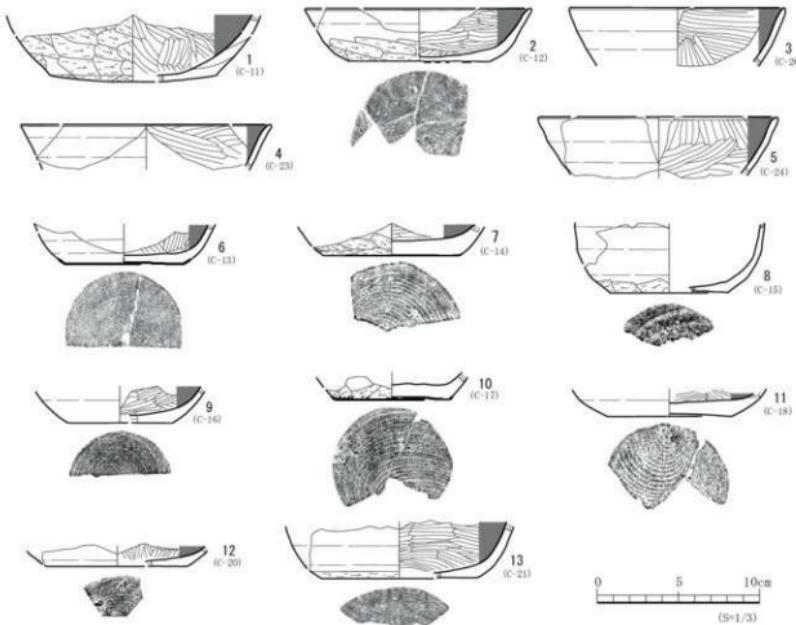
第48図 基本層V層出土遺物 (1)



No.	種類	器種	測量	残存	特徴【技術(外面・内面)・色調(外面・内面)・重量(外側・内側)・特徴の順に記載】	番号
1	基本層V層	圓文土器	深鉢	脚部	外面：圓文支立・沈殿文、内面：ミガキ。色調：外面・灰褐色(7.5YR1/2)、内面・にらい赤褐色(5YR5/4)。法量：器厚0.9~1.2cm	A-29
2	基本層V層	圓文土器	深鉢	脚部	外面：圓文支立・沈殿文(ジダギ支文?)、内面：ナデ。色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)、内面・にらい赤褐色(5YR5/4)。法量：器厚0.6~0.7cm	A-69
3	基本層V層	圓文土器	深鉢	脚部	外面：圓文支立・沈殿文、内面：ナデ。色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・にらい赤褐色(5YR4/4)。法量：器厚0.8~0.9cm	A-85
4	基本層V層	圓文土器	深鉢	脚部	外面：圓文支立、内面：ナデ。色調：外面・赤褐色(2.5YR2/1)・灰褐色(7.5YR4/2)。内面・灰黃褐色(10YR4/2)。法量：器厚0.8cm	A-7
5	基本層V層	圓文土器	深鉢	脚部	外面：圓文支立、内面：ナデ。色調：外面・にらい褐色(7.5YR5/4)。内面・にらい黄褐色(10YR5/4)。法量：器厚0.6~0.8cm	A-30
6	基本層V層	圓文土器	深鉢	脚部	外面：圓文支立・脚部。内面：磨減のため不明。色調：外面・黒色(3Z/0)。内面・にらい黄褐色(10YR4/3)。法量：器厚0.6~0.8cm	A-26
7	基本層V層	圓文土器	深鉢	底部	内外面：磨減のため不明。色調：外面・にらい赤褐色(2.5YR4/4)、内面・にらい赤褐色(5YR4/4)。法量：底径10.2cm・残存高1.7cm・器厚1.1~1.3cm	A-74
8	基本層V層	圓文土器	底部		内外面：ナデ。色調：外面・にらい赤褐色(5YR4/3)、内面・紺赤褐色(5YR3/2)。法量：底径4.0cm・残存高3.8cm・器厚0.8~1.3cm	A-73

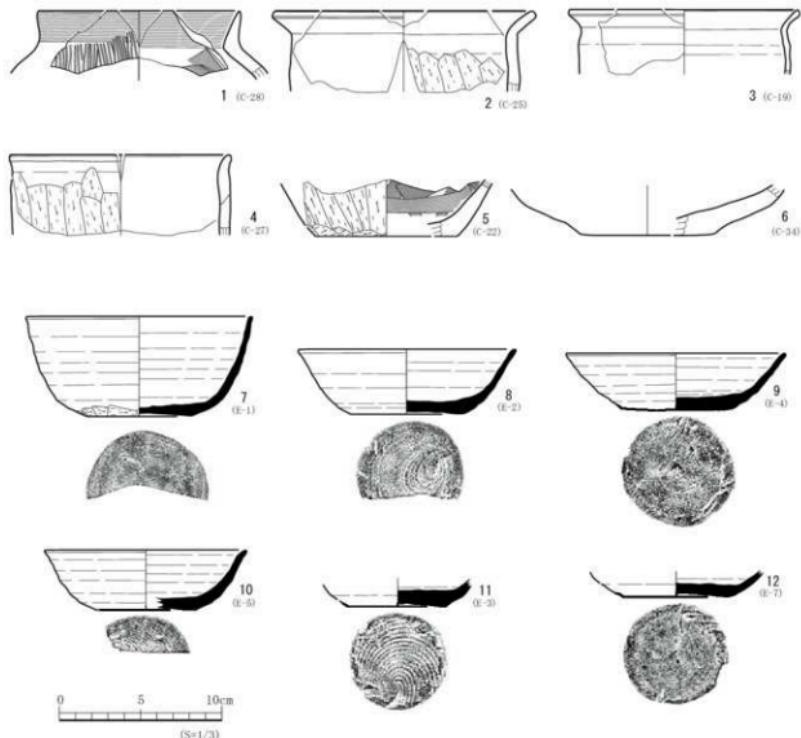
No.	種類	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	参考	登録
9	基本層V層	橢形石器	柱質凝灰岩	2.25	1.9	0.7	2.5		K-11
10	基本層V層	不規則石器	頁岩	3.1	1.95	1.2	6.0		K-10
11	基本層V層	使用痕剥片	柱質凝灰岩	3.35	1.8	0.8	4.3		K-5
12	基本層V層	網張石器?	頁岩	2.5	5.0	2.55	49.0		K-7

第49図 基本層V層出土遺物（2）



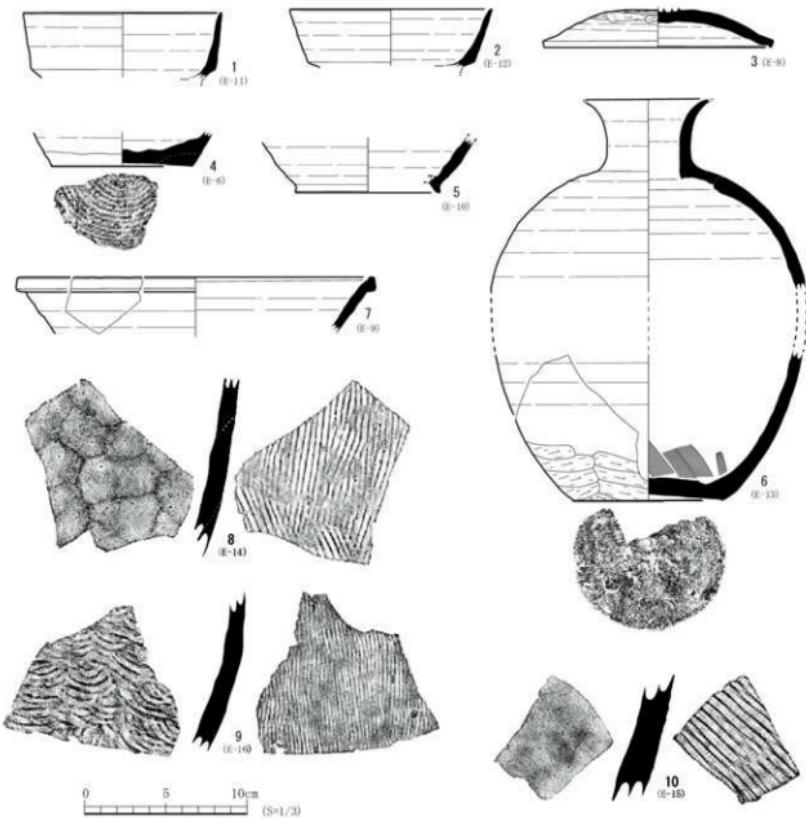
No.	層	種別	断面	残存	特徴【柱足(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量】その他の特徴の欄に記載】	分類
1	基本層V層	土師器	环	胸部 ～底部	外面：ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色處理。色調：外面・にぶい褐色(7.5W5/4)。内面・暗灰色(N3/0)。 法量：残存高4.1cm・底厚0.4～1.0cm	C-11
2	基本層V層	土師器	环	口縁部 ～底部	外面：ロクラナデ・脚部下端手摺らへ削り・底部切り離し技術不明→手持ちへ削り再調整。内面：ヘラミガキ・黒色處理。色調：外面・真灰色(2.5W4/1)、内面・暗色(N2/0)。法量：口径(14.0)cm・残高3.5cm・底径(0.6)cm・底厚0.3～0.7cm	C-12
3	基本層V層	土師器	环	口縁部 ～脚部	外面：ロクラナデ。内面：ヘラミガキ・黒色處理。色調：外面・にぶい黄褐色(10YR6/3)。内面・暗灰色(N3/0)。法量：口径(13.2)cm・残高3.7cm・底厚0.4～0.5cm	C-26
4	基本層V層	土師器	环	～脚部	外面：ロクラナデ・内面：ヘラミガキ・黒色處理。色調：外面・黄・暗褐色(2.5Y5/3)・暗灰色(N3/0)。内面・暗灰褐色(N3/0)。法量：口径(13.4)cm・残高2.9cm・底厚0.4～0.5cm	C-23
5	基本層V層	土師器	环	口縁部 ～脚部	外面：ロクラナデ・内面：ヘラミガキ・黒色處理。色調：外面・黄・暗褐色(2.5Y5/3)・暗灰色(N3/0)。法量：口径(14.0)cm・残高3.9cm・底厚0.3～0.4cm	C-24
6	基本層V層	土師器	环	胸部 ～底部	外面：ロクラナデ・底部切り離し技術不明→回転へ削り再調整。内面：ヘラミガキ・黒色處理。色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)、内面・暗灰色(N3/0)。法量：底径(7.2)cm・残存高2.5cm・底厚0.4～0.7cm	C-13
7	基本層V層	土師器	环	胸部 ～底部	外面：ロクラナデ・脚部下端手摺らへ削り・底部切り離し無調整。内面：ヘラミガキ・黒色處理。色調：外面・にぶい褐色(7.5W4/4)。内面・暗褐色(5YR4/2)。法量：底径(8.0)cm・残高2.0cm・底厚0.8～1.2cm	C-14
8	基本層V層	土師器	环	胸部 ～底部	外面：ロクラナデ・脚部下端手摺らへ削り・底部切り離し無調整。内面：暗褐色(7.5W4/4)。内面・褐色(7.5W4/3)。法量：底径(7.2)cm・残存高4.3cm・底厚0.3～0.7cm・赤鐵土埋入	C-15
9	基本層V層	土師器	环	胸部 ～底部	外面：ロクラナデ・底部切り離し技術不明→回転へ削り再調整。内面：ヘラミガキ・黒色處理。色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)・暗灰色(N3/0)。内面・黑色(2.0)。法量：底径(8.4)cm・残存高2.2cm・底厚0.3～0.8cm	C-16
10	基本層V層	土師器	环	胸部 ～底部	外面：ロクラナデ・脚部下端へ削り・底部切り離し無調整。内面：ロクラナデ。色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/4)。内面・赤褐色(5YR4/4)。法量：底径7.2cm・残高2.2cm・底厚0.6～1.0cm。赤鐵土埋入	C-17
11	基本層V層	土師器	环	胸部 ～底部	外面：ロクラナデ・底部切り離し無調整。内面：ヘラミガキ・黒色處理。色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/4)・暗褐色(2.5W4/2)。法量：底径(7.6)cm・残存高1.7cm・底厚0.5～0.7cm	C-18
12	基本層V層	土師器	环	胸部 ～底部	外面：ロクラナデ・底部切り離し無調整。内面：ヘラミガキ・黒色處理。色調：外面・にぶい褐色(7.5W4/4)・黃褐色(2.5Y4/4)。内面・暗灰色(N3/0)。法量：底径(8.6)cm・残存高1.3cm・底厚0.3～0.6cm	C-20
13	基本層V層	土師器	环	胸部 ～底部	外面：ロクラナデ・脚部下端回転へ削り・底部切り離し技術不明→回転へ削り再調整。内面・ヘラミガキ・黒色處理。色調：外面・黒褐色(10YR3/2)。内面・黑色(2.0)。法量：底径(9.6)cm・残存高3.5cm・底厚0.3～0.6cm	C-21

第50図 基本層V層出土遺物(3)



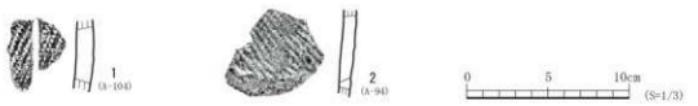
No.	番	種別	器種	所 在	特徴【技法(外面・内面)・色調(外面・内面)・法量】その他の特徴の欄に記載】	写真
1	基本層V層	土器部	甕	白縁部 ～脚部	外面：白縁部ヨコナデ・脚部へ胴部ハケメ。内面：白縁部ヨコナデ・脚部へ胴部ハナデ。色調：外面・灰褐色(IVB4/2)に似る・褐色(IVB4/3)。内面：に似る・黄褐色(IVYB5/3)。法量：底径(13.8)cm・残存高5.0cm・器厚0.5~1.0cm	C-28
2	基本層V層	土器部	甕	白縁部 ～脚部	各面：ロクロナデ・磨滅。内面：ロクロナデ・ケツリ・色調：外面・に似る・黄褐色(IVB4/3)。内面：に似る・黄褐色(IVYB5/3)。法量：口徑(13.8)cm・残存高5.0cm・器厚0.6~0.7cm	C-25
3	基本層V層	土器部	甕	白縁部 ～脚部	外面：ロクロナデ・色調：外面・褐灰色(IVB4/1)・内面・黒褐色(IVYB5/1)。法量：口徑(14.0)cm・残存高4.0cm・器厚0.3~0.4cm	C-19
4	基本層V層	土器部	甕	白縁部 ～脚部	外面：ロクロナデ・脚部ハラ削り。内面：ナダ?・磨滅。色調：外面・に似る・赤褐色(IVB5/3)、内面・黒褐色(IVYB5/1)。法量：口徑(13.4)cm・残存高5.0cm・器厚0.4~0.7cm	C-27
5	基本層V層	土器部	甕	脚部 ～近底	外側：脚部ハラ削り・底部手持ちハラ削り。内面：ハラ削り。色調：外面・に似る・褐色(IVB4/4)、内面・褐褐色(IVYB5/4)。法量：底径(8.8)cm・残存高3.5cm・器厚0.5~1.2cm	C-22
6	基本層V層	土器部	甕	脚部 ～近底	外側：磨減のため不明。色調：外面・に似る・褐褐色(IVYB5/4)、内面・暗灰色(N3/0)。法量：底径(8.4)cm・残存高3.1cm・器厚1.0~1.6cm	C-34
7	基本層V層	須恵器	壺	白縁部 ～底部	外側：ロクロナデ・底端下端手持ちハラ削り・底部切り離し技術不明→手持ちハラ削り再調整。内面：ロクロナデ・色調：外面・褐褐色(IVB5/1)、内面・灰褐色(N4/0)。法量：口徑(13.9)cm・器高6.1cm・底径(6.3)cm・器厚0.3~0.7cm	E-1
8	基本層V層	須恵器	壺	白縁部 ～底部	外側：ロクロナデ・底端切削切り無調整。内面：ロクロナデ。色調：内外面・灰色(IV4/1)。法量：口徑(13.3)cm・器高4.0cm・底径(6.6)cm・器厚0.3~0.9cm	E-2
9	基本層V層	須恵器	壺	白縁部 ～底部	外側：ロクロナデ・底端切削ハラ削り・手持ちハラ削り再調整。内面：ロクロナデ。色調：外面・灰色(IV4/1)、内面・灰褐色(IVB4/1)。法量：口徑13.4cm・器高3.5cm・底径6.8cm・器厚0.3~0.8cm	E-4
10	基本層V層	須恵器	壺	白縁部 ～底部	外側：ロクロナデ・底端切削ハラ削り無調整。内面：ロクロナデ。色調：外面・灰褐色(N4/0)、内面・褐褐色(IVB4/1)。法量：口徑(12.4)cm・器高3.7cm・底径(6.2)cm・器厚0.4~0.8cm	E-5
11	基本層V層	須恵器	壺	脚部 ～底部	外側：ロクロナデ・底端切削切り無調整。内面：ロクロナデ。色調：外面・灰褐色(IVB4/2)。内面・黄褐色(2.5IV6/1)。法量：底径(6.0)cm・残存高1.8cm・器厚0.4~0.8cm	E-3
12	基本層V層	須恵器	壺	脚部 ～底部	外側：ロクロナデ・底端切削切り無調整。内面：ロクロナデ。色調：外面・黄褐色(IV4/1)、内面・灰色(5IV5/1)。法量：底径(6.5)cm・残存高1.6cm・器厚0.4~0.7cm	E-7

第51図 基本層V層出土遺物(4)



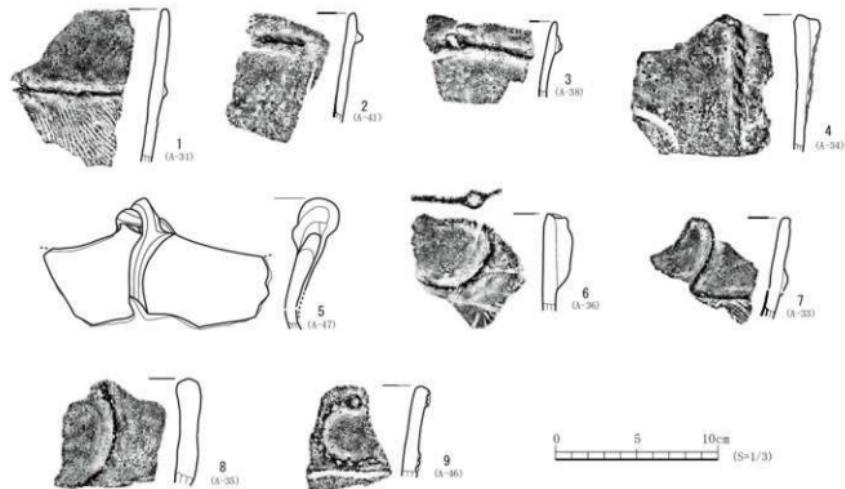
No.	層	種別	器種	現存	特徴【技法(外面・内面)・色調(外面・内面)・寸法】→その他の特徴の順に記載】	世紀
1	基本層V層	須恵器	高台付杯	口縁部 ～脚部	外表面：ロクロナデ。色調：外面・灰褐色(7.5H5/1)、内面・褐灰色(10YR5/1)。法量：口径(12.2)cm・残存高4.0cm・深幅0.3～0.6cm。高台部欠損。	E-11
2	基本層V層	須恵器	高台付杯	口縁部 ～脚部	外表面：ロクロナデ。色調：内外面・褐色(Ns/0)。法量：口径(12.4)cm・残存高3.5cm・深幅0.3～0.6cm。高台部欠損。	E-12
3	基本層V層	須恵器	蓋	天井部 ～口縁部	外表面：ロクロナデ。天井部手持ちへら削り～回転へら削り。内面：ロクロナデ。色調：外面・褐灰色(10YR5/1)、内面・褐灰色(10YR4/1)。法量：口径14.0cm・残存高2.5cm・深幅0.4～0.8cm。つまみ部欠損。	E-8
4	基本層V層	須恵器	鉢？	脚部	外表面：ロクロナデ。底面部切取り無調整。内面：ロクロナデ。付着物有。色調：外面・灰黃褐色(10YR4/2)。	E-6
5	基本層V層	須恵器	巻？	～底部	内面：ロクロナデ。自然縫。内面：ロクロナデ。色調：内外面・褐灰色(2.5Y4/1)。法量：直径(8.8)cm・残存高3.1cm・深幅0.5～0.6cm。	E-10
6	基本層V層	須恵器	蓋	口縁部 脚～底部	外表面：口縁部～脚部ロクロナデ。脚部下端手持ちへら削り。底部切り離し技法不明～手持ちへら削り再調整。内面：ロクロナデ。底面部へナデ。色調：内外面・褐灰色(7.5H5/1)。法量：口径(7.6)cm・深幅(4.2)cm・底径9.2cm・深幅0.3～1.2cm。	E-13
7	基本層V層	須恵器	甕	口縁部	外表面：ロクロナデ。色調：外面・黄褐色(2.5Y4/1)、内面・灰褐色(7.5Y4/1)。法量：口径(22.0)cm・残存高3.5cm・深幅0.5～0.8cm。	E-9
8	基本層V層	須恵器	甕	脚部	外表面：平行タキ。内面：当て具痕。色調：外面・褐灰色(3.5/0)、内面・褐灰色(10YR4/1)。法量：深幅0.8～1.1cm。	E-14
9	基本層V層	須恵器	甕	脚部	外表面：平行タキ。内面：当て具痕。色調：外面・黄褐色(2.5Y5/1)、内面・黄褐色(2.5Y4/1)。法量：深幅0.9～1.2cm。	E-16
10	基本層V層	須恵器	甕	脚部	外表面：平行タキ。内面：当て具ナデ。色調：外面・黄褐色(2.5Y5/1)、内面・灰褐色(10Y4/1)。法量：深幅1.6～1.8cm。	E-15

第52図 基本層V層出土遺物（5）



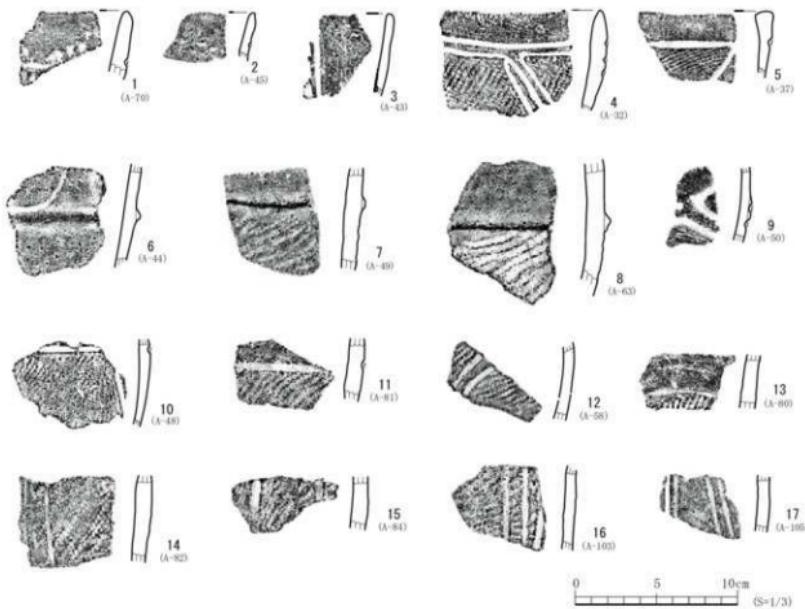
No.	番	種別	器種	性	存	特徴【技法(外側・内面)→色調(外側・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登錄
1		基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	斜部	外側：縄文文・赤褐色、内面：ナデ、色調：外側・灰黄褐色(10YR4/2)、内面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、法量：器厚0.9~1.0cm	A-104
2		基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	斜部	外側：縄文文、内面：ナデ、色調：外側・にぶい赤褐色(5YR4/4)・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、法量：器厚0.6~0.7cm	A-94

第53図 基本層VIIa層出土遺物



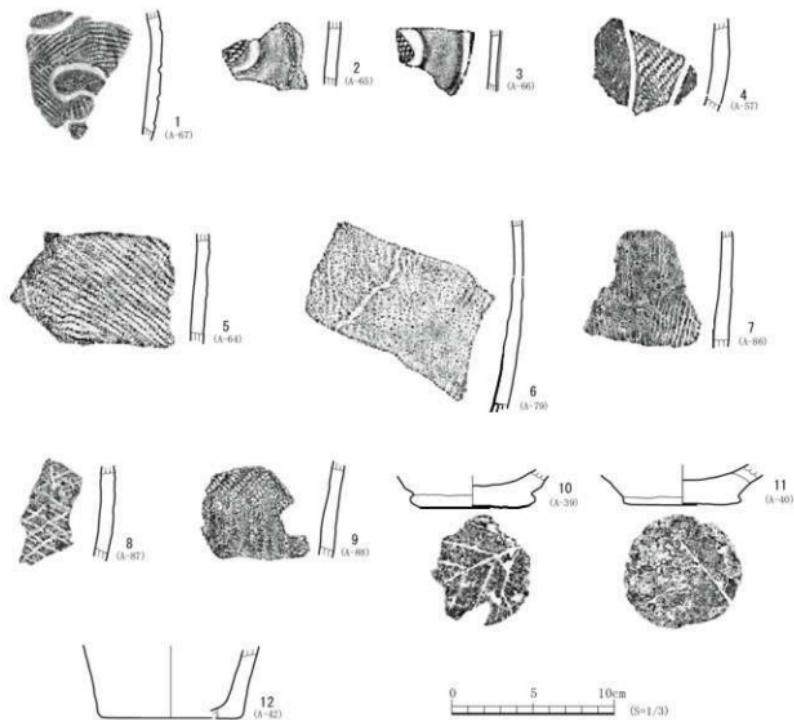
No.	番	種別	器種	性	存	特徴【技法(外側・内面)→色調(外側・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登錄
1		基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外側：施帶・縄文文、内面：ナデ、色調：内外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、法量：器厚0.7~1.0cm	A-31
2		基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外側：施帶・縄文(全体不明)、網目、内面：網目のみ不明、色調：内外面・暗赤褐色(5YR3/2)、法量：器厚0.5~1.0cm	A-41
3		基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外側：施帶・刺突文・縄文(原体不明)・網目、内面：網目のみ不明、色調：外側・黒褐色(5YR1/1)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、法量：器厚0.4~0.9cm	A-38
4		基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外側：施帶・刺突文・沈殿文・網目、内面：網目のみ不明、色調：外側・褐色(7.5YR4/3)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：器厚0.6~1.5cm	A-34
5		基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外側：施帶(粘土块付1)・くざき、内面：網目のみ不明、色調：外側・にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・褐色(7.5YR4/2)・黄褐色(2.5YR4/1)、法量：器厚0.6~1.1cm	A-47
6		基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外側：口唇部刺突文・施帶・沈殿文、内面：ナデ、色調：外側・にぶい赤褐色(2.5YR4/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.9~1.7cm	A-36
7		基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外側：施帶・縫合状、内面・ナデ、色調：外側・灰黄褐色(10YR4/2)、内面・灰黄褐色(10YR4/2)、法量：器厚0.5~1.1cm	A-33
8		基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外側：施帶、内面：ナデ、色調：外側・暗赤褐色(2.5YR3/3)、内面・赤色(10R4/6)、法量：器厚0.9~1.3cm	A-35
9		基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外側：施帶(C字状?)・刺突文・沈殿、内面：網目のみ不明、色調：外側・にぶい赤褐色(5YR5/4)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：器厚0.7~1.0cm	A-46

第54図 基本層VII層出土遺物 (1)



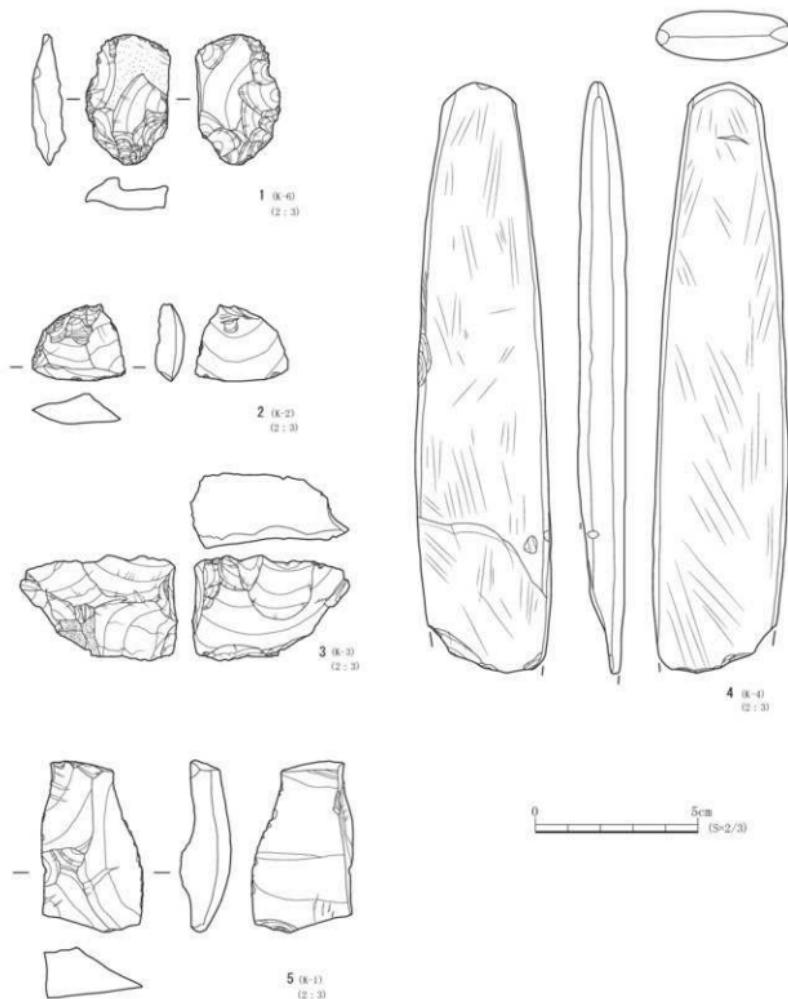
No.	層	種別	器種	所存	特徴【技法(外面・内面)・色調(外面・内面)・法量】	状況
1	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	白縁部	外面：沈綱文・斜交文・磨滅。内面：削減のため不明。色調：外表面にぶい赤褐色(5YR5/4)。法量：厚さ0.9~1.0cm	A-70
2	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	白縁部	外面：斜交文・磨滅。内面：削減のため不明。色調：外表面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・褐色(7.5YR4/3)。法量：厚さ0.4~0.5cm	A-45
3	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	白縁部	外面：沈綱文・斜交文・内面：ナデ。色調：外表面・赤色(10R4/6)。内面・黒褐色(10YR3/2)。法量：厚さ0.5~0.55cm	A-43
4	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	白縁部	外面：沈綱文・沈綱文・内面：ナデ。色調：外表面・黒褐色(5YR3/1)。内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)。法量：器厚0.7~0.9cm	A-32
5	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	白縁部	外面：縄文X・沈綱文・内面：ナデ。色調：内表面にぶい赤褐色(5YR4/3)。法量：厚さ0.8~1.1cm	A-37
6	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：路帯・沈綱文・磨滅。内面：ナデ。色調：外表面・褐色(7.5YR4/3)。内面・灰褐色(7.5YR4/2)。法量：器厚0.6~1.0cm	A-44
7	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：路帯・縄文X?・磨滅。内面：削減のため不明。色調：外表面・にぶい褐色(7.5YR5/3)。内面・にぶい黒褐色(10YR5/2)・稍灰色(N3.0)。法量：厚さ0.8~1.2cm	A-49
8	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：路帯・縄文X・内面：ナデ。色調：外表面・にぶい褐色(7.5YR5/4)。内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)。法量：厚さ0.8~1.4cm	A-63
9	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：路帯・沈綱文・乳孔・弦切X。内面：削減のため不明。色調：外表面・にぶい赤褐色(5YR4/4)。内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)。法量：器厚0.4~0.6cm	A-50
10	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：縄文X・沈綱文・内面：ケズリ。色調：外表面・灰褐色(7.5YR4/2)。内面・灰褐色(5YR4/2)。法量：器厚0.4~0.7cm	A-48
11	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：縄文X・沈綱文・磨滅。内面：ナデ。色調：外表面・灰褐色(7.5YR4/2)。内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)。法量：厚さ0.8~1.0cm	A-81
12	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：縄文X・沈綱文・磨滅。内面：削減のため不明。色調：外表面・にぶい黄褐色(10YR5/3)。内面・灰褐色(7.5YR4/2)。法量：厚さ0.6~0.8cm	A-58
13	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：縄文X・沈綱文・内面：ナデ。色調：外表面・黒褐色(7.5YR3/1)。内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)・黒褐色(7.5YR4/1)。法量：厚さ0.8~0.9cm	A-80
14	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：縄文X・沈綱文・内面：削減のため不明。色調：外表面・黒褐色(10YR3/1)。内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)。法量：器厚0.7~0.8cm	A-82
15	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：縄文X・内面：ナデ。色調：外表面・にぶい赤褐色(5YR4/3)。内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)。法量：厚さ0.8~1.0cm	A-84
16	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：縄文(原体不明)・沈綱文・磨滅。内面：削減のため不明。色調：外表面・灰褐色(10YR4/2)。内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)。法量：厚さ0.6~0.7cm	A-103
17	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：縄文(原体不明)・沈綱文・磨滅。内面：削減のため不明。色調：外表面・にぶい褐色(7.5YR5/4)。法量：厚さ0.7cm	A-105

第554図 基本層VII層出土遺物（2）



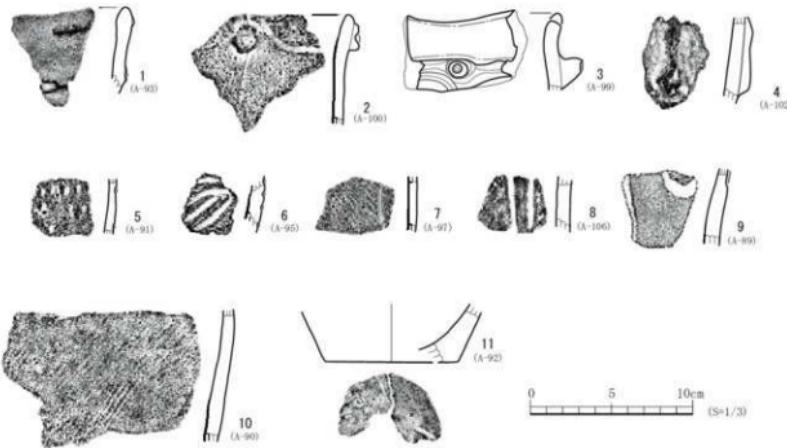
No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登錄
1	基本層VIIe層	鍛文土器	深鉢	側部	外面：鍛文LB、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(7.SYB4/1)、内面・にぶい・赤褐色(5SYA4/3)、法量：器厚0.6~0.8cm	A-67
2	基本層VIIe層	鍛文土器	深鉢	側部	外面：陰面・鍛文紋、内面：ナデ、色調：外面・にぶい・赤褐色(5SYA4/4)、内面・灰褐色(5SYA4/2)、法量：器厚0.7cm	A-65
3	基本層VIIe層	鍛文土器	深鉢	側部	外面：陰面・鍛文LB、内面：ナデ、色調：外面・黒色(N2/2)、内面・黒褐色(5SYA3/1)、法量：器厚0.5cm	A-66
4	基本層VIIe層	鍛文土器	深鉢	側部	外面：鍛文LB・法難文、内面：ナデ、色調：外面・内面・にぶい・赤褐色(5SYA4/4)、法量：器厚0.8~1.0cm	A-57
5	基本層VIIe層	鍛文土器	深鉢	側部	外面：鍛文LB、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(7.SYB4/3)、内面・にぶい・赤褐色(2.SYB4/4)、法量：器厚0.7~0.8cm	A-64
6	基本層VIIe層	鍛文土器	深鉢	側部	外面：鍛文LB・？・網目、内面：網目・網目・のため不明、色調：外面・灰褐色(10SYA4/2)、内面・褐色(7.SYB4/3)、法量：器厚0.4~0.9cm	A-79
7	基本層VIIe層	鍛文土器	深鉢	側部	外面：網目・？、内面：ナデ、色調：外面・にぶい・黃褐色(10SYB5/3)、内面・にぶい・褐色(7.SYB5/4)、法量：器厚0.6~0.9cm	A-86
8	基本層VIIe層	鍛文土器	深鉢	側部	外面：網目状難文、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(10SYA4/2)、内面・にぶい・褐色(7.SYB5/4)、法量：器厚0.7~0.8cm	A-87
9	基本層VIIe層	鍛文土器	深鉢	側部	外面：鍛文LB、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(7.SYB4/2)、内面・にぶい・褐色(7.SYB5/3)、法量：器厚0.8cm	A-88
10	基本層VIIe層	鍛文土器	深鉢	底部	外面：網目状難文・底部木葉柄、内面：網目・のため不明、色調：内外面・にぶい・褐色(7.SYB5/4)、法量：直径7.6cm、残存高2.3cm、器厚1.0~1.75cm	A-39
11	基本層VIIe層	鍛文土器	深鉢	底部	外面：網目・のため不明、底部木葉柄、内面：網目・のため不明、色調：内外面・赤褐色(3SYA4/6)、法量：直径7.2cm、残存高2.5cm、器厚1.1~1.9cm	A-40
12	基本層VIIe層	鍛文土器	深鉢	底部	外面：ナデ・底面木葉柄、内面：ナデ、色調：外面・にぶい・赤褐色(5SYB5/4)、内面・灰黄色(2.SYB4/1)、法量：直径9.0cm、残存高4.5cm、器厚0.6~0.9cm	A-42

第56図 基本層VII層出土遺物（3）



No.	類	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	登録
1	基本層Ⅶa層	楔形石器	頁岩	4.0	2.65	1.0	8.7		K-6
2	基本層Ⅶa層	不定形石器	珪質頁岩	2.3	2.9	0.8	5.0		K-2
3	基本層Ⅶa層	石核	玉髓	6.5	9.75	4.6	265.0		K-3
4	基本層Ⅶa層	扁平片刃石斧?	粘土岩	18.2	4.2	1.5	159.9	次回後再利用5+	K-4
5	基本層Ⅶa層	使用痕削片	珪質頁岩	5.3	3.1	1.6	20.3		K-1

第57図 基本層VII層出土遺物 (4)



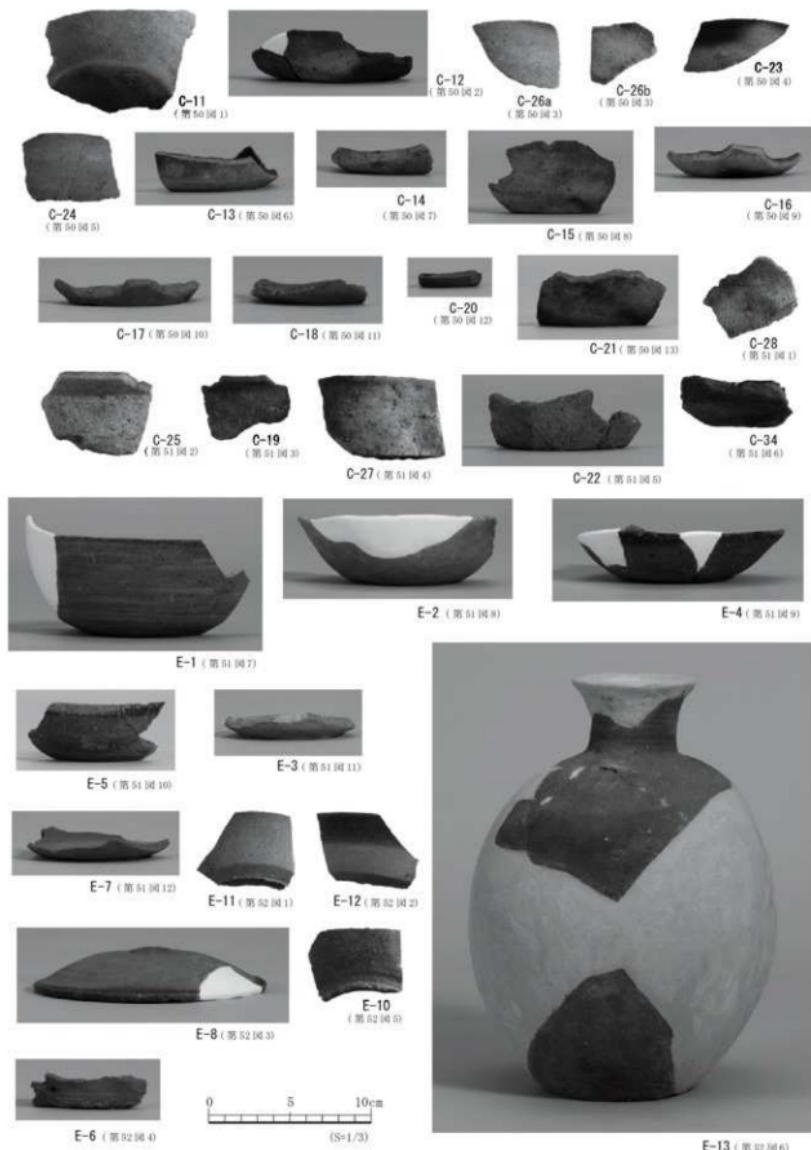
No.	層	種別	出種	残存	特徴【技法(外面・内面)・色調(外面・内面)・状態】その他の特徴の順に記載】	写真
1	基本層VIIb層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：陰面・刺突文・磨滅。内面：磨滅のため不明。色調：外面・褐色(7.5YR4/3)/黄灰色(2.5Y4/1)、内面・黃褐色(2.5Y4/1)。法量：深度0.8~1.1cm	A-93
2	基本層VIIb層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：ボタン状突付文・沈澱文・磨滅。内面：磨滅のため不明。色調：外面・黒褐色(10Y3/2)、内面・褐色(7.5YR4/3)。法量：深度0.8~2.2cm	A-100
3	基本層VIIb層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：沈澱文・持番文・刺突文・磨滅。内面：磨滅のため不明。色調：外面・に赤い褐色(7.5YR5/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)。法量：深度0.6~1.3cm	A-99
4	基本層VIIb層	縄文土器	深鉢	胸部	外面：持番文、内面：ナデ。色調：外面・12.5Y5/2・赤褐色(5YR4/3)、内面・に赤い黒褐色(5YR5/4)。法量：深度0.7~1.5cm	A-102
5	基本層VIIb層	縄文土器	深鉢？	脚部	外面：刺突文・磨滅、内面：磨滅のため不明。色調：外面・に赤い黒褐色(5YR4/3)、内面・灰褐色(10YR4/2)。法量：深度0.4~0.5cm	A-91
6	基本層VIIb層	縄文土器	深鉢	脚部	外面：縄文(全体不明)・沈澱文、内面：ナデ。色調：外面・黒褐色(7.5YR3/2)、内面・に赤い黒褐色(5YR4/4)。法量：深度0.7~0.9cm	A-95
7	基本層VIIb層	縄文土器	深鉢	脚部	外面：縄文(?)・沈澱文・磨滅、内面：ナデ。色調：外面・黒褐色(7.5YR4/3)、内面・に赤い黒褐色(7.5YR5/4)。法量：深度0.5cm	A-97
8	基本層VIIb層	縄文土器	深鉢	脚部	外面：縄文(?)・沈澱文、内面：磨滅のため不明。色調：外面・に赤い黒褐色(7.5YR5/4)、内面・に赤い黒褐色(2.5YR4/3)。法量：深度0.8~0.9cm	A-106
9	基本層VIIb層	縄文土器	深鉢	脚部	外面：ミガキ・法縫文、内面：ミガキ。色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)、内面・黒褐色(5YR3/1)。法量：0.5~0.9cm	A-89
10	基本層VIIb層	縄文土器	深鉢	脚部	外面：縄文(?)、内面：ナデ。色調：外面・に赤い褐色(7.5YR5/3)、内面・に赤い褐色(7.5YR5/4)/黑色(NZ-0)。法量：深度0.5~0.8cm	A-90
11	基本層VIIb層	縄文土器	深鉢	底部	外面：ナデ・底部木薬瓶。内面：ナデ。色調：外面・黒褐色(10YR3/2)、内面・灰褐色(10YR4/2)。法量：底径0.21cm・残存高3.6cm・深度0.9~1.8cm	A-92

第58図 基本層VII層出土遺物（5）



第59図 基本層Ⅲ・V層出土遺物（写真図版）

## 基本層V層

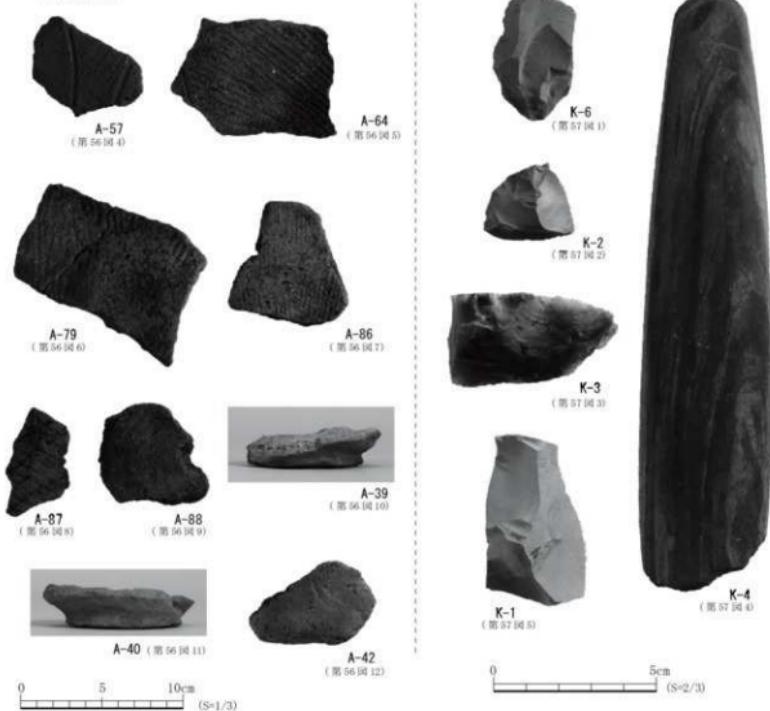


第60図 基本層V層出土遺物（写真図版）



第61図 基本層V・VIA・VIIa層出土遺物（写真図版）

## 基本層VIIa層



## 基本層VIIb層



第62図 基本層VIIa・b層出土遺物（写真図版）

#### 4. 遺構外出土遺物

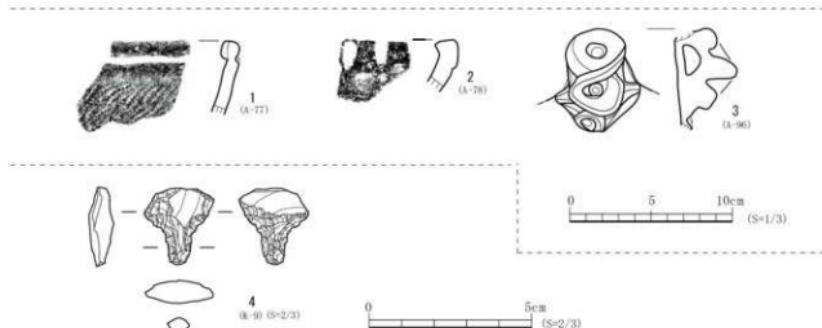
この他、今回の調査区では、遺構検出面・擾乱・調査前の踏査による表探により、縄文土器 251 点[深鉢 249 点 (2,340g)・浅鉢 2 点 (85g)], 土師器 33 点[壺 5 点 (35g)・甕 28 点 (140g)], 須恵器 13 点[壺 6 点 (200g)・甕 7 点 (250g)], 石器 10 点[石錐 1 点 (3g)・剥片 9 点 (66.6g)]が出土した(第 11 表)。このうち、図示できたものは、遺構検出面から出土した縄文土器深鉢(第 63 図 1・2)・深鉢(第 63 図 3)、表探資料の石錐(第 63 図 4)である。

第 11 表 谷原遺跡 1 次調査 遺構外出土遺物一覧

周辺	縄文土器		土師器		須恵器		石器		出土 地点 合計
	深鉢	浅鉢	壺	甕	壺	甕	石錐	剥片	
検出面	242 (2340)	2 (85)	5 (35)	17 (100)	4 (50)	4 (175)	9 (66.6)	9 (86.6)	284 (2791.6)
擾乱	6 (100)				1 (5)				7 (105)
表探					11 (40)	1 (145)	3 (75)	1 (3)	16 (263)
総計	249 (2340)	2 (85)	5 (35)	28 (140)	6 (200)	7 (250)	1 (3)	9 (86.6)	307 (3118.6)

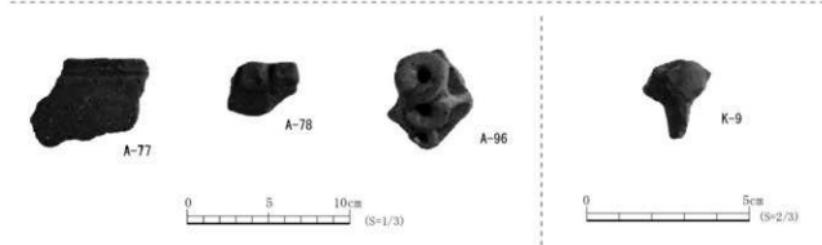
※( )内の数値は遺物の乾燥重量(g)を示す

1kg



No.	層	種別	断面	現存	特徴【技法(外面・内部)→色調(外面・内部)→形状→その他の特徴の順に記載】	参考
1	Ⅱ区 検出面	縄文土器	浅鉢	口縁部	外面: 縄文土・沈殿灰、内面: ミガキ、色調: 外面に赤褐色(5YR4/3), 内面に濃赤褐色(5YR4/3)/褐 褐色(7.5YR3/2), 重量: 重さ0.5~1.1cm	A-77
2	Ⅱ区 検出面	縄文土器	浅鉢	口縁部	外面: 刻文・痕跡、内面: 痕跡のため不明、色調: 外面・灰褐色(7.5YR4/2), 内面・灰褐色(10YR4/2), 重 量: 重さ0.9~1.3cm	A-78
3	Ⅱ区 検出面	縄文土器	深鉢	口縁部	外面: 刻文・痕跡、内面: 痕跡のため不明、色調: 外面・内面に赤褐色(10YR5/3)	A-96

No.	層	断面	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	参考
4	表探	石錐	頁岩	2.4	2.15	0.75	3.0	B-9



第 63 図 遺構外出土遺物

## 第IV章 総 括

今回の調査で検出した遺物・遺構について、ここでは、その特徴や時期を検討し、本遺跡における各時代の特徴をまとめる。

### 第1節 出土遺物の特徴と時期

谷原遺跡1次調査(A~D区)において出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器、鉄滓、鉄製品、石器である。その総数は3,630点(約46,046.9g)である(第12表)。その内訳は、土器類3,555点(約44,230g)、不明鉄製品1点(15g)、鉄滓1点(25g)、石器類73点(約1,776.9g)である(第12表)。

これらの出土遺物のうち、本報告では、土器類178点、石器類は11点について図示した。以下、それぞれについて検討を行う。

第12表 谷原遺跡(1次調査) 出土遺物一覧

出土地点/種別	縄文土器	土師器	須恵器	中世陶器	石器	鉄製品	鉄滓	合計
SB-Pit	313 (2340)	213 (1215)	31 (800)		11 (206.6)			568 (4361.6)
SD	8 (155)	168 (1000)	46 (1185)		1 (4.8)	1 (15)		224 (2359.8)
SK	454 (5465)	92 (885)	9 (85)		3 (7.7)			558 (6232.7)
SK	31 (170)	78 (2195)	1 (5)		1 (16.0)			111 (2386.0)
基本層	1306 (17950)	431 (4500)	73 (3240)	4 (400)	47 (1472.2)		1 (25)	1862 (27567.2)
遺構外	251 (2425)	33 (175)	13 (450)		10 (69.6)			307 (3119.6)
合計	2363 (28495)	1015 (9770)	173 (5565)	4 (400)	73 (1776.9)	1 (15)	1 (25)	3630 (46046.9)

\*詳細な出土地点・層位については、第7~10・11表参照

\*上段の数値は出土点数、下段()内の数値は遺物の乾燥重量(g)を示す

#### 1. 縄文土器(第64図)

縄文土器は2,363点(28,495g)出土した。このうち、図示できたものは106点である。出土地点の内訳は、遺構内出土が806点(8,120g)、遺物包含層(基本層Ⅲ~Ⅶ層)出土が1,306点(17,950g)、遺構外出土が251点(2,425g)である。出土した器種は、大半が深鉢で、その他に浅鉢(第64図51~52)・袖珍土器がごく少量出土している。文様は、磨消縄文手法のものや隆帯・沈線文・貼付文・盲孔・刺突などにより施文されるものが多い。地文は単節縄文(LR)が多く、単節縄文(RL)は少量、撚糸文はごくわずか確認した。

今回出土した縄文土器は、ほとんどが破片資料で出土したため、器形や全体の文様を判別できたものは少ない。したがって、ここでは、最も多く出土した深鉢の土器器面に施されている文様を分類し、その特徴からおよそその年代について検討する。

##### 【文様の分類】

A類：磨消縄文手法により文様を施文するもの(第64図1~6)。文様の区画には沈線によるもの(第64図1~2)と隆帯によるもの(第64図3~6)がある。

B類：口縁部と胴部を横位の隆帯により区画するもの(第64図7~13)。口縁部は無文帶で、胴部には縄文が施される。

C類：無文帶の口縁部に「ノ字状」の貼付文が施されるもの(第64図14~18)。

D類：口縁部と胴部を横位の沈線により区画するもの(第64図19)。B類と同様、口縁部は無文帶で、胴部には縄文が施される。

E類：連続刺突文を施すもの(第64図20)。

F類：口縁部にC字状の貼付文がつくもの(第64図21)。貼付文内に刺突文・盲孔が施される。

G類：口縁部にノ字状の貼付文がつき、貼付文内に盲孔・沈線が施されるもの(第64図22)。



第64図 谷原遺跡（1次調査）出土主要縄文土器集成図

- H類：口縁部に鎖状隆帯をもつもの（第64図23～25）。
- I類：ボタン状貼付文がつくもの（第64図26）。
- J類：胴部に沈線によるジグザグ文が施されるもの（第64図27・28）。
- K類：沈線+盲孔により施されるもの（第64図29～33）。
- L類：隆帯+沈線+盲孔により文様が描かれるもの（第64図34～40）。
- M類：多条沈線により文様が描かれるもの（第64図41～50）。

#### 【縄文土器の年代的位置づけ】

A類の磨消繩文による文様は、破片資料が多く全体の文様構成に把握できるものは少ないが、隣接する調査区（谷原遺跡第2次調査）においても同様の破片が出土している。2次調査においては出土した磨消繩文による文様は、横方向に展開する文様構成で、無文帯が文様モチーフの主体となっていることから、大木10式のものと捉えられている（山田2016）。したがって、今回の調査区で出土したA類についても、同様の年代幅におさまるものと考えられる。

B類の口縁部と胴部を隆帯で区画するもの、C類の無文帯の口縁部に「ノ字状」の貼付文を付す土器は、藏王町二屋敷遺跡（加藤1984）、白石市菅生田遺跡（丹羽1982）、柴田町向畑遺跡（芳賀1983）、福島県三春町越田和遺跡（福島ほか1996）などに類例がある。宮城県内の事例は後期前葉の二屋敷遺跡第II群土器に先行する土器群（加藤1984）、越田和遺跡の事例は綱取I式に先行する土器群（本間2008）とされている。B・C類の土器もこの段階に相当すると考えられ、その年代はおおむね繩文時代中期末葉～後期初頭の幅で捉えておきたい。

D類の土器は、谷原遺跡第2次調査においても同様の破片が出土しており、繩文時代後期初頭頃のものと推定される。E類の連続刺突文が施される土器は、藏王町二屋敷遺跡などの類例から繩文時代中期末頃のものとみておきたい。

F・G類の口縁部にC字状・ノ字状の貼付文を付す土器、H類の鎖状隆帯を付す土器、I類のボタン状貼付文を付す土器、J類の胴部にジグザグ文を施す土器、K・L類の沈線・盲孔により文様が描かれる土器、M類の多条沈線により文様が描かれる土器は、藏王町二屋敷遺跡（加藤1984）、同町西浦B遺跡（鈴木2011）、白石市菅生田遺跡（丹羽1982）、仙台市六反田遺跡（佐藤ほか1987）、同市下ノ内浦遺跡（吉岡1996）、福島県新地町三貴地貝塚（福島県立博物館1988）、同県大熊町上平A・B遺跡（松本ほか2005、阿部ほか2006）などに類例があり、繩文時代後期初頭～前葉の綱取式（馬目1968）、南境式（伊東1967）に位置付けられる。これらの類例と比較すると、本遺跡から出土したF～N類の土器群は、宮城県南部～福島県中通り・浜通りに分布している綱取式の特徴に類似している。綱取式は、近年の研究では、綱取I式と綱取II式に区分され、それぞれの変遷案が検討されている（馬目1968、押山2002、本間1990・2008など）。これらの変遷案を参考にすると、口縁部のC字状・ノ字状の単位文が貼付手法となるF・G・I類は綱取I式～綱取II式古段階、ジグザグ文を施すJ類、盲孔・沈線による文様を主体とするK・L類は綱取II式古段階以降、多条沈線を施すM類は綱取II式中～新段階におおむね相当すると考えられる。この他、H類の鎖状隆帯を付す土器やI類のボタン状貼付文を付す土器については、小破片のため不明な点が多いが、概ね綱取II式古段階前後のものと考えられる。

以上の検討により、今回の谷原遺跡第1次調査で出土した縄文土器の年代は、おおむね繩文時代中期末葉～後期前葉のものと考えられ、隣接する調査区（第2次調査/E・F区 第4図参照）で出土した土器群とほぼ同様の年代幅におさまる。したがって、今回の調査区で出土した縄文土器は、谷原遺跡第2次調査で検出された環状集落内で使用された土器群とみてよいだろう。

## 2. 土師器・須恵器

### (1) 土師器

土師器は 1,015 点（約 9,770g・うちロクロ土師器 779 点）出土し、このうち、34 点を図示した。出土器種は壺・高台付壺・甕である。出土地点の内訳は、遺構出土 551 点（5,095g）、遺物包含層（基本層Ⅲ～V 層）出土 431 点（4,500g）、遺構外出土 33 点（175g）である。以下、非ロクロ土師器・ロクロ土師器に分け、その特徴について示す。

#### ①非ロクロ土師器

非ロクロ成形の土師器は 236 点出土した。出土器種は壺・甕である。いずれも破片資料で、全体の器形を復元できるものはない。このうち、図示できたものは、壺 2 点・甕 2 点である。

**【壺】** 壺は 19 点出土し、このうち、口縁部資料 1 点、胴部～底部資料 1 点を図示した。口縁部資料（第 65 図 2）は、内外面にヨコナデを施す。胴部～底部資料（第 65 図 1）は胴部下半に稜を形成する壺で、外面にヘラ削り、内面にヘラミガキ・黒色処理を施すものである。

**【甕】** 甕は 217 点出土し、このうち、口縁部資料（第 65 図 3）と底部資料（第 65 図 4）を図示した。口縁部資料は、口縁部の内外面にヨコナデ、頸部の外面にハケメ・内面にヘラナデを施す。底部資料は磨滅のため調整技法は不明である。

#### ②ロクロ土師器

ロクロ成形の土師器は 779 点出土した。出土器種は壺・高台付壺・甕、赤焼土器<sup>(註1)</sup>の壺である。このうち、図示できたものは壺 18 点・甕 12 点である。

##### 【壺】（第 65 図 5～22）

壺は 329 点出土（うち赤焼土器 162 点）し、このうち 18 点を図示した。壺は内面に黒色処理・ヘラミガキを施したもの（第 65 図 5～17）と非内黒処理のもの（赤焼土器）（第 65 図 18～22）に分けられる。

内黒処理の壺は、器形が推定できるものはいずれも底部から外方に直線的に立ち上がる形態のものである（第 65 図 5～8）。底部の切り離し技法は、回転糸切り無調整（第 65 図 9・11・13・14・17）、切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整（第 65 図 5・16）・回転ヘラ削り再調整（第 65 図 10・12・15）がある。胴部下端の調整については、回転ヘラ削りを施すもの（第 65 図 15）、手持ちヘラ削りを施すもの（第 65 図 5・9・11）、調整を施さないもの（第 65 図 10・12～14・16・17）がある。

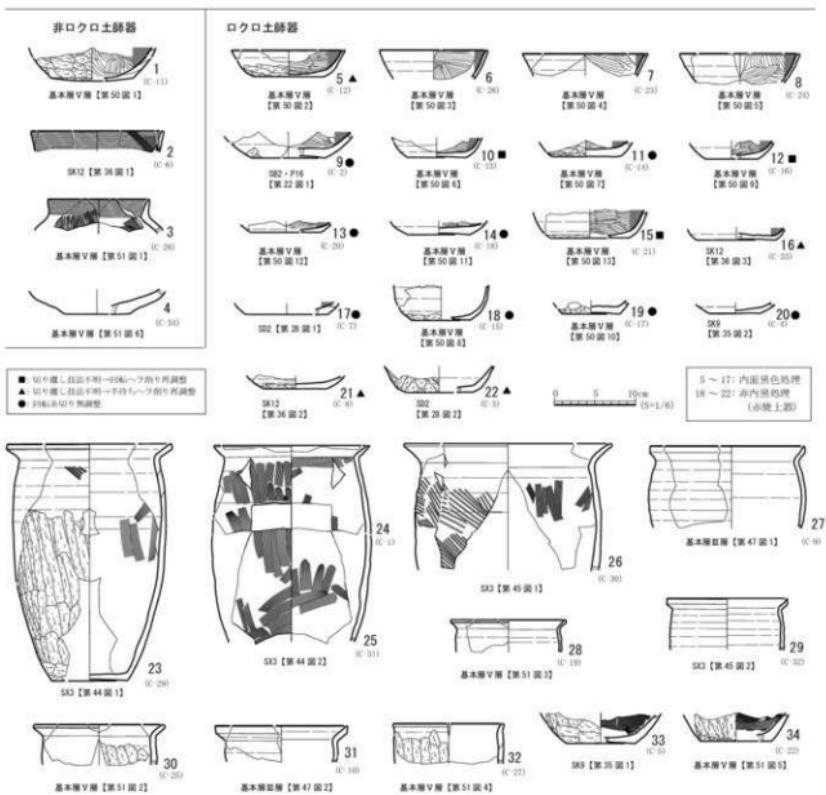
非内黒処理のもの（赤焼土器）は、すべて破片資料で器形が復元できるものはない。底部の切り離し技法には、回転糸切り無調整（第 65 図 18～20）と切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整（第 65 図 21・22）がある。胴部下端の調整については、手持ちヘラ削りを施すもの（第 65 図 18・19・21・22）と施さないものがある（第 65 図 20）。

##### 【高台付壺】

高台付壺は 5 点出土した（うち 2 点は壺部の内面に黒色処理）。小破片のため、図示できたものはない。

##### 【甕】（第 65 図 23～34）

甕は 445 点出土し、このうち 12 点を図示した。口径約 20cm 以上のものと口径 16cm 以下のものに大きく分けられる。口縁部～頸部の形態は、頸部にくびれを持つもの（第 65 図 23～31）が主体で、この他に頸部から直線的に立ち上がるもの（第 65 図 32）も認められた。外面の調整はロクロナデ後、胴部下半にヘラ削りを施すもの（第 65 図 23・33・34）やナデ調整を施すもの（第 65 図 24・25）、頸部下にヘラ削りを施すもの（第 65 図 32）があり、口径 20cm 以上の甕では外面に叩き目が残るもの（第 65 図 23・26）もある。内面の調整は、ナデ（第 65 図 23～26）・ヘラ削り（第 65 図 30）などである。



第65図 谷原遺跡（1次調査）出土 土師器集成図

## (2) 須恵器

須恵器は173点(約5,565g)出土し、このうち、34点を図示した。出土地点の内訳は、遺構出土87点(1,875g)、基本層出土73点(3,240g)、遺構外出土13点(450g)である。出土した器種は、壺・高台付壺・蓋・鉢・壺・瓶類・甕である。以下、器種ごとにその特徴について示す。

## 【壺】(第66図1~10)

壺は57点出土した。このうち10点を図示した。壺は、平底で、底部から口縁部までわずかに内湾しながら立ち上がる。口径に対し、器高が比較的低い皿状の器形を呈するもの(第66図2~5)が多いが、器高が高く塊状の器形のものもある(第66図1)。底部の切り離し技法は、回転ヘラ切り→手持ちヘラ削り再調整のもの(第66図3)、切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整のもの(第66図10)、切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整のもの(第66図1)、回転糸切り無調整のもの(第66図2・4・5・8・9)がある。胴部下端の調整については、手持ちヘラ削りを施すものが1点(第66図1)確認された。

## 【高台付坏】(第66図11~13)

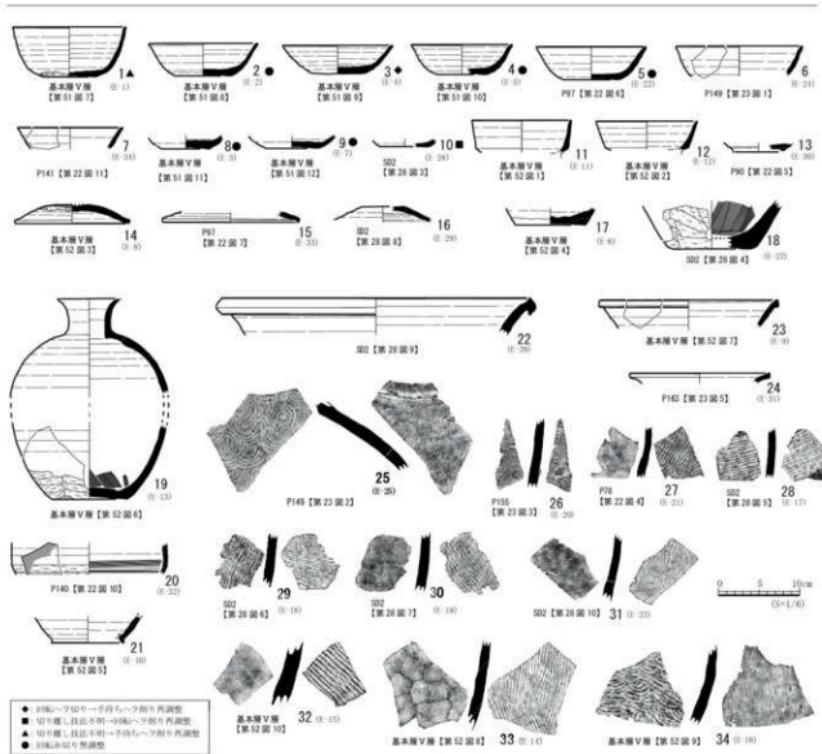
高台付坏は6点出土し、このうち3点を図示した。すべて破片資料のため、全体の器形を復元できるものはない。坏部資料(第66図11・12)は、底部から外上方に直線的に立ち上がり口縁部に至る形態のもので、底部と胴部の境に稜が認められる。底部資料(第66図13)は平底の底部に高台がつくもので、高台部は底部の周縁部につく。

## 【蓋】(第66図14~16)

蓋は7点出土し、このうち3点を図示した。全体の器形を復元できるものは少ない。第66図14・15は、器高が低く口縁端部が下方に折り返されるもので、第66図14の天井部には回転ヘラ削り・手持ちヘラ削りが施される。つまみ部は欠損しているため、その形状は不明である。なお、第66図14は、つまみ欠損部と内面の器面が使用により滑らかな状態になっており、硯等に転用された可能性がある。

## 【鉢】(第66図17~18)

鉢は2点出土し、すべて図示した。底部資料のため、全体の器形は不明である。第66図17は、底部切り離し技法が回転系切り無調整である。第66図18は、外面にヘラ削り、内面にナデを施している。



第66図 谷原遺跡(1次調査)出土須恵器集成図

### 【壺・瓶類】(第66図19~21)

壺・瓶類は11点出土し、このうち3点を図示した。第66図19は、平底で、胴部中位に最大径をもつ球形の胴部に、比較的短い頸部が付く形態の壺である。頸部の形態は頸部上半で外反し口縁部に至る。外面の胴部下端に手持ちヘラ削り、内面の底部付近にナデを施している。第66図20は瓶類の胴部資料で、胴部外面下位に回転ヘラ削り、内面にカキ目を施す。フラスコ瓶または長頸瓶の破片の可能性がある。胎土は密で灰白色を呈し、搬入品の可能性が高い。第66図21は瓶類の底部資料で高台がつく。外面には自然軸がかかる。長頸瓶の破片の可能性がある。

### 【甕】(第66図22~34)

甕は90点出土し、このうち13点を図示した。出土した甕は口縁部資料と胴部資料のみであり、全体の器形を復元できるものはない。口縁部資料(第66図22~24)については、口縁端部は上下方向につまみ出すもの(第66図22・23)、口縁端部を上方につまみ出すもの(第66図24)がある。胴部資料(第66図25~34)については、外面平行タタキ・内面同心円当て具痕を残すもの(第66図25・34)、外面平行タタキ・内面平行状の当て具痕を残すもの(第66図28・29)、外面平行タタキ・内面の当て具痕をナデ消すもの(第66図26・27・30~33)がある。

## (3) 土師器・須恵器の所属時期

今回の調査では、各種遺構や遺物包含層(基本層III~V層)などから土師器・須恵器が一定量出土している。しかしながら、遺構出土遺物のほとんどは周辺から流入したものや、中世以降と考えられる遺構から出土したものが多い。また、遺物包含層出土遺物についても、その出土状況から、一括遺物として判断できる資料は少なく、破片資料が多い。したがって、ここでは、比較的器形が復元できたロクロ成形の土師器と須恵器について、それぞれの個別の特徴から、おおよその年代について検討を加えることとする。

### 【ロクロ土師器の年代】

今回出土したロクロ成形の土師器は、形態的特徴や製作技法から表杉ノ入式(氏家1957)の範疇に含まれる。表杉ノ入式は、平安時代全般に対応するものと考えられており、多賀城周辺で出土している土師器坏類の様相からいくつかの段階に細分されている(白鳥1980・1982、加藤1989、柳澤1994、村田1994・1995)。これらの先行研究を参考し、今回出土した土師器の年代について検討を行う。

内黒処理の坏(第65図5~17)のうち、器形が復元できた第65図5の坏は、口径14.0cm・底径8.6cm・器高3.3cmで、口径に対し底径が比較的大きく(底径/口径=0.6前後)、器高が低い皿形(器高/口径=0.23)の器形である。調整は手持ちヘラ削り再調整、胴部下端に手持ちヘラ削りを施す。同様の特徴を有する土器は、山元町日向遺跡SI5堅穴住居跡(山田ほか2015)、亘理町堀の内遺跡SK42土坑(亘理町教委1997)、宮前遺跡20号住居跡(丹羽1983)に類例があり、8世紀末~9世紀前半頃に位置付けられる。この他の坏については、口縁部資料または底部資料で、全体の器形が不明なため詳細な年代の位置付けが難しいが、法量や調整技法の特徴から、概ね9世紀~10世紀代のものとみられる。

赤焼土器の坏は、図示できたものはすべて底部資料である。その特徴は、底径が6cm前後のもの(第65図20)と、7~8cm前後のもの(第65図18・19・21・22)に分けられる。このうち、後者の坏については、いずれも胴部下端に手持ちヘラ削りを施している(第65図18・19・21・22)。底部の調整は、回転糸切り無調整のもの(18~20)、手持ちヘラ削り再調整のもの(21・22)がある。いずれも底部資料で、全体の器形が不明なため、詳細な年代を検討することは難しいが、同様の特徴を有する赤焼土器坏は、谷原遺跡周辺に位置する日

向遺跡（山田ほか 2015）、涌沢遺跡（初鹿野ほか 2015）、石垣遺跡（山田ほか 2014）の調査でも出土している。これら周辺の調査事例との比較から、今回出土した赤焼土器坏の年代は概ね 9 世紀後半～10 世紀後半の幅におさまるものと捉えておきたい。

この他、SX3 出土の外面に成形時のタタキ目が残る長胴の甕（第 65 図 24・26）は、8 世紀末～9 世紀中頃に位置付けられる（村田 2007）（註2）。

#### 【須恵器の年代】

須恵器坏のうち全体の器形が復元できるものとして第 66 図 1～5 の坏がある。

このうち、第 66 図 3～5 の坏は、底径/口径比が 0.5、器高/口径比が 0.30 以下の皿状の器形で、底部の調整は回転ヘラ切り→手持ちヘラ削り（第 66 図 3）、回転糸切り無調整（第 66 図 4・5）である。同様の特徴を有するものは、山元町北名生東窯跡（岩見ほか 1991、東北古代土器研究会 2008）に類例があり、8 世紀末～9 世紀前葉に位置付けられる。第 66 図 11・12 の高台付坏、第 66 図 14 の蓋も同様の年代と考えられる。

第 66 図 1 の坏は、比較的器高の高い塊状の器形で胴部下端に手持ちヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り再調整を施す。第 66 図 2 の坏は、底径/口径比 0.49、器高/口径比 0.30 の皿状の器形で、底部は回転糸切り無調整である。これらは、山元町涌沢遺跡 SKI24・127 土坑（初鹿野ほか 2015）などに類例があり、9 世紀中葉頃とみられる。第 66 図 19 の壺もこれらに近い年代の可能性がある。

この他、内面に同心円当て具痕を残す甕（第 66 図 25・34）は、周辺の調査事例から 7～8 世紀前半頃のものとみておきたい。

### 3. 中世陶器（第 67 図）

中世陶器は、4 点（400g）出土し、すべて図示した。中世陶器には、鉢（第 67 図 1）・壺の可能性がある破片（第 67 図 2）・甕（第 67 図 3・4）がある。その産地の内訳は、胎土や焼成の特徴から、在地の宮城県白石市に所在する「白石窯」産と推定されるものが 2 点（第 67 図 2・3）、在地産が 2 点（第 67 図 1・4）である。

白石窯は、大きく 4 つの支群（東北支群・市ノ沢支群・黒森支群・一本杉支群）からなっており、このうち、本格的な発掘調査が実施されたのは一本杉窯跡群（菊地・早川 1996）のみである。一本杉窯跡の調査では、受け口状の口縁をもつ甕・大型壺のほか、短頸壺・無頸壺・細口壺・小壺・仏花瓶・捕鉢・皿・火鉢などが出土しており、その年代については、甕・壺の口縁部の形態から、13 世紀後半～14 世紀前半頃と推定されている。今回の谷原遺跡の 1 次調査で出土した「白石窯」産の中世陶器の所属時期については、白石市一本杉窯跡の調査成果から、概ね 13 世紀後半～14 世紀前半頃と推定される。その他の在地産の中世陶器は、すべて胴部資料であるため、その詳細な年代を検討することは難しいことから、その年代については概ね中世としておきたい。



第67図 谷原遺跡（1次調査）出土中世陶器集成図

#### 4. 鉄製品・製鉄関連遺物

鉄製品は1点(15g)、製鉄関連遺物は鉄滓1点(25g)出土した。鉄製品は破片資料のため、器種・用途ともに不明である。鉄製品・鉄滓ともに詳細な時期は不明であるが、出土遺構・層位等の関係から、概ね古代～中世以降のものと推定される。

#### 5. 石器 (第68図)

石器は73点(1776.9g)出土した。その

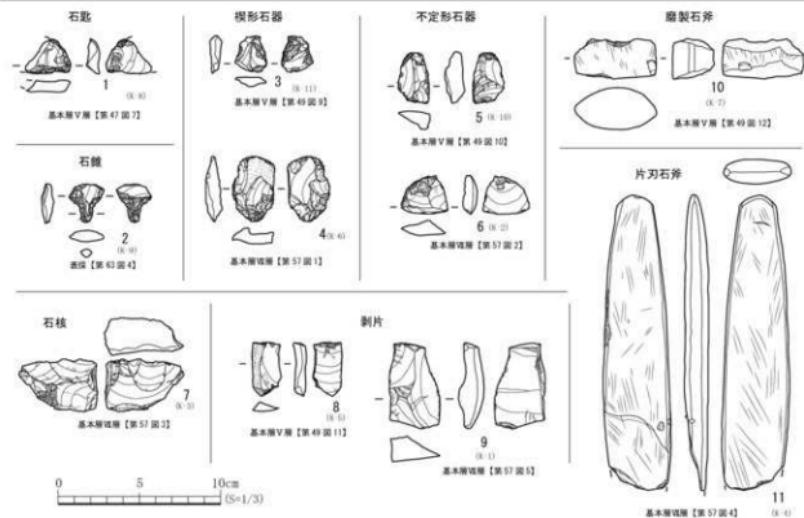
内訳は、石匙1点、石錐1点、楔形石器2点、不定形石器2点、片刃石斧1点、磨製石斧1点、石核1点、剥片が64点で、このうち11点を図示した(第68図)。石器の石材は珪質頁岩、頁岩、砂岩、凝灰岩、珪質凝灰岩、玉髓、粘板岩、泥岩、安山岩、黒曜石、輕石である(第13表)。出土地点の内訳は、遺構出土16点(235.1g)、遺物包含層(基本層Ⅲ～V層)出土47点(1,472.2g)、遺構外出土10点(69.6g)である(第12表)。これらの石器は、縄文土器の年代から、縄文時代中期葉から後期

前葉頃に利用されたものと考えられる。

第13表 谷原遺跡(1次調査) 出土石器・石材組成

器種/石材	珪質 頁岩	頁岩	砂岩	凝灰岩	珪質 凝灰岩	玉髓	粘板岩	泥岩	安山岩	黑曜石	輕石	合計
石匙	1 (4.0)											1 (4.0)
石錐		1 (3.0)										1 (3.0)
楔形石器		1 (8.7)			1 (2.5)							2 (11.2)
不定形石器	1 (5.0)	1 (6.0)										2 (11.0)
片刃石斧						1 (159.8)						1 (159.8)
磨製石斧							1 (49.0)					1 (49.0)
石核						1 (285.0)						1 (285.0)
剥片	39 (389.7)	4 (124.0)	2 (226.6)	1 (128.0)		14 (97.4)			2 (155.5)	1 (1.7)	1 (182.7)	64 (1,472.2)
合計	41 (388.7)	7 (141.5)	2 (226.6)	3 (128.0)	2 (2.5)	15 (382.4)	1 (159.8)	1 (49.0)	1 (155.5)	1 (1.7)	1 (182.7)	1776.9

※上段の数値は出土点数、下段の内訳は遺物の件数を量(㌘)で示す



第68図 谷原遺跡(1次調査) 出土 石器集成図

## 第2節 検出遺構の特徴と時期

今回の調査で本調査を実施したA～D区で検出した遺構は、掘立柱建物跡6棟、溝跡3条、土坑16基、焼成遺構3基、柱穴・ビット167個（掘立柱建物跡を構成する柱穴も含む）である。これらの遺構からは、縄文土器、土師器（非クロロ成形・クロロ成形）、須恵器、中世陶器、鉄滓、鉄製品、石器が出土した。

ここでは、これらの遺構の特徴・出土遺物・重複関係等から、その時期・性格について検討する。

### 1. 今回の調査区（A～D区）で検出した各遺構の時期

#### （1）掘立柱建物跡、その他の柱穴・ビット

掘立柱建物跡は6棟（SB1～6）、建物として認定できなかったその他の柱穴・ビットは129個検出した。これらの柱穴・ビットの掘方規模は、「長軸40～60cm前後の隅丸方形・円形・楕円形を呈するもの」と「長軸20～30cm前後の円形・楕円形を呈するもの」に分けることができる。以下、それぞれの年代について検討する。

前者の柱穴には、A区西側に分布するSB1～5掘立柱建物跡を構成する柱穴が該当する。SB1・5は隅丸方形と円形・楕円形の柱穴、SB2はすべて隅丸方形の柱穴、SB3・4はすべて円形・楕円形の柱穴で構成される。これらの建物跡からは、年代を特定できる遺物は出土していないが、SB2ではクロロ成形の土師器が多く出土しており、坏類の特徴（底部切り離し技法が回転糸切り無調整のものが主体）から、SB2の年代は平安時代前半頃と考えられる。SB1・3においても、わずかではあるがクロロ成形の土師器が出土していることから、これらの年代についても概ね平安時代以降とみられる。SB4・5では遺物は出土していないが、柱穴の掘方の特徴がSB1～3と類似していることから、その所属時期はSB1～3に近い年代と推定される。以上のことから、SB1～5掘立柱建物跡は、概ね平安時代を中心とする年代が想定される。次に、これらの建物の重複関係をみてみると、SB2～4は重複関係にあり、SB2・4→SB3の新旧が確認されている。併せて、この3者の建物は、ほぼ同位置に存在し、同時存在が難しい位置関係にある。そこで、SB2とSB3の新旧関係（SB2→SB3）を参考にすると、掘方が「隅丸方形の柱穴の建物（SB2）」→「円形・楕円形の柱穴の建物（SB3）」の順で建物が変遷したことが推定され、SB2～4の建物は、平安時代の中で、SB2（柱穴：隅丸方形）→SB4（柱穴：円形・楕円形）→SB3（柱穴：円形・楕円形）の順に変遷した可能性が高い。

後者については、A区東側・B区東側に分布する。SB6についても、この柱穴で構成される。これらの柱穴・ビットは、B区北側に隣接する谷原遺跡2次調査のE・F区で確認されている中世の掘立柱建物跡の柱穴と規模・形状の面で類似する。今回の調査で確認された柱穴・ビットからは中世の遺物は出土していないが、隣接する調査区の事例から、概ね中世の遺構とみておきたい。

#### （2）溝跡

溝跡は3条（SD1～3）確認した。SD1溝跡は隅丸方形のビット（P166）と重複し、これより新しい遺構であることが確認されている。遺物は、クロロ成形の内黒処理の土師器壺・非内黒処理の土師器壺（赤焼土器）が出土しており、概ね平安時代以降のものと考えられる。SD2溝跡は上幅360～422cm・深さ110cmの大溝で、人為的に埋め戻された堆積土1層から内黒処理の土師器壺、底面付近の6層からクロロ成形の内黒処理の土師器壺・非内黒処理の土師器壺（赤焼土器）などが出土している。以上の点から、SD2溝跡は平安時代以降につくられ、その後、中世以前に人為的に埋め戻された溝跡とみられる。なお、SD1溝跡とSD2溝跡は、その位置関係や方向から、同時期の溝跡である可能性が考えられる。SD3溝跡はクロロ成形の土師器壺破片が出土していることから、平安時代以降の遺構と考えられる。

### (3) 土坑

土坑は16基(SK1～16)確認した。このうち、遺構に伴う遺物が出土したと判断された遺構は少ない。そこで、それぞれの土坑から出土した遺物の中で最も時代が新しいものを抽出し、その年代を推定することとする。

**SK6・7**では縄文土器が出土していることから縄文時代以降の遺構、**SK1～3・5・9・10・12**ではロクロ成形の土師器が出土していることから平安時代以降の遺構と推定される。**SK4**では堆積土1層からロクロ成形の土師器2点・須恵器1点が出土しているが、層位的には1層上面からの出土である。その他の出土遺物は、縄文土器・石器のみで、これらの遺物は土坑の底面ないしその付近の層から出土しており、SK4に伴う遺物は縄文土器と考えられる。その所属時期は、縄文土器(深鉢K類)が出土していることから縄文時代後期初頭～前葉頃とみられる。**SK8**では隆帶・盲孔・沈線により文様が施文された縄文土器(深鉢L類)、**SK13**では縄文土器(深鉢D類)、**SK14**では底面付近から多条沈線による文様が施文された縄文土器(深鉢M類)と沈線と盲孔により施文された縄文土器(深鉢K類)、**SK15**ではジグザグ文を持つ縄文土器(深鉢J類)が出土している。このことから、SK13は縄文時代後期初頭以降、SK8・14・15は縄文時代後期前葉頃とみられる。**SK16**では、堆積土から縄文土器深鉢が出土したが、無文のため具体的な時期の特定は難しい。縄文時代以降の遺構とみておきたい。

SK11については出土遺物がなく、かつ、他の遺構との重複関係がないため、所属時期は不明である。

### (4) 焼成遺構

焼成遺構は3基(SX1～3)確認した。**SX1**は掘方のある焼成遺構で、円形のビット(P122)と重複し、これより古い遺構であることが確認されている。遺物は、掘方埋土から縄文土器深鉢破片・石器剥片が出土しており、概ね縄文時代以降のものと考えられる。**SX2**は焼面のみの焼成遺構で、焼面上面からロクロ成形の土師器が出土しており、平安時代以降のものとみられる。**SX3**は掘方のある焼成遺構で、ロクロ成形の土師器甕が横位に据えられた状態で出土しており、遺物の特徴から8世紀末～9世紀中頃の遺構と考えられる。

### (5)まとめ

以上の検討の結果をまとめると、今回の調査で検出した主な遺構の所属時期は大きく縄文時代後期前葉、平安時代前半、中世の遺構に分けることができた(第14表)。

第14表 谷原遺跡A～D区(1次調査) 主要遺構の所属時期

所属時期	遺構番号
縄文時代後期初頭～前葉	SK4・8・13～15 土坑
(縄文時代以降)	SK6・7・16 土坑/SX1 焼成遺構
平安時代	SB1～5 挖立柱建物跡、SD1・2溝跡、SX3 焼成遺構
(平安時代以降)	SD3溝跡、SK1～3・5・9・10・12 土坑、SX2 焼成遺構
中世	SB6 挖立柱建物跡、その他のビット
(時期不明)	SK11 土坑

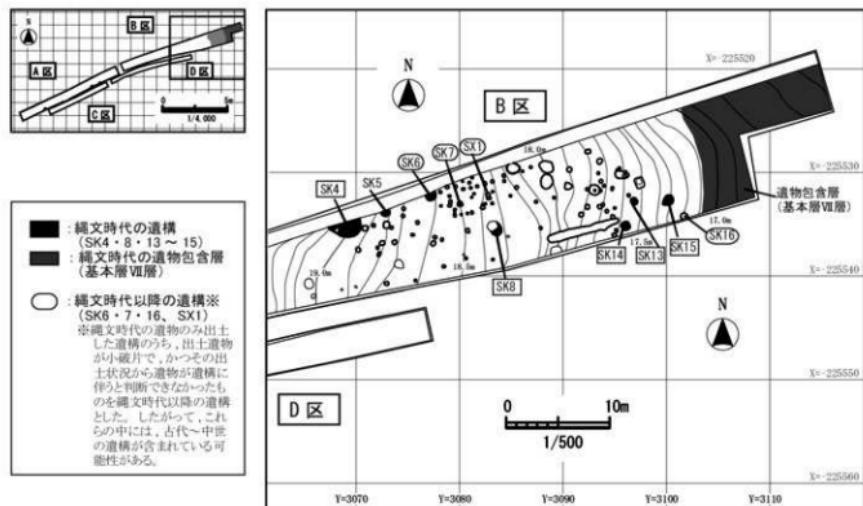
## 2. 各時代の遺構の特徴と変遷

谷原遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵東側の谷原川と山寺川に挟まれた標高17~20mの中低段丘上段の緩やかな平坦地に立地する。本遺跡は、平成19・20年度の分布調査で発見されて以降、本発掘調査・確認調査を含めると、これまで8度にわたる発掘調査が実施されている(第4図・第2表、平成28年3月現在)。今回の報告は、平成20年度に実施された1次調査(A~D区)にあたる。1次調査の調査原因は、道路工事に伴うものであり、主に縄文時代後期初頭前後、平安時代、中世の遺構が確認された。しかしながら、本調査を実施した範囲は、東西に細長い調査区であったため、遺跡の全容を把握するには至っていない。したがって、本項では、各時代の遺構について、その概要のみをまとめることとする。

### (1) 縄文時代の遺構

今回の調査区(A~D区)で発見された遺構のうち、縄文時代の遺構として認定できた遺構は土坑5基(SK4・8・13~15)・遺物包含層(基本層VII層)である(第69図)。これらの遺構はB区東半に分布しており、出土遺物の特徴から、概ね縄文時代後期初頭前後のものとみられる。このうち、SK15土坑については集石遺構の可能性があり、これ以外の土坑については用途不明である。遺物包含層は、B区東端の地形的に低い地点に形成されており、当時の捨て場であったと考えられる。

以上のように、1次調査の範囲内においては、縄文時代の遺構はB区東半にまとまって分布していることから、当時の生活の場がB区周辺にあったと推定される(註3)。



第69図 谷原遺跡(1次調査)縄文時代の遺構配置図

## (2) 平安時代の遺構

今回の調査区（A～D 区）において確認した平安時代に所属すると考えられる遺構は、掘立柱建物跡 5 棟（SB1～5）、溝跡 2 条（SD1・2）、焼成遺構 1 基（SX3）、遺物包含層（基本層V層）である。掘立柱建物跡と溝跡は今回の調査箇所の西側（A 区）、焼成遺構・遺物包含層は東端（B 区東端）に分布する。

掘立柱建物跡（SB1～5）は出土遺物の特徴から、概ね平安時代前半のものとみられ、柱穴の掘方には隅丸方形のものと円形・楕円形のものがある。建物の規模は 4 間×2 間前後のものが主体で、その重複関係から、SB2（柱穴：隅丸方形）→SB4（柱穴：円形・楕円形）→SB3（柱穴：円形・楕円形）の順に変遷したとみられる。また、SB1 と SB2、SB4 と SB5 はそれぞれ棟方向が類似することから、同時期の建物である可能性が考えられる。なお、同様の特徴を持つ平安時代の掘立柱建物跡は、谷原遺跡の北に位置する館の内遺跡（引地 2002）でも確認されている。

SD1・2 溝跡は、掘立柱建物群の東側に位置する。これらの遺構からは、年代を決定しうる遺物が出土していない。しかしながら、前述の掘立柱建物と方向が揃うことから、建物群と同時期の遺構である可能性が高い。特に SD2 溝跡については上幅 3m を超える大溝であり、SD2 溝跡の西側の建物群と東側の空間を区画する溝跡であった可能性がある。

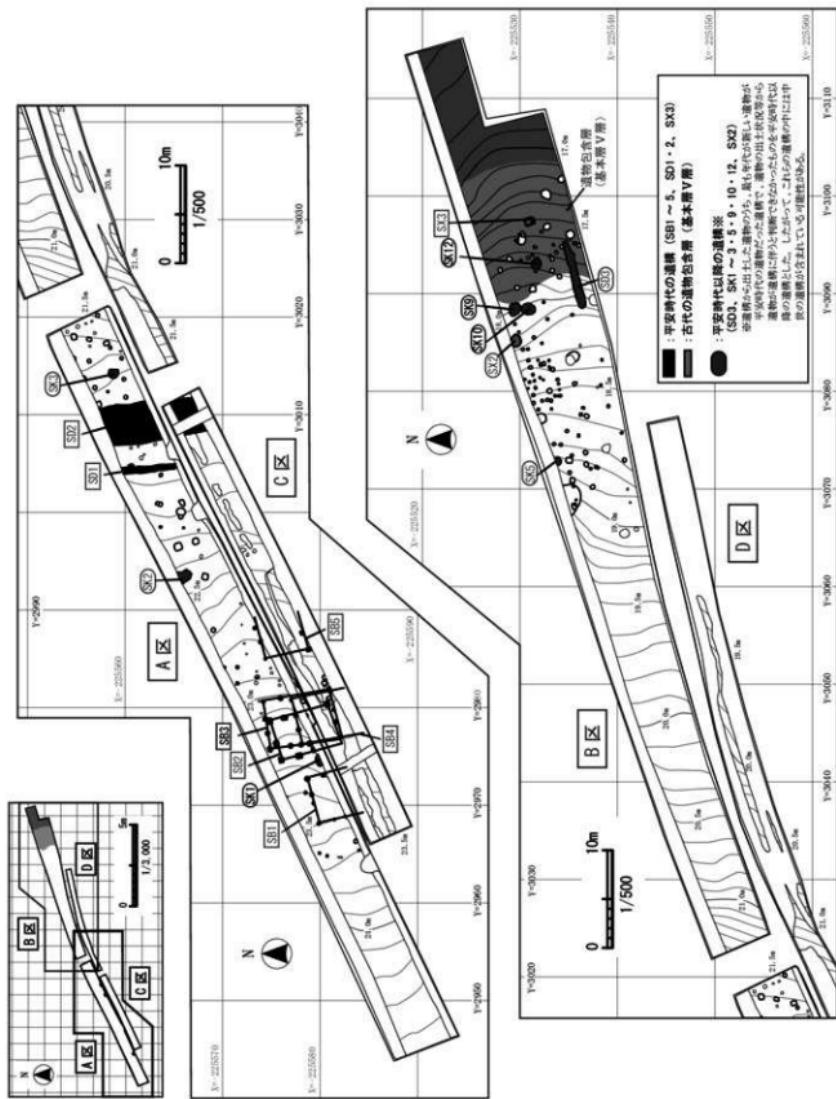
この建物群と溝跡の東側には遺構が存在しない空間があり、そのさらに東端の地形的に低い地点に至ると、ほぼ同時期の焼成遺構（SX3）と遺物包含層が分布する。したがって、今回の調査区においては、西側に掘立柱建物群と区画溝の可能性のある溝跡、中央に空間、東側に捨て場とみられる遺物包含層、焼成遺構が分布した集落構成であったと考えられる。

なお、その後の谷原遺跡の調査では、1 次調査 B 区周辺の東側地区一帯（2 次調査・7 次調査）で古代の堅穴住居跡・土坑などが発見され、陶器や墨書き土器などが出土しており（註 4）、また、掘立柱建物跡と溝跡が確認された A 区周辺地区でも柱穴の掘方が方形を基調とする掘立柱建物跡などが確認されている（4 次調査・5 次調査）。これらの調査では、奈良時代まで遡る可能性のある遺構も含まれており、谷原遺跡の古代集落の様相については、周辺の調査事例も含めて検討する必要がある。今後の報告を待って、再度検討することとしたい。

## (3) 中世の遺構

今回の調査区（A～D 区）において確認した中世に所属すると考えられる遺構には、A 区の SB6 掘立柱建物跡、調査区東側（B 区）一帯で確認された柱穴・ビット群がある。これらの遺構からは中世の遺物は出土していないが、B 区東端に形成された基本層Ⅲ層から中世陶器が出土したことや周辺の調査事例等から、中世の遺構と判断した。今回の調査区は道路工事に伴うもので細長い調査区だったため、SB6 以外の建物を抽出するまでに至っていない。

その後の調査では、B 区北側に位置する調査区（2 次調査/E・F 区）で、中世の掘立柱建物跡が多数発見されている（註 5）。また、A 区周辺の調査区（4～6 次調査）においても、中世とみられる遺構が確認されており、谷原遺跡の一帯には中世の集落が広がっていたと考えられる。したがって、今回の調査区で発見された建物や柱穴・ビット群については、谷原遺跡一帯に広がる中世の集落の一部を構成する遺構であったとみられる。



第70図 谷原遺跡（1次調査）平安時代の遺構配置図

### 第3節 まとめ

谷原遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵東側の谷原川と山寺川に挟まれた標高17~20mの中低段丘上段の緩やかな平坦地に立地する。今回の調査（1次調査）で検出した遺構は、掘立柱建物跡6棟、溝跡3条、土坑16基、焼成遺構3基、柱穴・ビット167個（掘立柱建物跡を構成する柱穴も含む）である。これらの遺構からは、縄文土器、土師器（非クロコ成形・クロコ成形）、須恵器、中世陶器、鉄滓、鉄製品、石器が出土した。

以下、各時代の遺構・遺物について、その要点をまとめる。

1. 縄文時代の遺構には、土坑5基（SK4・8・13~15）・遺物包含層（基本層VII層）がある。これらの遺構はB区東半に分布しており、出土遺物の特徴から、概ね縄文時代後期初頭前後のものとみられる。
2. 平安時代の遺構には、掘立柱建物跡5棟（SB1~5）、溝跡2条（SD1・2）、焼成遺構1基（SX3）、遺物包含層（基本層V層）がある。掘立柱建物跡と溝跡は調査区西側（A区）、焼成遺構・遺物包含層は東端（B区東端）に分布しており、出土遺物の特徴から、概ね平安時代前半のものとみられる。
3. 中世の遺構には、掘立柱建物跡1棟（SB6）、その他の柱穴・ビット多数がある。
4. この他、時期不明の遺構が多数残されているが、これらの多くは縄文時代・平安時代・中世のいずれかの時期に属する可能性が考えられる。

#### （註）

- 1) 宮城県内において、平安時代のロクロ成形の内黒処理されていない土師器について、「赤燒土器」・「須恵系土器」等の名称で呼ばれる場合がある（桑原 1976・小井川 1984）。本稿では、原則として内黒処理・非内黒処理のものすべてを土師器として分類したが、両者を区別する際に「赤燒土器」の名称を使用することとした。
- 2) 村田晃一氏によれば、ロクロ成形の土師器甕の中で、外面の上半にロクロ成形段階前のタタキが認められるロクロ長胴甕は、8世紀末から9世紀中頃まで認められ、時間幅がある程度限定できると指摘されている。
- 3) 谷原遺跡の2次調査（E～L区）では、縄文時代中期末～後期前葉の環状集落が発見されている。この環状集落が発見された地点は、B区（1次調査）の北側の隣接地に位置しており、1次調査で発見された縄文時代の遺構とほぼ同時期の集落と考えられる。このことから、1次調査で発見された縄文時代の遺構は、この環状集落に関連する遺構であったとみられる（環状集落の詳細については、山元町文化財調査報告書第13集を参照）。
- 4) 谷原遺跡の2次調査（E区）では、古代の円面鏡4点、風字鏡1点が出土している（山元町文化財調査報告書第13集参照）。
- 5) 谷原遺跡の2次調査（E・F区）では、中世の掘立柱建物跡が150棟以上検出されている（山元町文化財調査報告書第13集参照）。

## 引用・参考文献

- 相原淳一 2008 「阿武隈川下流域における繩文時代後期初頭の土器編年研究序説」『藏王東麓の郷土史-中橋彰吾先生追悼論文集-』
- 青山博樹ほか 2000 「宮城県山元町合戸原古墳群の測量調査」『宮城考古学』第2号
- 吉者博典 1994 「多賀城跡周辺における須恵器製作技法の変化」『古代の土器研究-律令の土器様式の西・東6 繩恵器の製作技法とその転換』
- 阿部知己ほか 2006 「上平A遺跡・上平B遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告書45』福島県文化財調査報告書第435集
- 飯村均 2009 「中世靴羽のムラとマチ」『考古学が描く列島史』東京大学出版社
- 飯村均 2015 「東北中世史叢書8 中世奥羽の考古学」高志書院
- 石黒伸一郎 2005 「山元町の板碑と藏王町の中世石塔」『宮城考古学』第7号
- 伊東信雄 1957 「古代-繩文文化の変遷」『宮城県史』14
- 伊藤晶文 2006 「山元町における歴史時代の海岸線変化」『鹿児島大学教育学部紀要自然科学編』57
- 岩見和泰・佐藤憲司 1991 「合戦跡遺跡」『合戦原遺跡出土品』官城県文化財調査報告書第140集
- 氏家和典 1967 「東北土師器の形状分類とその編年」『歴史』14
- 岡田茂弘・桑原治郎 1973 「多賀城跡周辺における古代地形土器の変遷」『研究紀要!』官城県多賀城跡調査研究所
- 小山正忠・竹原秀雄編 1973 「新故標準土器軸」2010年版
- 押山雄三 2002 「東北地方南部における繩文後期前葉の土器」『第15回繩文セミナー-後期前半の再検討』
- 巣鴨一郎 1971 「合戦原古墳群跡」『山元町誌』
- 加藤道男 1984 「二階敷跡」『東北自動車道遺跡調査報告書IX』官城県文化財調査報告書第99集
- 加藤道男 1989 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢II』
- 菊池逸夫 1994 「一本杉跡群」官城県文化財調査報告書第172集
- 菊池逸夫 2003 「一本杉窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
- 庄田昌 1995 「孤塚遺跡」山元町在住時調査報告書
- 桑原忠雄 1976 「須恵器土器について」『東北考古学諸問題』東北考古学会
- 小井川和夫 1984 「いかゆる赤土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第10卷
- 佐藤洋作ほか 1987 「六区段遺跡Ⅲ」仙台市文化財調査報告書第102集
- 佐々久・吉間泰治・氏家和典 1971 「戸井沢横穴古墳群発掘調査報告書」『山元町誌』
- 白鳥良一 1980 「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要VIII』官城県多賀城跡調査研究所
- 白鳥良一 1982 「土器」『多賀城跡考古学全般』第四回
- 紫桃正隆 1974 「史料 仙台領内古墳・館」第四回
- 志間泰治 1956 「宮城県丘陵部における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』1
- 志間泰治 1975 「丘陵の古墳」
- 志間泰治 2007 「糞埋立-歴史を振り起こす」
- 鈴木真一郎・真山樹 1988 「北日ノ崎跡」田村町文化財調査報告書第6集
- 鈴木雅 2011 「西山遺跡」藏王町文化財調査報告書第10集
- 間関司 2004 「北條塚遺跡」山元町文化財調査報告書第3集
- 仙臺叢書出版会 1893 「仙台叢書 封内風土記 卷ノ九」
- 仙臺叢書刊行会 1923 「仙臺古城記」『古市叢書』第4巻
- 高橋義行 2004 「大貝留跡」利府町文化財調査報告書第12集
- 千葉正義 1993 「孤塚遺跡」『孤塚遺跡』官城県文化財調査報告書第157集
- 辻秀人 2015 「山元町の復興調査会から古代東北の歴史を考える」『古代国家形成期の地域社会-山元町の調査から』平成27年度宮城県考古学会総会・研究発表会資料
- 東北古代土器研究会 2003 「研究報告2 東北古代土器集成-古墳後期-奈良・集落編-宮城」
- 東北古代土器研究会 2008 「研究報告3 東北古代土器集成-須恵器・窑跡編-陸奥」
- 東北中世考古学会編 2001 「東北中世考古学叢書2 聖立と豊穴-中世遺構論の課題」高志書院
- 丹羽茂次 1981 「大木式土器」『繩文文化の研究』4 櫻山閣
- 丹羽茂次 1982 「平生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VII』官城県文化財調査報告書第92集
- 丹羽茂次 1983 「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群-宮前遺跡』官城県文化財調査報告書第93集
- 丹羽茂次 1985 「今熊野遺跡」『今熊野遺跡-一本杉跡・馬越石塚』官城県文化財調査報告書第104集
- 丹羽茂次 1989 「中太木式土器様式」『蔭丈大観-大観大観』草創期・早期・前期
- 芳賀寿幸 1983 「向山遺跡-考古資料」『蔭丈町史 資料編』1
- 初鹿野博之 2013a 「鹿の作遺跡」『山元町史 資料編』1
- 初鹿野博之 2013b 「涌沢遺跡」『发掘された日本列島2013 新発見考古学速報』文化庁
- 初鹿野博之 2013c 「涌沢遺跡」『新発見考古学速報』文化庁
- 初鹿野博之 2014 「宮城県山元町の作遺跡」『第40回古代城跡官街遺跡調査会資料集』
- 初鹿野博之 2015a 「熊の作遺跡と豆理郡南部の遺跡群」『第41回古代城跡官街遺跡調査会資料集』
- 初鹿野博之 2015b 「熊の作遺跡と豆理郡南部の遺跡群」『古代国家形成期の地域社会-山元町の調査から』平成27年度宮城県考古学会総会・研究発表会資料
- 初鹿野博之 2016c 「熊の作遺跡」『発掘された日本列島2015 新発見考古学速報』文化庁
- 初鹿野博之・三浦秋可 2015 「涌沢遺跡」『常磐自動車道建設間連通調査報告書II』官城県文化財調査報告書第239集
- 引地弘行 2002 「鏡の内遺跡」『名生原遺跡』第39回古代城跡官街遺跡調査会資料集
- 福島県立博物館 1988 「三貫地貝塚」福島県立博物館調査報告17
- 福島考古学学会中近世部会編 2000 「福島県考古学会中近世部会平成12年度研究セミナー-東北地方南部における中近世集落の謎問題」
- 福島雅廣(主) 1988 「須光寺跡」『国道113号バイパス道路調査報告IV』福島県文化財調査報告書第192集
- 福島雅廣(主) 1996 「越田と遺跡」『三春ダム周辺遺跡発掘調査報告8』福島県文化財調査報告書第322集
- 藤田至則・加納博・流汎文教・八島隆一 1988 「角田地域の地質」地城地質研究報告 地質研究
- 藤沼邦彦・千葉孝弟 1992 「宮城県の中世窯」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
- 藤沼邦彦 2010 「水沼窯・伊豆沼窯・三木本窯・白石窯」『古陶の語-諸窯のやまと-の一大古窯とその周辺-』
- 藤本辰子・松本秀明 2012 「阿武隈川付近における前堀型の分類とその形成時期に関する内検討」『人間情報学研究』第17巻
- 古川一郎・鈴木真一郎・大和幸生 1991 「鏡南園遺跡」『鏡南園遺跡(まきなんえん)』官城県文化財調査報告書第144集
- 文化庁文化遺産調査会議編 2010 「発掘調査の手引き-集落遺跡発掘編」
- 文化庁文化遺産調査会議編 2010 「発掘調査の手引き-整理・報告書編」
- 本間宏 1990 「東北地方南端における繩文後期前葉土器群の変遷過程」『第4回繩文セミナーの会 繩文後期の諸問題』
- 本間宏 1994 「大木 10式の考え方」『しのぶ考古』10
- 本間宏 2008 「南境式・綱取土器」『絶対繩文土器』
- 佐本茂也 2005 「上平B遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告書41』福島県文化財調査報告書第428集
- 松本秀明 1984 「海岸平野にみられる岸塙列と元新世後期の海水準変動」『地理学論叢』57

- 馬日順一 1968 「瀬取貝塚第四地点発見の組之内 I 式土器の考察」『小名浜』  
森幸彦 2008 「大木 9・10 式土器」『絶賛繩文土器』
- 宮城県考古学会編 2010 「平成 22 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」  
宮城県考古学会編 2011 「平成 23 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」  
宮城県考古学会編 2012 「平成 24 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」  
宮城県考古学会編 2013 「平成 25 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」  
宮城県考古学会編 2014 「平成 26 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」  
宮城県考古学会編 2015 「平成 27 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」  
宮城県考古学会編 2016 「平成 28 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」  
宮城県企画部土地対策課編 1983 「土地分類基本調査 角田」  
宮城県史編さん委員会 1970 「利府領郷書立之覚」『宮城県史』32 資料編
- 村田晃一 1992 「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』  
村田晃一 1994 「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』  
村田晃一 1995 「宮城郡における 10 世紀前後の土器」『福島考古』第 36 号  
村田晃一 2007 「宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15-18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
- 柳澤和也 1994 「東北地方の施釉陶器」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東 3 施釉陶器—』  
山田隆博 2008 「企画展図録 犬理郡の古墳時代」『山元町歴史民俗資料館』
- 山田隆博・村上裕次・山口洋 2010 「北経塗調査」『山元町文化財調査報告書第 4 集』  
山田隆博・藤田祐・佐伯泰弓 2013 「北経塗調査」『山元町文化財調査報告書第 5 集』  
山田隆博・藤田祐・佐伯泰弓 2014 「的場塗跡」『山元町文化財調査報告書第 6 集』  
山田隆博・藤田祐 2014 「石垣遺跡」『山元町文化財調査報告書第 7 集』  
山田隆博・丹野修太 2014 「日向北道跡」『山元町文化財調査報告書第 8 集』  
山田隆博・藤田祐 2015 「日向塗跡」『山元町文化財調査報告書第 9 集』  
山田隆博・藤田祐・佐伯泰弓 2015 「中筋塗跡」『山元町文化財調査報告書第 10 集』  
山田隆博 2015a 「山元町中筋道路の津波痕跡」『宮城考古学』第 17 号  
山田隆博 2015b 「山元町の復興調査と合戦原遺跡の横穴墓群」『古代國家形成期の地域社会・山元町の調査から』平成 27 年度宮城県考古学会総会、研究発表会資料
- 山田隆博 2015c 「小平塗跡 I」『山元町文化財調査報告書第 11 集』  
山田隆博・藤田祐 2016 「谷原遺跡Ⅱ」『山元町文化財調査報告書第 13 集』  
山内清男 1937 「繩文土器型式の範例と大別」『先史考古学』1 卷 1 号  
山元町史編纂委員会編 1971 『山元町誌』  
山元町史編纂委員会編 1986 『中島貝塚』『山元町誌 二巻』  
吉岡恭平 1996 『下ノ内浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第 207 集  
吉野武 2015 「熊の作遺跡出土の木簡と墨書き土器」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』  
吉田泰幸 2003 「繩文時代における土製枕状耳飾の研究」『名古屋大学博物館報告』第 19 号  
吉田泰幸 2007 「福島県大日平遺跡出土の繩文土器と土製腕輪」『名古屋大学博物館報告』第 23 号  
渡邊義嗣 1917 『豆理郡史』  
豆理町教育委員会 1997 「塙の内道路」豆理町文化財調査報告書第 7 集  
豆理町教育委員会 2015 「三十三間官衙道路と周辺の遺跡群」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

# 報告書抄録

ふりがな	たにはらいせき						
書名	谷原遺跡						
副書名	町道24号山下寺線道路改良工事に係る発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	山元町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第12集						
編著者名	山田隆博						
編集機関	山元町教育委員会						
所在地	〒989-2203 宮城県亘理郡山元町渡生原字日向 12-1 電話 0223-37-5116						
発行年月日	平成28(2016)年5月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	位置	調査期間	調査面積	調査原因	
たにはら 谷原遺跡	宮城県 亘理郡 山元町 山寺字 谷原	043621	14067 37 度 58 分 05 秒	北緯 140 度 52 分 06 秒	2008.10.21 ～2008.12.18	1,885 m <sup>2</sup>	町道24号山下寺線道路改良工事に係る本調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
谷原遺跡	散布地	縄文時代	土坑	縄文土器・石器	土坑5基(SK4・8・13～15) 遺物包含層(基本層V層)		
	集落	平安時代	掘立柱建物跡、溝跡、土坑 施化遺構	土師器・須恵器	掘立柱建物跡5棟(SB1～5) 溝跡2条(SD1・2) 施化遺構1基(SX1) 遺物包含層(基本層V層)		
	集落	中世	掘立柱建物跡、その他ピット	中世陶器	掘立柱建物跡1棟(SB6) ピット多数		
	—	時期不明	土坑、溝跡、施化遺構	縄文土器・石器・土師器・ 須恵器	(縄文時代以降) 土坑3基(SK6・7・16) 施化遺構1基(SX3) (平安時代以降) 溝跡1条(SX3) 土坑7基(SK1～3・5・9・10・12) 施化遺構1基(SX2) (時期不明) 土坑1基(SK11)		
	要約	<p>谷原遺跡は、宮城県亘理郡山元町山寺字谷原に所在し、山元町役場の北西約1.0kmに位置する。遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵東側の谷原川と山寺川に挟まれた標高17～20mの小低丘上位に立地する。遺跡の範囲は、東西23m、南北14mほどの広がりをもつ、遺跡の時期は縄文時代～中世にわたる。</p> <p>今回の調査(1次調査)で検出した遺跡は、掘立柱建物跡6棟、溝跡3条、土坑16基、施化遺構3基、柱穴・ピット107個(掘立柱建物跡を構成する柱穴も含む)である。これらの遺跡からは、縄文土器、土師器(非クロロ成形・クロロ成形)、須恵器、中世陶器、鉄滓、鉄製品、石器が出土した。</p> <p>縄文時代の遺跡には、土坑5基(SK4・8・13～15)・遺物包含層(基本層V層)がある。これらの遺跡はB区東半に分布しており、出土遺物の特徴から概ね縄文時代後期初期前後のものとみられる。</p> <p>平安時代の遺跡には、掘立柱建物跡5棟(SB1～5)、溝跡2条(SD1・2)、施化遺構1基(SX3)、遺物包含層(基本層V層)がある。掘立柱建物跡と溝跡は調査区西側(A区)、施化遺構・遺物包含層は東側(B区東部)に分布しており、出土遺物の特徴から概ね平安時代前半のものとみられる。</p> <p>中世の遺跡には、掘立柱建物跡1棟(SB6)、その他の柱穴・ピット多数がある。</p> <p>この他、時期不明の遺跡が多数残されているが、これらの多くは縄文時代・平安時代・中世のいずれかの時期に属する可能性が考えられる。</p>					

---

山元町文化財調査報告書第12集

## 谷原遺跡

一町道24号山下寺越道路改貢工事に係る発掘調査報告書-

平成28年5月31日発行

発行 山元町教育委員会  
宮城県亘理郡山元町浅生原字日向12-1  
TEL0223-37-5116 / FAX0223-37-0119

印刷 株式会社 東北プリント  
宮城県仙台市青葉区立町24-24

---